

アポロは今やアムフィアラウスが死したりし故、魂の氣高きポリフィイデイズを預言者に爲し、人々の首長に立つものと爲しき。彼はその父と争へりし爲めその住居をハイフィイレシアに移し、その處に住ひて總ての人々にまで預言を爲しき。

今しもテイレマカスに近づき來りてその傍に立ちしは、かの人の子にしてシオクリミイナスと呼ばれたる者なりき。シオクリミイナスはテイレマカスがかの速かなる黒き船のところ^に在りて飲物を注ぎ捧げて祈り求めたるを見出しき。乃ちその聲を出だして彼はテイレマカスにまで翼ある言葉を語りき――

『友よ、我は汝がこの處に犠牲を燐き捧げたるを見出だせるなれば、汝の捧げ物に依りて、かの神に依りて、然る後汝目らの柱に依りて、又汝の仲間なる人々の名に於て汝に乞ひ求む。願くばまことに我が問ふところに答へて、それを包み隠すことを爲さざれ。汝は人々の子等の中に在りて何者ぞ、又何處より來りしぞ。汝を生みしところの人々の住める汝の市は何處に在りや。』

賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、『さなり今、他處人よ、我は明らさまに汝に告ぐ可し我はイサカの生れにして、我が父は會つて在りしところのオディシュウスなれど、今彼は悪しき運命に依りて滅びたり。この故に我は我が仲間等と一艘の黒き船とを率ゐて、久しく速くに在りし

ところの我が父の消息を聞かむため出で來れるなり。』

その時神の如きシオクリミイナスは再び彼にまで語りき、『恰かもその如く我も亦我自らの族なる一人を殺ししことの故に我が國を脱れ來れり。しかして殺されし者の多くの兄弟達と近親等とは馬の牧場なるアルゴスに在りて、勢強く希臘人等を統治めたり。この故に今我は彼等の手より死と暗き運命とを受けさらむ爲め流浪者となれり。何となれば、尙ほ人々の間に在りて彷徨ひ渡るは我が宿命なればなり。今我は我自ら脱るを得む爲め汝に願ひ求むるなれば汝の船に我を入れよかし。然らざれば彼等は全く我を屠り殺さむ。何となれば、我が思ふに彼等は我が後に近く追ひ迫りたればなり。』

賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、『げに我は汝にして來ることを願はば、我等の善き船より汝を追ひ斥けざる可し。されば汝は我等と共に従ひ來れ。しかしてイサカに在りては汝は我等の有てる程の物をもて悦び迎へらる可し。』

斯く言ひて彼はシオクリミイナスの手より青銅の槍を取り、彫刻を施したる船の甲板にそれを横たへ、彼自らも亦船の上を渡り行くところの船に上りき。やがて彼は船尾の方に自ら坐り、シオクリミイナスをして彼の傍に坐らしめき。しかして彼の仲間等は大綱を解き放ちき。その時テイ

レマカスは彼の仲間等呼びかけ、彼等をして船の道具に手を置かしめき。速かに彼等はテイレマカスの指圖に聴き従ひき。かくて彼等は松の樹の帆柱を起して、それを横板の孔に樹て、前索をもてそれを結び固め、牡牛の皮の撚繩をもて白き帆を掲げき。しかして灰色の眼したるアシイニは、かの船が速かに、潮海の水を越えてその途を行き了ふることを得む爲め、朗かなる空を強く吹き渡るところの宜しき風を彼等にまで送り與へき。斯くて彼等は流れ麗しき國なるクラウエとチャルシスとを渡り過ぎぬ。

日は沈みて、總ての道は暗くなりき。さて船はデユウスの風の前に急ぎ進みてフィイエにまで近づき、それよりエペア人等の統治めたる善きエリスを過ぎ行きぬ。その處より彼は、彼が死を免る可きか或は免がれざる可きかを思ひ惑ひつつも、かの「尖れる島々」にまで再び漕ぎ進みき。

さてオデイイシユウスとかの善き豚飼の翁とは小屋の中に食事を爲してあり、他の人々等も亦彼等と共に食物を前にして坐したりき。斯くて彼等が飲み食ひの慾を満たしたりし時、オデイイシユウスはかの豚飼の翁が尙ほ忠實に彼を歡待し、その處に彼を留らしむ可きか、或は彼を市にまで送り出だす可きか、それに就きて豚飼の翁を試みむため彼等の間に在りて語りき——

「ユウメイユウスよ、又その仲間なる總ての他の人々よ、今聽け。明朝我は市に行きて乞食を爲さむことを願へり。我は汝と汝の仲間等とを滅ぼす者たることを願はざればなり。今我に善き助言を與へて、かの市に我を導き行く可き善き案内の者を貸せよかし、しかして我が爲さざるを得ざる如く、ただ一人にして我は市の間を彷徨ひ行く可し。さらば一杯の水と一片の麵麩とを我に與ふる者或は在らむ。しかのみならず我は神聖なるオデイシユウスの家に行き、かの賢きピネロオビにまで消息を齎らし、恣なる求婚者等と相見る可し。さらば彼等は彼等の有てる限りなき蓄への中よりして一つの食事を我に許し與ふることあらむ。我は容易く彼等の間に在りて善き務めを爲し、彼等が願ひ求むるところの總てを爲すことを得む。何となれば、見よ、我は汝に告ぐ可ければ、汝は心をとめ、耳を傾けよかし。總ての人々の仕事に恵みと榮えとを與ふるところの使者なるハアミイズの恵みに依りて、人に仕ふる者の業に於て我と肩を並ぶるところの如何なる人間も在ることなし。乃ち薪をたきつくることに於いて、乾きたる樹を切り割くことに於て、肉を切り分ち又燻くことに於いて、葡萄酒を注ぎ出だすことに於いて、賤しき人々が身分よき人々になすところのそれ等の務めに於いて、我れと肩を並ぶるところの如何なる人間も在ることなし。」

その時豚飼の翁なるユウメイユウスは心重く彼れにまで語りき、『嗚呼、他處人よ、何故なれば斯くの如き思ひは汝の心の中に起りしぞ。汝若しまことにかの求婚者等の群れるところに行かむことを願はば、恐らく汝はその處に滅び去ることを免かれざる可し。何となればかの求婚者等の恣にして邪なる行ひは犯し難き天上にまで知れ渡りたればなり。汝が如き人々は彼等の僕等にあらす。彼等に仕ふるところの人々は年若くして、華かなる外套と上衣とを纏ひてあり、彼等の首長は油を塗られてあり、彼等の面は麗しく、その磨きたてられたる食卓には麴麩と肉と葡萄酒とをうづ高く盛り上げたり。さなり、汝はこの處にとどまれ。何となれば我も、我と共に我が仲間なる何人も、汝が留ることによりて、些かも惱まされざればなり。されどオデイシユウスの親愛なる子が來るとき、彼は汝が着物として外套と上衣とを汝に與せ可く、又汝の心と魂との汝をして行かしむるところの何處へなりも汝を送る可し。』

その時殺き善きオデイシユウスは彼に答へき、『嗚呼、汝は汝が我にまで親愛なる如く、その如くたしかに父なるヂユウスにまで親愛なるを得よ。何となれば、汝は漂泊と恐るべき哀みとより我を休ませたればなり。人々にとりては、流浪し渡るより勝りて痛ましき如何なるものもあらじされど、漂泊と苦難とに襲はれたる人々も、彼等の魂ましき口腹の愁の故に酷しき困苦をも堪へ

忍ぶなり。しかはあれど今見よ、汝はこの處に我を引き止め、我をして彼の來るを待たしめたるなれば、神聖なるオデイシユウスが出で去りし時彼のあとに残したりしところの、その時既に老境に入りたりしところの彼の母につきて、また彼の父につきて我に告げ知らせよ。思ふに彼等は尙ほ日の下に生きながらへたるか、或は既に死してヘエデイイズの家の中に赴きたるか。』

その時彼にまで、人々の主人なるかの豚飼の翁は語りき、『さなり今、他處人よ、我はあからさまに總てを汝に告げ知らすべし。レアアルテイイズは尙ほ生きながらへてあり、彼の命が彼の家の内にて彼の手足より盡き去るを得むことの爲め、つねにヂユウスの神にまで祈れり。何となれば、彼は遠く距りたる彼の子の爲めに、又彼の賢き妻の爲めに一方ならぬ哀みをなしたればなり。とり分け、彼女の死したることは彼を苦み惱ましめ、いまだ其時知らざるに夙くも彼を老ひ衰へしめき。今彼女は彼女の名高き子を哀み悼みしことの故に、悪しき死によりて死に行きしなり。この處に住める、而して言にも行にも我と友なる何人も、その如く死に行くことなけれかし。多くの悲の中にありながらも、尙ほ彼女の生き存へたりし間は、我は彼女につきて問ひ尋ねることを悦べりき。何となれば、彼女は彼女の氣高き女なる、彼女の兒等の中いと若き者なる、衣長きタイミインと共に我を養ひ育てき。彼女と共に我は養ひ育てられき。而して彼女に劣るところな

く敬はれたりき。されど我等二人が我等の悦ばしき花盛りなる年頃に到りし時、その時人々は彼女をセエミへ送りて、花嫁の大なる價を獲き。されど我が女主は甚だ麗はしき衣裳を、一の外套と一の上衣とを我に纏はしめ、我が足にとてさんだるすを我に與へ、我を野にまで送り出だしき。而してその真心の底よりして我をいつくしみたりき。されど此等の物を今や終に我は缺きたり。しかも尙ほ祝福せられたる神々は、我が従へる我目らの手の業を榮えしめたり。この我が持物の中より我れは飲み且つ食ひ、敬はれたる他處人等にまでに與へたり。されど我が女主より我は、言も行も、悦ばしき如何なるものをも聞くこと能はず。何となれば、彼女の家に悪しき事は、恥知らぬ人々の禍は襲ひ來りたればなり。さあれ僕等は、彼等の女主の前に語ることの、總てを見出でて飲み且つ食ふことの、又苟くも僕の心を慰め喜ばすほどの何物かを、野にまで携へ去ることの大なる願を有てるなり。』

智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき、『嗚呼、ユウメエユウスよ、汝は尙ほ汝が幼かりし間に、汝自らの國と汝の父母とよりはなれて、如何に遠く漂泊ひ來りしかな。されどいざ、この事を我に述べ、總てを明らさまに告げ知らせよ。汝の父と汝の母との住めりし、人々の大なる市は取られ、また掠められたりしか。或は羊を、又牛などを飼へる汝ただひとり敵人等は

見出でて、船にて其處より汝を連れ去り、汝の爲めに一の善き値を拂ひし、この處なる汝の主人の家にまで汝を賣りしか。』

その時彼にまで、人々の主人たる豚飼は語りき『他處人よ、汝はそれにつきて我に問ひ尋ぬるなれば、今靜かになして心を留め、葡萄酒を飲みながらこの處にありて楽しくせよかし。見よ、この頃の夜は長し。眠るべき時もあるれば、耳を傾けて悦ぶべき時もあり。汝はその時知らざる前に寢床に行くことを須ひす。餘りに多くを眠るは魂を害はむ。されど他の人につきて言はば、心と胸とよりねがふところの者をして行き且つ眠らしめよ。而して夜の明くると共に彼の朝食を取り、我等の主人の豚に従ひ行かしめよ。されど我等二人はこの小舎の内に飲み且つ食ひ、各々その隣人の哀みを想ひ出でつつ、それを悦び樂まむ。何となれば、悲痛なる事の思出は醉しき困難を嘗め味ひ遠く流浪したる人間にまで一の悦びなればなり。この故に我は汝が我に問ひ尋ぬるところの事を汝に告げ知らすべし。』

汝或は聞きつることあらむ、オルティチアの上を越え行けばシリアと呼ぶところの一の嶋あり而してそは太陽の向きを變ふるところなり。そはあまり廣き土地ならねど、まことに宜しき嶋にして、牛馬の群に富み、羊の群に富み、穀物と葡萄酒とも富みたり。飢饉はかつてその地に入

ることなく、また如何なる忌まはしき病もあはれなる人間を襲ひ來ることなし。されど人間の族かその市にありて老ひ來る時、その時銀の弓をもてるアポロはアルティイミズと共に來り、彼の柔かなる箭を射下して彼等を屠り殺すなり。かの嶋には二の市あり。嶋のすべてはその市々に區分され、我が父は、不死なる神々にひとしき人、オルミイナスの子ティイジアスはその二の部分に王たりき。

その處へ航海者として名を知られたるフェニシア人等は、貪婪なる商人なる彼等は一の黒き船に夥しききらびやかなる品物を積みて來りき。さて我が父の家に、丈高く麗はしく、また輝かしき手工に巧なる一人のフェニシア人の婦ありき。その婦をフェニシア人等は彼等の奸計をもて欺きぬ。先づ彼女が着物を洗ひ濯ぎたりし時、彼等の一人は空洞なる船のほとりにして彼女と愛情の床を一つにしき。何となれば、愛情は婦人の心を、正しき婦人の心をさへも欺き迷はすものなればなり。その時彼は彼女が何人なりしかを、また何處より彼女の來りしかを問ひ尋ねき。而して直に彼女は我が父の高級家居を彼に告げ示して言へりき——

「我はかの青銅に富める國、シドンに生れしものなり。我は富豪アリバスの女たり。されど海賊なりシクファイア人等は、我が野より歸り來れりし時我に手を置きて我を奪ひ去り、我をこの處へ

連れ來り、我が爲めに善き値を拂ひしところの我が主人の家にまで我を賣りしなり。」

その時、密かに彼女と臥ねしところの者は答へき、「そもそも汝は、汝が再び汝の父母の高級家を、また彼等の面を見るを得む爲め、今我等と共に故郷に歸り行くことをねがふや。何となればまことに彼等は尙ほ生きながらへてあり、富豪の名を保ちたればなり。」

その時かの婦は彼に答へて言へりき、「汝等水夫にして若し、泰らかに我を故郷へ連れ歸ることの誓を我に爲さば、乃ち我はよく汝が言ふところの如くなるを得む。」

斯く彼女は語りき。而して彼等すべては彼女の言ひつけし如くそれに誓ひをなしき。今彼等が誓ひをなしたりし時、再びかの婦は彼等の間に語りて言へりき——

「今汝等安らかにしてあれ。汝等の仲間等が巷にて、或は井戸の邊にて我に出で會はむとも、汝等の何人も我に物言ひて挨拶すること勿れ。然らざれば人は行きてそれを家の内なるかの老ひたる人に告げ知らせむ。しかして彼は何等かの疑ひを起して嚴しき繩目に我を縛め、汝等の總ての爲めに死を謀らむ。されど汝等はこのことを心の中に秘め隠し、汝等の積み歸る可き荷物の交易を撈らせよ。しかして汝等の船に積荷の爲されたる時、一人の使をして速かに家の内なる我にまで來らしめよ。何となれば、我も亦金を、我が手の届く限りなる總てのものを齎す可ければな

り。げに、我が悦びて我自らの賃金に齎し行く可き今一つのものあり。我は館の内やかたに在りて我が主の兒めづたに乳人の役を務めたり。そは我と共に外面そとに走り出づるところのいと聰とくしき少年なり。彼を我は船にまで連れ來らむ。さらば彼は何處どこにてもあれ汝等が異なる言葉を用ゆる人々の間に賣り行かば、大いなる價あきを汝等に得さすべし。」

斯く言ひて彼女は、かの麗うつくしき館やかたにまでその道を行けり。されど彼等は一歳ひととせの總ひらてに亘りて我等の間に留り、彼等の空洞くわうくわうなる船に多くの富を寄せ集めたりき。しかして彼等の空洞なる船が今船出ふなでするに足る程荷積にせまれたりし時、彼等あなはかの婦あなにまで消息しづすべく一人の使を送りき。乃ち一人の狡猾こつぱつなる男はとどころを琥珀あまの玉をもて繋つながれたる金の鎖くわを携へて我が父の家いへにまで來りき。今館の内なる少女等と我が母とは、その鎖くわを手にとりて打ち眺め、又彼にその鎖くわの價あきを取り出だしてありき。その時彼は無言の儘ままにしてかの婦あなにまで合圖あひづを爲し、斯くして空洞くわうくわうなる船にまで歸り去りき。やがて彼女は我が手を取りて、我が家より我を導き出だしき。家の前側まへがはなる房むらにて彼女は、我が父を取り巻ける客人等の飲み食たべひしたりしところの食卓と盃さかずきとを見出だしき。彼等は人々の集會あひまひの場所に去り行きたりしなり。乃ち彼女は直ちに三つの盃さかずきを彼女の胸むねに隠してそれを運び去りき。我は何を疑ふ心も無くして従したがひ行きぬ。やがて日は沈みて總ひらての道は暗

くなりき。我等は速はやかに行き行きて、フェニシア人等の速はやかなる船の在りしところのかの善き港みなとにまで來りき。かくて彼等は船に上り、彼等と共に我等をも船に乗せて、濡ぬれたる海の道を漕こぎ出でき。しかしてデュウスの神は宜よろしき風を我等の後に送りき。六日に亘りて我等は晝も夜も絶たえ間なく越え渡りき。されどクロオノスの子なるデュウスがそれに七日目を附け加へたりし時、その時弓を射るものアルティイミズはかの婦を襲おそひ撃ち、彼女は海の燕つばきの落つる如く、身を翻ひして船底ふなぞこにまで落ちき。彼等は彼女を海に投げ出だして海約あまらしと魚との餌食えしに爲しき。我は心哀あはしく取り殘されき。さて風と水とは彼等あなを運びて、イサカの地にまで連れ來りき。その處にてレエアルティイズは彼の所有物もつものをもて我を贖あがひき。斯くして我が眼はこの國を見るに至りしなり。」

その時デュウスの種なるオディシユウスは彼に答へて言へりき——

「ユウメイユウスよ、げに汝は汝が耐へ忍びたるあらゆる心の悲しみの物語をもて、總ひらてのこれらの事の物語をもて、我が内うちなる心を動かしたり。されど恐らくデュウスは悪しきものと共に善き物をも汝に與へたるべし。何となれば、總ひらてのこれ等の危き事を冒したる後、汝は汝に飲み食たべひする物ものを與ふことに心を用ゆるところの、一人の懇こなる人の家いへにまで來り、げに善く汝は汝の日を送りてあればなり。されど我は尙ほ人々の多くの市々いちまちを彷徨あふひ渡りてこの處へ來りし

なり。』

斯く彼等は互に相語りき。やがて彼等は暫くの間を眠る可く横たはりき。されどそはまことに短き時の間なりき。何となれば、間も無くかの金の玉座に坐したるあかつきは來りければなり。されど岸邊にありてティレマカスの仲間等は彼等の帆を捲き收め、速かに帆柱を横たへて、碇を下す可きところにまで船を漕ぎ進みき。さて彼等は碇を下し、大綱を結び固め、彼等自らも亦海の潜に降り立ちて、晝の食事の備へを爲し、暗き葡萄酒を飲みよくしき。今彼等が飲み食ひの慾を満たしたりし時、賢きティレマカスは彼等の間に在りて先づ語りき――

『汝等は今市にまで黒き船をやれよかし。その間に我は野に行き、かの家畜を飼ふ人々にまで行く可し。しかして日の暮るる頃我は我が土地を見たる後かの市にまで引き返す可し。さてあくる朝我はこの船旅のねぎらひを、肉と甘き葡萄酒との善き馳走を汝等の傍に置く可し。』

その時神の如きシオクリミイナスは彼に答へき、『さて親愛なる兒よ、何處へか我は行く可きぞ。岩根こごしきイサカに君臨せる人々の中、如何なる人の家にか我は赴く可きぞ。我は直ちに汝の母にまで、汝の家^{まで}にまで赴く可きか。』

その時賢きティレマカスは彼に答へて言へりき、『他なる場合に在りては、我は汝をして我等自

らの家にまで行かしめたる可し。何となればその處には他處人等を歡待すべき如何なる物にも缺くるところ無ければなり。されど今そは汝自らに取りてより悪しかる可し。我は離れて在らざる可からず、また我が母は汝を見ざるべきなれば、げにそはより悪しかるべし。彼女は家の中にて求婚者等の目の當りに出づること稀にして、彼女の上なる房に彼等より離れて暮らし、彼女の織機に向ひていそしめり。されどその處には我が汝に告げ知らせむことを願ふところの一人あり。その人にまで汝は行くことを得む。乃ち賢きオリムパスの名高き見なるユウリマカスにして、その人を今イサカの人々は、恰も神にてもありしかの如く見做したり。何となれば、彼はすべての求婚者等の中にていと傑れたる者にして、又我が母を娶り、オデイシヌウスの位を受け繼がむことをいと切に願ひ求めたればなり。されど、朗かなる天に住めるオリムパスのデニウスは、彼が彼等の婚姻に先きだちて悪しき日を彼等の爲めに來すべきや否やに就きて知れるなり。』

今彼が斯く語りし時、一羽の鳥は右手の方に當りて飛び出でき。そはアポロの速かなる使の鷹なり。その爪の内に彼は一羽の鳩を抱きて、その鳩の毛を捲り、その羽根をか^かの船とティレマカス彼自らとの間なる地の上に注ぎ下だしき。その時シオクリミイナスはティレマカスの仲間等を離れたる彼に呼び掛け、彼の手を握りしめ、彼を祝して語りき――

「ティレマカスよ、思ふに神の願ふところにあらずしてはかの鳥の右手の方に當りて飛び出づることなかる可し。何となれば、我はかの鳥を見し時、彼が前徴の鳥なることを知りければなりイサカの地に在りては、汝等家のより勝りて王者の家と思はるる如何なるものもあることなし。」さなり汝等はいつまでも王の家の人々たるなり。」

賢きティレマカスは彼に答へて言へりき、「嗚呼、他處人よ、願くばこの言葉の成し遂げられてあれかし。間もなく汝は我が手より懇なる歡待を受け、多くの贈物を與へらる可く、斯くて汝に出で會ふ程の如何なる人も汝を呼びて祝福せられたる者と言ふべし。」

その時彼は彼の信任せる仲間なるパイレイユウスにまで語りき、「クライティアスの兒なるパイレイユウスよ、我と共にバイロスにまで赴きしところの總ての我が仲間等の中、他なる場合に於ていとよく我に聽き従ふ汝は、願くば今も亦、この他處人を汝自らと共に汝の家に導き歸り、我が到るまで汝の家に在りて、やさしく且つ敬ひて彼を歡待すことに心を用ゐよ。」

その時槍をつかふものとして名の聞えたるパイレイユウスは彼に答へて言へりき、「ティレマカスよ、汝の言葉を須つまでもなきことなり。たとへ汝がこの處に久しく留りたらむとも、尙ほ且つ我はこの人を歡待すべく、彼は他處人の歡待を受くる上に何等の足らざるところなかる可

し。

斯く言ひて彼は船に乗り、彼の人々自らも船に上りて大綱を解き放つことを言ひつけぬ。さて速かに彼は船に上りて腰掛の上に坐りき。ティレマカスは彼の善きさんだるすを足の下に結びつけ、鋭き青銅をかぶせたる一つの大きいなる槍を船の甲板より取り上げき。しかして彼の人々は大綱を解き放ちき。かくて彼等は神聖なるオディシユウスの親愛なる兒ティレマカスが彼等に言ひつけし如く、船を出だして市にまで漕ぎ進みき。されど彼の足は速かに彼をこの道に運び行き、遂に彼は數知れぬ豚の在りしところなるかの廣場にまで到り着きぬ。しかして彼等の間に在りて、彼の主等にまで忠實なる人は、かの善き豚飼の翁は眠りたりき。」

第十六章

テイレマカスはユウメイユウスを市に送りて彼の歸りしことを彼の母に告げ知らしむ。しかしてその間にオディシユウスは彼自らを彼の子にまで露し示しき。

今此等の二人は、オディシユウスと善き豚飼とは小屋の中に火を焚きて、朝の食事に備へを爲し、又豚の群と共にそれを飼ふ人々を送り出したりき。さてテイレマカスが近づき來りし時、吠え立つるを慣ひとするところの犬等は彼のまはりに阿り戯れて、吠え立つることを爲さざりき。善きオディシユウスは犬等の阿り戯れたるを心附き、又足音のひびきは彼の耳を襲ひ來りき。その時直ちに彼はユウメイユウスにまで翼ある言葉を語りき——

『ユウメイユウスよ、げに或友は、或は汝と相親しき何等かの他なる人は間も無くこの處に來る可し。何となれば、かの犬等は吠え立つることを爲さずして、邊りに阿り戯れてあり。我は足

音のひびきを聞けばなり。』

この言葉の尙ほ彼の唇に留まれりし間に、彼自らの親愛なる子は門の入口のところ立ちき。その時豚飼は打ち驚きて跳び立ち、彼が暗き葡萄酒を滅めることに用ゐたりしところの容器は彼の手を滑り落ちき。彼はその主の眞向ひに來りて、彼の頭を、二つの彼の麗しき眼を、又二つの彼の手を接吻し、大なる涙を落ちしめき。しかして恰もやさしき父が、十歳振りにして遠き國より來りし彼の子を、その爲めに大いなる悲しみと苦しみを爲したりし處の、最愛の一人子を悦び迎ふる時の如く、その時の如く善き豚飼は神の如きテイレマカスの頸に跳びかかりて、死を脱れし人の如く彼に接吻しつくし、聲をあげて泣き、さて彼にまで翼ある言葉を語りき——

『テイレマカスよ、汝は暗闇の中なるなづかしき光の如くして來れり。我は汝が汝の船にてパイロスにまで赴きたりし後、遂に再び見ることあらざるべしと思ひき。親しき兒よ、いざ入り來れ。新しく遠くより來りしところの汝を我が家の中に見て、我が心の悦ぶことを得む爲めに入り來れ。何となれば、汝は野と家畜を飼ふ人とをしばしば訪ることを爲さずして、かの市の中に留ればなり。斯く汝の善き悦びは恐るべき求婚者等の群り集れるを見ることにありしものと見ゆ。』

その時賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、『父の如き人よ、さらば汝が言ふところの如く

なれ。汝の爲めに我は我自らの眼をもて汝を見、汝の唇より次のことを聞かむとてこの處に來れり。我が母は尙ほかの館の中に留れりや。或は他なる者すでに彼女を娶りて、オデイシユウスの床は寝ぬる人もなく、きたなき蜘蛛の巢に埋もりて横はれりや。」

その時人々の主なるかの豚飼は彼に答へき、「げにさなり、かの女は辛抱強き魂をもて汝の館に留りてあり、夜となく晝となく常に涙の中に物憂き時は彼女にまで過ぎ行けるなり。」

斯く彼は語りて青銅の槍を彼より取りき。その時テイレマカスは入り來りて、石の敷席を横ぎりき。彼の近づきし時、彼の父なるオデイシユウスは彼に坐るところを與へむとてその腰掛より立ち上りき。されどテイレマカス彼自らはオデイシユウスを押しとどめて言へりき——

「他處人よ、汝の腰掛にかけてあれかし。我等は我等の小屋の中なる他の何等かのところに腰掛を見出す可し。しかして我等の爲めにその心遣ひを爲す可き人はこの處にあるなり。」

斯く彼は語りき。乃ちオデイシユウスは再び腰を下ろしき。かの豚飼はテイレマカスの爲めに青き芝を下に撒き敷き、その上に羊の毛を敷きぬ。しかして直ちにオデイシユウスの纒愛なる子はその處に腰を下ろしき。次にかの豚飼は彼等の傍に燻肉の淺鉢を置きぬ。前の日の食事の殘物なり。さて小麦の麵麩を彼は手早く籠に盛り上げ、常春藤の鉢にて蜜の如く甘き葡萄

酒を味ひよく薄めて、彼自ら神聖なるオデイシユウスの眞向ひに坐りき。斯くて彼等は彼等の前に置かれたる善き馳走の上にその手を差し伸べき。今彼等が飲み食ひの慾を満たしたりし時、テイレマカスはかの善き豚飼にまで語りて言へりき——

「父よ、この他處人は何處より汝にまで來りしぞ。如何にして水夫等は彼をイサカへ連れ來りしぞ。又抑々その水夫等は何處の者ぞ。何となれば、我が思ふに彼は決して陸上よりこの處に來りしものにあらざる可ければなり。」

その時豚飼のユウメイユウスは答へをなしき、「我が兒よ、さなり今、我は汝に總ての眞實を告げ知らす可し。彼は廣きクリイトの地に生れたり。しかして彼の言ふところに依れば、人間の多くの市々を彷徨ひ渡りて危き事を彼は冒したり。そは何等かの神ありて彼の爲めにかかる運命の絲を紡ぎしならむ。されど今、シスプロウト人等の船より逃亡したるものとして彼は我が小屋にまで來れり。しかして我は汝の爲めに彼を汝に與ふ可し。彼に就きては汝の思ふところの如く爲せ。彼は汝に倚り頼むことを爲さむ。」

その時賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、「ユウメイユウスよ、げに汝が語るところのこの言葉は宜しからず。まことに我は如何にしてかこの客人を我が家に迎へ入るべきぞ。我自らは

年若く、謂はれなく害悪を加ふる所の者に對して、我自らを護り禦ぐ可く、我が手の力を未だ尙ほ頼むこと能はざるなり。しかして我が母はその心を二つに爲したり。乃ち彼女の妻の寢床と人民の聲とを重んじて、この處に我と共に留り、この家を護り行く可きか、或は言ひ寄れる希臘人の中なる何人にもあれ、そのいと善きものにして、且ついと多くの花嫁の贈物を與ふところの人と共に、直に去り行く可きかに就きてその心を二つに爲したり。されど見よ、汝のこの客人に就きて言へば、彼は汝の家に来て來れるなれば、我は善き着物の外套と上衣とを彼に着せ、尖の二つに分れたる劍と彼の足に穿かす可き靴とを彼に與へ、又何處にもあれ彼の心と彼の魂との彼をして行かしむるところへ、彼を送りやる可し。或は、汝にして若し願はば、この小屋の内に彼を留め置きて、彼の爲めに心を用ゐよ。しかして彼が汝と汝の仲間等とを滅ぼすことなからむ爲め、我は彼の着物を、又さまざまの食ふ可き物をこの處に送り來る可し。されどかの求婚者等の集れるところにまで、彼をして行かしむることを我は爲さざる可し。何となれば、餘りにも傲慢の心に酔ひ痴れたる彼等は彼を嘲り弄ぶ可く、しかしてそのことは我にまで堪へ難き悲しみとなる可ければなり。しかして群衆の間に在りて何等かの事を企てむとするは、如何に勇しき人の場合ならむとも、決して容易き業にあらず。何となれば、げに彼等は遙かにより強き者なればなり。」

その時かの殺き善きオディシユウスは彼に答へき、「我が友よ、汝に答ふるはまことに我が許さるるところなれば、我は汝に答へむ。げに我が心は汝の言葉を我が聞く時に張り裂くるばかりなり。何となれば、汝等は如何にかの求婚者等が、斯くも氣高き人なる汝を憚らずしてかの館の中に、後前を辨へざる業を企らめるかを語ればなり。抑々、汝は彼等の暴虐に甘んじて従へるにや。或は市の總ての人々は或神の聲に聽き従ひて、汝を憎み嫌へるにや。或は汝は相争へる間ならむとも、斯かる場合には汝を救はざる可からざる。汝の兄弟達に責むべき事を有てるにや。嗚呼、願くば今我が魂を有てる如く年若さをも有ちたらしましかば。しかして氣高きオディシユウスの子或はオディシユウス彼自らにてあらましかば。その時彼にして若し直ちにレエアルテイイズの子なるオディシユウスの館に赴き、我自らを彼等の間なる各の人の禍と爲すことなからむにはさらば如何なる人にもあれ、我が頸を切り離せよかし。されど彼等にして若し、その如くあまたなる者に對するただ一人としての我を、數によりて打ち負かすことあらむには、さらば我はそれ等のいかがはしき振舞を目の當りに見むよりも、寧ろ我自らの家の内にて屠り殺さるることを願ふなり。乃ち今他處人等は淺ましく取扱はれてあり、人々は麗はしき家の内にして猥りがはしく侍女等を惱ましてあり、葡萄酒は徒らに飲み棄てられてあり、かの求婚者等は涯知らぬ愚かな

る行ひを爲して何等の償はさるる事なく、憚らず食物を食ひ盡くしてありと聞けばなり。』

其時賢きティレマカスは彼に答へて言へりき、『さなり今、他處人よ、我は明らさまに總てを汝に告げ知らす可し。總ての人々に依りて我が上にもたれたる如何なる恨みと憎しみともあることなし。又我は、よし相争へる間ならむとも、他なる場合には我を助けざるべからざる、我が兄弟連を責むべきものをもてるにあらず。何となれば、汝の見る如くクロオノスの子なるデュウスは斯く、我等の家をただ一人のものの相續すべき家となしたればなり。乃ちアルシイジアスはただ一人の子なるレエアルティイズを生み、ただ一人の子なるオディシユウスは彼の父より生れ、オディシユウスは彼の生みただ一人の子として我を此等の館に残し置きて、我を如何なる悦びとも爲すことなかりき。この故に今敵人等は（オノス）この故の内にてその數を知らざるなり。乃ちダリチアム、セイミ、並びに森深きザシンザスなどに、島々に君臨せる總ての高貴なる人々は、我が母に言ひよりに我が家を荒せるなり。されど彼女自らはかのいまはしき求婚を拒み斥くることなく、又纏りをつくる心をも有つことなし。斯くて彼等は我が家を飲み盡し食ひへらすなり。しかして遠からずして彼等は我自らをもひとしく滅ぼすなるべし。されどこれ等のことは恐らく神々の定むるところに依りて定めらるるものならむ。さなり父の如き人よ、されど汝は急ぎ行きてかの操正しき、

ピネロオピに告げ知らせよかし。彼女にまで安らかにして我が歸り來りしことを、又我がパイロスより歸り來れることを。我自らのことを言へば、我はこの處に留るべし。しかして汝は彼女ただ一人にまでかの消息を告げたりし時、この處に歸り來れ。されど他なる希臘人の何者にもそれを知らしむることなかれ。何となれば、我に對して恐しき事を企らむべき多くの者はある可ければなり。』

その時豚飼ハるユウメイユウスは答へを爲しき、『我は心をとめて聽き、耳を傾けて聽く。總てのこれらのとを汝は分別の明かなる者にまで語らばなり。されどいざ、次の事を我に述べて、明らさまにそれを告げ知らせよ。抑々我はかの哀れなるレエアルティイズにまで消息を携へて同じ道を行く可きや否や、彼は近頃まで、オディシユウスの爲めにいたく悲しめるにもかかはらず、尚ほ且つ耕作の見張りをし、彼の衷なる心の言ひ付けし度毎に彼の家の内に僕等と共に飲み食ひを爲しき。されど今、汝が汝の船にてパイロスにまで赴きし日よりこの時に至るまで、人々の言ふところに依れば、彼はそれまで程に飲み食ひをなさず、野の仕事を見張ることをもなさずして、ただ呻吟（うめい）き嘆きてのみあり、その肉はその骨のまはりに滅び去りつつあるなり。』

その時賢きティレマカスは彼に答へて言へりき、『いよいよ痛ましきことなるかな。されど、我、

等がそれを如何に悲しまむとも、我等は彼をその儘に爲し置くべし。何となれば、人々にして若し善く總てのその願ふところを興へらるることを憐れむには、我等は他の如何なることにも先立ちて我が父の歸國の日を選ぶ可ければなり。されど汝はかの消息を傳へたりし時、直ちに引き返し來り、レエアルテイズの後を追ひて野の間を彷徨ひ渡ることなかれ。されど我が母にまで語れよかし、彼女の力に及ぶ限りの速さをもて、彼女が彼女の侍女をひそかに送り出だし、かの老ひたる人にまで消息を傳ふ可きことを。」

この言葉をもて彼はかの豚飼を勵ましたたしき。乃ち豚飼は彼のさんだるすを手に取り上げ、それを足の下に結びつけ、市に向ひて出で立ちき。今アシイニの神は豚飼のユウメイユウスが彼の小屋より出で去れるを認めき。彼女は麗しく、丈高く、又見事なる手の工に長けたる一人の女の姿をとりて近づき來りき。彼女は小屋の入口の眞向ひに、オデイシユウスにまで露なる姿をなして立ちき。されどティレマカスは彼の前なる彼女を見るとなく、彼女に心づくことなかりき。何となれば神々は決して總てのものにまで露にあらはるることなければなり。されどオデイシユウスは彼女を認め、大共も亦彼女を認めき。彼等は吠えたつることをなさずして、低く暗聲を洩らしながら小屋の遙かなる側にまで縮こまり退きぬ。その時彼女は額を伏せて彼に合圖を爲し

き。善きオデュシユウスはそれを認めて、房より出で來り、かの廣場の大いなる壁を通り抜け彼女の前に立ちき。しかしてアシイニは彼にまで語りて言へりき——

「ヂイウスの種なるレエアルテイズの子よ、智謀に富めるオデイシユウスよ、今や汝の子にまで汝の言葉をあらはし示すべき時なり。汝等二人がかの求婚者等の爲めに死と宿命とを企らみたる後、かの名高き市にまで赴くを得むことの爲めそれを隠さされ。我も亦切に戦ひを望めるなれば、汝等より遠く離れてあらざる可し。」

斯く言ひてアシイニは彼女の金の杖をもてオデイシユウスに觸れき。先づ彼女は一つの新しい上衣と胸衣とを彼の胸のあたりに投げかけ、次に彼の退ましさと若々しさを増し加へき。彼の肌の色は再び暗くなり、彼の頬は丸くふくらみ、黒き鬚は彼の顎のまはりに濃く伸び擴がりき。今彼女は、彼女がその如くなしたる時再び引き退きぬ。されどオデイシユウスは小屋にまで赴きぬ。彼の親愛なる子は彼を驚きあやしみ、そが神なるやも知る可からざることの恐れより眼を逸らしき。彼はその聲を出だしてオデイシユウスにまで翼ある言葉を語りき——

「他處人よ、今汝は我が眼にまで、汝が一刹那の前にありしより他のものなり。また汝は他なる衣裳を身に纏ひてあり。汝の肌の色は最早同じものにあらず。思ふに汝はかの廣き天上を守れる

それ等の神々の中なる一人なる可し。げにさらば、我等がまことに悦ばしき犠牲と、麗しくつくられたる金の贈物とを汝にまで捧ぐるを得むことの爲め恵み深くあれかし。また我等につれなく爲さざれと我は汝に祈るなり。』

その時毅き善きオディシユウスは彼に答へて言へりき、『見よ、如何なる神にても我はあらず。いかなれ、汝は我を不死なる神々に似たるものと爲すにや。さなり、我こそは汝の父なれ。その我が爲めに汝は多くの苦しみと悲しみとをなし、人々の蔑みを忍びしところの、その我なり。』

斯く言ひて彼はその子に接吻しき。しかして彼の頬より一つの涙を地に落ちしめき。それまで彼は絶えず抑止めてありしなり。されどティレマカスは(尙ほそが彼の父なりしことをまことなりと思はざりし故、)オディシユウスに答へて言へりき――

『汝は我が父なるオディシユウスにあらず。寧ろ何等かの神ありて我が更に甚だしき悲しみの爲めに呻吟き嘆かむことの爲めに我を欺き惑はすなり。何となれば、命死ぬ可き人間が彼自らの智慧よりして斯くの如き事を企て得可きにあらず。神ありて彼自らその人を訪れ來り、彼自らの心の儘にその人を若くし或は老ひたる者に爲す事のあらざる限りは。げに、ただ一刹那の前にありては汝は老ひ衰へたる、しかも淺ましきものを纏へる人なりしかど、今や汝はかの廣き天上を守れる、

神々にさも似たり。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき――

『ティレマカスよ、汝の父の歸り來れるを餘りにも甚だしく異しとし、或は驚き呆さるるは汝によさはしからじ。さなり、汝はこの土の處に如何なるオディシユウスの來るをも見出さざる可し。されど見よ、我は、この我こそはさまざまなる苦しみと多くの漂泊ひとを爲したる後、二十歳振りにして我自らの國にまで來れり。見よ、こは獲物を驅るところのアシニの神の業なり。かの神にありては能はざるところのものなければ、彼女の心の儘にさまざまなる人間の姿に我を爲すなり。乃ち時ありては乞食に、又時ありては年若き人に、更に時ありては賢なる衣服を纏へる人になすなり。抑々命死ぬべき人間を氣高きものになし、或は卑しきものになすは、かの廣き天上を守れる神々にとりて容易き業なり。』

斯く言ひてその時彼は再び腰を下ろしき。されどティレマカスは彼の氣高き父の頸に身を投げかけて、悲しみを爲し、涙を流しき。彼等二人の胸の衷には音にたてて泣かまほしき願ひを生みき。乃ち彼等は聲高く音にたてて泣きぬ。そは尙ほ和毛のままなる雛鳥を里人に依りて巢より取り去られたる、海の鷺或は鈎爪の兀鷹などの如き、それ等の鳥の嘆きたつるにも似たりき。そ

の如く哀れにも涙は彼等の眉の下に落ちたりき。さて今彼等の悲しみ嘆けるに日の光の沈み去らむとしたりし時、テイレマカスは俄に彼の父にまで語りて言へりき——

『親愛なる我が父よ、さて如何様なる船にて水夫等は遂に汝をこの處なるイサカにまで連れ歸りしぞ。彼等は抑々何處の者なりしぞ。我が斯く言ふは、汝は陸上よりしてこの處に來りしものとも思はれざればなり。』

さて毅き善きオデイシユウスは彼に答へき、『さなり今、我が兒よ、我は汝に總ての眞實を告げ知らすべし。何人にもあれ自らにまで來るところの他なる人々を、又其道に急ぎたすところの、航海者としてその名を知られたるファイエシア人等は我をこの處に連れ來りき。我がかの速き舟の中に眠れりしを、彼等は海を越えて運び來り、我をイサカの地に下ろし、夥しき青銅と金と、た織物の衣服とを、さまざまの見事なる贈物を我に與へき。しかしてこれ等の財は神々の恵みによりてかの洞の内に置かれたり。されど今我は、かの敵人等を屠る爲めの謀計を爲さむ爲め、アシニの勤めに依りてこの處に來れり。されどいざ、かの求婚者等の總ての物語と彼等の數とを我に告げ知らせよ。さらば我は彼等が如何に多くの又如何なる人々なるかを知ることが得む。さらば我は、我等ただ二人にして加勢せらるることなく彼等に敵對し得可きや否や、或は

我等が他なる人々の加勢を求めざるべからざるや否やを、我がよき胸の衷に思ひ計り思ひ定むる事を得む。』

その時賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、『げに、父よ、我は汝が強き手を有てる選手として、又智謀に富める賢き人として、その名を持って囃されたるを聞きたり。然るにこの汝の言へることは酷し。恐れは我を襲ひ來る。何となれば、二人の人が多くの強き人々と戦ひ得むことはある可からざればなり。乃ちかの求婚者等は皆に十人或は二十人を以て數ふべきにあらざるなり。しかして直ちに汝は我等の別るるに先立ち彼等の物語を聞き知る可し。ダリチアムより五十二人の選ばたる貴族と、彼等に從へる六人の人々と來りてあり。セイミより二十四人の人々來りてあり。ザシンザスより希臘人なる二十人の貴族來りてあり。さてイサカそれ自らよりいと傑れたる十二人の人々來りてあり。彼等と共に僕なるミイドンと、神聖なる樂人と、食物を切り分つに長けたる二人の家従と來りてあり。我等若し家の中に總てのこれ等の人々と出で會ふべくば、汝の彼處に到りし時彼等の暴虐に對する汝の復讐が我等の爲めに痛ましき禍とならざるやう汝は心せよ。されど汝若し何等かの勇士を思出づることを得可くば、その總ての心をもて我等を助く可き何人かの事を思出でよかし。』

その時殺き善きオディシユウスは彼に答へて言へりき——

『さなり今、我は汝に告げ知らすべし。汝は心をとめ、我に耳を傾けよかし。しかしてアシユと父なるヂユウスとが我等二人にて事足らしむるや否や、或は我が何等かの他なる勇士に倚り頼むべきや否やに就きて思ひみよ。』

その時賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、『汝がその名を擧ぐるところの、又高く雲の中にあるところのそれ等の二人は、げにも勇しき加勢者なり。しかして彼等は總ての人々の間に、又不死なる神々の間に權力を有てるなり。』

その時殺き善きオディシユウスは彼に答へき、『されど、我等の家の中にてかの求婚者と我等との間にエエリイズの力強さの試みらるる時、かの二人の神は大いなる軍の騒ぎより高く遠ざかりてあらざるべし。されど差し當りては、汝夜の明くると共に我等の家の方に赴き、かの思ひ上がれる求婚者の仲間に加はれ。我自らの上を言へば、かの豚飼は日の傾く頃市にまで我を導く可し。しかして我は哀れなる、又年老ひたる乞食の姿をなして行く可し。彼等にして若し我等の家にて我を惡しく歡待すことあらむとも、我が淺ましく取扱はるる間にも、汝は汝の心を硬くしてそれを堪へ忍べよ。さなり、彼等若し足を取りて戸口にまで我を引きずり行き、或は我に投げうち

又我を襲ひ撃たむとも、尙ほ且つ汝は目の當りの事を堪へ忍べよ。されど汝は滑かなる言葉をもて彼等を諭し宥めつつ、彼等の愚なる行ひを止めしむるやう努めよかし。汝しかなさむとも、尙ほ且つ彼等は些かも聽き従はざる可し。さなり、彼等の宿命の日は近づきたればなり。我は今一つの事を汝に告げ知らすべければ、汝は汝の心の衷にそれを思ひ計れよ。謀事深きアシユの神がそれを我が心にまで置かむ時、我は我が頭をもて汝にまで合圖すべければ、汝はそれに心せよ。しかして館の内に横たはれる總ての汝の武器を運び去りて、その各のものをかの高き房の奥まりたるところに隠し置け。さてかの求婚者等がそれ等の武器のあらざるに心付き、それに就き汝に問ひ尋ぬる時、汝は次の如き穩かなる言葉をもて彼等を欺き惑はすべし——

「煙のかからぬところに我はそれ等の武器を移し置きたり。何となればそれ等の物はオディシユウスがトウロイに赴きしその昔、彼の後に遺し置きしところの物の如くならず、寧ろ最早煤け盡したればなり。火の呼吸はその如く力強くそれ等の武器の上に及びしなり。その上タロオノスの子なるヂユウスは一つの大きいなる心遣ひを我が胸の中にまで置きたり。即ち汝等が葡萄酒に酔ひ痴れたる時、恐らく汝等は汝等相互の間に一つの争ひを起し、相互に傷け合ひ、それに依りて獲妻と求婚とを汚すことあらむ。何となれば、鐵は自らにしてそれにまで人を引き寄すればなり。」

されどただ我等二人の爲めに二の劍と二の槍と、牡牛の皮の二つの盾とを渡し置け。それを取りて我等が彼等の上に打ち掛る事を得む爲めに。しかしてその時、パラス・アシニエと謀事を爲す者デニウスとはかの求婚者等を惑はしてその滅びにまで逐ひやるべし。されど今一つの事を我は汝に告げ知らす可ければ、汝はそれを汝の心の中に思ひ計れよ。汝若しまことに我が血統を受けたる我が子ならむには、さらば如何なる人にもオディシユウスの歸りてあることを聞かしむなかれ。レエアルチイズにも、かの豚飼にも、家の内なる何人にも、ピネロオビにすらもそれを知らしむることなく、ただ我と汝との二人をして婦等の心を見出ださしめよ。げに我等はかの僕等の間なる或者の試みをも爲す可く、彼等の中なる何人が眞心よりして我等を敬ひ我等を恐れたるかを、又何人が全く我等を憚らず、汝の如くその如く氣高き人をすらも敬ふところなきかを知り明らむ可し。』

その時彼の名高き子は彼に答へて言へりき、『嗚呼我が父よ、げに汝は此後如何なる魂を我が有てるやを知り明らむるに至らむ。何となれば我は些かも愚なる心の囚とならざればなり。されど汝の企ては我等二人にまで益ある事とも思はれざれば、されば我は汝をして心を用ひしめむ。乃ち汝は耕作の土地より土地を歴巡りて各の人を試み廻る時、徒らに汝の道を久しくせざる

可からず。しかして汝の館にありては心安くかの求婚者等は、憚らず汝の所有物を食ひつゝし、何等の爲さざるところなからむ。されば我は婦等の何人が汝を侮れるか、又何人が罪なきか、彼等に就きて知るところあらむことを願ふ。先づ我が家の僕等に就きて試みを爲さむことを我は願はず。まことに汝若しかの盾の主なるデニウスよりの何等かの徴を知らむには、我等は後程その事に心を用ひ可きなり。』

斯く彼等は互に相語りき。しかして今かの見事なる船はイサカに陸揚げす可く運ばれつつありき。そはテイレマカスを總ての彼の仲間等と共にバイロスより乗せ來りしところの船なり。彼等が今深き港の内に來れりし時、人々はかの黒き船を岸に引き上げ、思ひあがれる従者等は彼等の武器を運び去り、直ちにかの見事なる贈物をクリタイアスの家にまで持ち行きぬ。やがて彼等は慎しみ深きピネロオビにまで消息を齎す可くオディシユウスの家に一人の使者を送り出だしき。乃ちテイレマカスが耕作の土地へ赴きたりしこと、又かの氣高き后が心遣ひして圓き涙を落ちしむるなからむ爲め、かの船を市にまで運び行かしめたりしこと、の消息なり。斯くてこれ等の二人は、かの使者と善き豚飼とは、かの后にまで總てを告げ知らすこと、の同じ役目を帯びて出で會ひき。今彼等が神聖なる王の家にまで行き着きたりし時、かの使者は總ての侍女等の間に語り出

でて言へりき——

「げに、嗚呼后よ、汝の子はバイロスより歸り來れり。」

されどかの豚飼はビネロオビの處に行きて、彼女の子が彼に言はしめしところのことを彼女に告げき。かくて彼が云ひつけられたりしところの總ての事をなしたりし時、彼は豚にまで引き返して、オディシニウスの家を立ち去りき。

今求婚者等は苦しみ且つ惱みてオディシニウスの館を出で、大なる壁の側を過ぎ行き、門の前の處にて協議をなし始めき。ポリバスの子なるユウリマカスは彼等の間にありて先づ語りはじめき——

「げに、友等よ、ティレマカスは不敵にも一の大なる業を、即ちこの旅をなし遂げたり。而して我等は、彼がつひにそれを成し遂げざるべきことを言へりき。されどいざ、我等をしてそこにあるところのいと善き物なる、一の黒き船を卸さしめよ。而して我等の友等が取り急ぎ歸り來るやう、彼等にまで直に言葉を囁らすべき、海の漕手^{こま}を呼び集めしめよ。」

この言葉の尙ほ彼の唇に残りたりし時、アムフィノオマスは彼の席にありて面をふり向け、かの深き港の内にかの船を見、また帆を下ろしつつありしところの、並びに櫓^かを手にしたたりしとこ

ろの人々を見き。その時悦ばしげに彼は笑ひ出して、彼の仲間等の間に語りき——

「否、今や我等をしてもはや如何なる使者をも送らしめされ。何となれば、見よ、彼は既に歸り來りたればなり。何等かの神ありて彼等に總てを告げ知らせたるならむ。或は彼等自らティレマカスの船の通り過ぐるを見つつも、それを捕ふることに能はざりしならむ。」

斯く彼は語りき。而して彼等は起ちて海の岸邊にまで赴きぬ。速かにかの人々は黒き船を岸邊に引き上げ、心の高ぶれる従者等は彼等の武器を携へ去りき。而して求婚者等はいづれも皆集會の場所に赴き、年若き人々の中なる、或は年老ひたる人々の中なる他の何人も、彼等自らと共に坐することを許さざりき。その時ユウピイジイズの子なるアンタイヌウスは彼等の間にありて語りき——

「見よ今、如何に神々はこの人を彼の惡しき有様より救ひ出したるかな。終日斥候の芥等は速かに更替しながら、かの風強き岬のあたりに坐したりき。而して日の沈みし時、我等は徹宵岸邊に休むことなく、むしろ我等の速かなる船をもて高き海を走りつつ輝かしきあかつきを待ちたりき。かくして我等がティレマカスを捕へ、彼自らを殺すことを得む爲め、我等は彼を待ちぶせしたりしなり。しかるに其間にありて、何等かの神は彼を連れ歸りぬ。されど此場合にありても、我

等をして彼の爲めに、即ちティレマカスの爲めに悪しき企てをなさしめよ。また彼をして我等の手より脱れしめされ。何となれば、我が思ふに、彼の生きながらへたる間は、我等はつひに我等のこの仕事を成しとぐるに能はざるべければなり。乃ち彼は彼自ら謀事と智慧とを有ちてあり、人民はもはや總ての事に於て我等の味方をなささればなり。さなりいざ、彼が總ての希臘人等を會議にまで呼び集むる前にいざ、何となれば、彼は決して躊躇することなかるべく、むしろ大いに憤りて、彼等總ての間に立ちて語るべく、如何に我等が彼に對して滅亡を企らみしかど、つひに彼を捕へ得ざりしかに就きて語るべし。その時人々の總てはこれ等の悪しき行ひを聞きて、我等を善しとせざるべし。されば、彼等が我等に危害を加へ、我等を我等の國より逐ひ出だし、しかして我等が他處人等の國にまで到る事なからむため心せよ。さなり、むしろ我等をして先んぜしめ、市よりかけ離れたる野に於て彼を捕へしめ、或はその道に彼を捕へしめよ。しかして我等自らは彼の生業と彼の持物とを收めて、我等の間に公平に分つことをなさむ。されどかの家を我等は彼の母と、彼女を娶るところのものにと與へて有たしめむ。されどこの言葉にして汝等を悦ばさず、汝等にして若し彼が生きながらへて彼の父の遺産を承け繼ぐべきことを選ばむには、さらば最早我等をしてこの處に集り、悦ばしきものの總ての彼の蓄へを食ふことをなさしめ

され。しかして各の者をして彼自らの館よりその求婚の贈物をもて求婚をなし、彼女に言ひ寄る事をなさしめよ。さらば彼女はいと多くを與ふるところの、又運命に選ばれたる者として來るところの人に嫁ぐべし。』

斯く彼は語りき。彼等は何れもその静けさを續けたりき。やがてアムフィノオマスは彼等の間に演説をなして語り出でき。彼はエエリイティアスの處なるナイザス王の名高き子なりき。しかして彼は小麥と草とに富める國なるドリチアムより來りしところのかの求婚者等を導きたりき。他の總ての求婚者等に勝りて彼の言葉はピネロオビにまで悦ばれたりき。何となれば彼は分別の明かなる者なりければなり。さて今彼の健なる心よりして彼は演説をなし、彼等の間に語りて言へりき――

『友等よ、我一人としてはティレマカスを殺すことを選ばざるべし。抑々王等の血統の一人を屠らむとするは恐ろしきことなり。さなり、先づ我等をして神々の謀り定むるところに問ひ尋ねしめよ。しかして大いなるデュウスの神託にして嘉せむには我自ら彼を屠り、總ての他なる人々をして力をかさしむ可し。されど神々にして若しそれを避けむことを願はば、我は汝等をして思ひ止まらしめむ。』

斯くアムフィノオマスは語りき。彼の言へる事は善く人々を悦ばしき。その時直ちに彼等は立ち上り、オディッシュュウスの家にまで赴き、入り來りて磨きたてられたる腰掛の上に腰を下ろしき。その時かの賢きピネロオビは一つの新たなる心を抱きぬ。乃ちかの暴慢を極めたる卑しむべき求婚者等にまで彼女自らを示さむとする心を起しぬ。

何となれば彼女はかの館の中にあるべかりし彼女の子の死滅に就きて聞きたりければなり。斯く言ふは、かの求婚者の相謀れるを洩れ聞きたる僕ミイドンが彼女の子の死滅に就きて彼女にまで告げ知らせたりしなり。乃ち彼女はその侍女なる婦等と共に廣間の方に迄出で行きぬ。今かの麗しき後の求婚者等にまで來りたりし時、彼女はその顔の前にきらめける帕をかかげながら、見事なる屋根の柱の傍に立ちアンタイヌウスを責め咎めて彼にまで語りき——

「總ての暴慢に満ちたる危害をたくらむものアンタイヌウスよ。尙ほ且つ人々は言ふ、イサカの國にありて汝は、謀事をなすにも語るにも他なる總ての人々に勝れりと。されどまことは、汝は決してその如き人とも思はれざるなり。愚なる者よ。如何なればまことに汝はティレマカスの爲めに死と宿命とを企らむや。又ヂュウスの神を證人として有てる哀願者等にまで心をとめざるや。さなり、互に邪なる事を企らみ合ふは神を恐れざる業なり。いかに、汝は汝の父が國民を恐れてこ

の家にも逃れ來りし日のことを知らざるや。何となればげに、彼がタファイヤの海賊等と共に行き、我等と親しかりシスプロオティア人等を掠め荒しし故に、かの國民等は甚だしく彼を怒りたりければなり。斯くて彼等は汝の父を滅ぼし、彼よりその價高き命を奪ひ去り、總ての彼の大なる夥しき生業を悉く食ひつくさむことを願ひき。されどオディッシュュウスは總ての彼等の切なる願にも拘はらず彼等を制へ押し止めき。然るに彼の家を汝は今償はさるる事なくして費し、彼の妻を汝は妻に求め、彼の子を屠り殺さむとして、いたくとも我を悲しましむるなり。されど我は汝をして思ひとどまらしめ、他なる人々も同じくなさむ事を言ひつくるなり。」

その時ポリバスの子ユウリマカスは彼女に答へて言へりき、「アイケエリアスの女よ、賢きピネロオビよ、心安かれ。又汝の心をこれ等の事に依りて煩はされしめされ。我が生きながらへて、地の土に在り、日の光を見てある間に汝の子なるティレマカスの上に手を差し伸ぶるほどの人間はあらじ。或はあらざるべし。或はつひに生るることあらざるべし。何となれば斯く我は汝にまで宜べ知らすべく、又そは必らずやなし果たさるべければなり。まことに速かにかかる人間の黒き血は、我等の槍のまはりに流れざるべからず。何となれば、市々を荒らすものオディッシュュウスは、まことにしばしば我をも彼の膝の上に置き、燻きたる肉を我が手にまで與へ、紅き葡萄酒を、

我が唇にふくませたればなり。この故にティレマカスは我にまで總ての人々の中にいと親愛なる者なり。我は彼をして求婚者等の手より如何なる死をも恐るることなからしめむ。されど神より來るところのものは、固より何人も避くる事を得ざらむ。』

斯く彼は彼女を慰めて語りき。されど彼自らはその間にも彼女の子のために死を企らみつつありしなり。

今彼女は彼女の輝ける上なる房に上り行き、やがて彼女の夫なるオディシユウスを悼み歎きたりしが、つひに灰色の眼したるアシイニは彼女の目蓋の上に甘き眠りをそそぎぬ。

さて日の暮れにかの善き豚飼はオディシユウス及び彼の子のところにもまで歸りき。彼等二人は、一歳仔の豚を犠牲となしたりし時夕餉の備へをなしき。其時アシイニの神はレアアルティイズの子なるオディシユウスに近づき來り、彼女の杖をもて彼を打ち、彼を再び一人の老ひたる人になしき。彼女は彼をして淺ましき着物にその身を纏はしめき。そはかの豚飼が彼を見て認め知り、操正しきピネロオビに告げ知らすべく出で行き、その心の中に秘め置かざるべきことを恐れたればなり。

やがてティレマカスは先づかの豚飼にまで語りて言へりき、『よきユウメイユウスよ、汝は歸り

來れり。かの市にありては如何にかなしたる。かの求婚者等は今彼等の待伏せを止めて歸り來りしや。或は前の如く尙ほ我が歸り途を擁して我を待てりや。』

その時豚飼なるユウメイユウスは答へをなしき、『我は市に下り行きてそれを問ひ尋ねむことを思はざりき。我が心は一度かの消息を傳へたりし時、及ぶ限り速かに再び我を引き返さしめき。しかして汝の仲間等より出だしたる速かなる使は我と落ち合へりき。その僕は汝の母にまでかの消息を傳へたる始めての人なりき。されど、汝若し聞くことを願はば、次の事をも我は知れり。何となれば我は我が眼をもてそれを見ればなり。すでに我が行きてハアメエアの小山のあるところなる、かの市の上に到れりし時、我は一つの速かなる船の我等の港に入り來るを認めき。而してその船の中には多くの人々在り、又盾と二股の槍とを積み載せたりき。我が思ふに、彼等はかの求婚者等なるべけれど、されど我は確に知らざるなり。』

斯く彼は語りき。力強き君なるティレマカスは微笑みて、かの豚飼の眼を避けながら彼の父の方を見やりき。

今彼等がその業をやめて夕餉の備へをなし了へたりし時、彼等はその食事に取りかかりき。しかして彼等の心はひとしき晩餐の上は何等の缺けたる物あることを思はざりき。されど彼等が

飲み食ひの慾を満たしたりし時、彼等は休息の事を思ひ浮べて眠りの賜物を受取りき。

第十七章

ティレマカスは彼がパイロオとスバルタとに於て睡きたりしところのことを彼の母に物語る。

指紅き速きあかつきの輝き出でしや否や、神聖なるオディシムウスの子ティレマカスはその足の下によきさんだるすを結びつけ、彼の手にするにふさはしき強き槍を取り上げて、市に向ひて出で立たむとしき。しかして彼は彼の豚飼にまで語りて言へりき――

「げに、翁よ、我は我が母の我を見ることを得むため市に向ひて行かむとす。何となれば、我が思ふに彼女は我が子の面を見るまで痛ましき嘆きをなすことと涙を流すことを止めざるべければなり。されどこの指圖を汝に與へむ。この他處人を、不幸なる人を市にまで導け。その處にて彼は彼の食物を乞ひ求むることを得む。又志ある者は麴麴の一片と水の一杯とを彼に與ふるなる

べし。我自らのことを言へば、我は我に来るところの如何なる客人にも堪ふること能はず。さばかり我は心惱めるなり。されど、この他處人にして甚だしくこれを怒りたらむには、恐らくは彼自らにとりていよいよ痛ましきことなるべし。我は眞實を語ることを愛する者なり。』

智謀に富めるオデイシユウスは彼に答へて言へりき、『我が友よ、我も亦この處に残し置かることを餘りに好まず。乞食にとりては、野にありてよりも市にありてその食を乞ふこと勝れり。しかして志あるものはそれを我に與ふるなるべし。我は今や田園に留まりて事毎に主の言葉に聽き従ふべき齡にあらざるなり。されば行け。しかして我が火をもてあたためられ、日の熱くなり盛るや否や、今汝が言ひつくるところのこの人は我を導き行く可し。斯く言ふは、これ等の我が着物は淺ましくも哀れなるものにて、我はあけがたの白き霜によりて打ち勝たれむことを恐るるなり。その上に汝等のはかの市の遙かに遠きところなることを言へり。』

斯く彼は語りき。テイレマカスは速かなる足どりをもて小屋の外に歩み出でき。しかしてかの求婚者等のために禍の種をまきつつありき。今彼が見事なる家にまで來りし時、彼は彼の槍を高き柱の前に置き、其處にそれを寄せ掛け、彼自ら石の敷居を越えて踏み入りき。

乳人なるユウリクリイアは彫刻を施したる椅子の上に毛皮の覆ひを敷きたりし時、他の人々

先立ちてテイレマカスを見き。しかして直ちに彼女は泣きながら彼に近づきぬ。心固きオデイシユウスの總ての他なる少女等はテイレマカスのまはりに集りて、やさしく彼の頭と肩とに接吻けしき。いま賢きピネロオビは、アルティイミズ或は金のアフィロダイテイの如く彼女の房より出で來り、その腕を彼女の親愛なる子のまはりに投げかけ、泣き出だし、彼の顔をまたその二つの麗しき眼を接吻けし、聲高に泣き立て、彼にまで翼ある言葉を語りき――

『テイレマカスよ、汝は暗闇の中なるなつかしき光の如く來れり。汝がひそかにまた我が心に背きて、汝の親愛なる父の消息を求むるため、汝の船にてパイロスにまで行きたりし後、我はつひに再び汝を見ることなかるべしと思ひき。いざや今、汝はかの處にて彼に係はる如何なる事を見たりしぞ。』

賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、『我が母よ、我が魂の内なる嘆きを呼び醒さされ。或は今しも僅に死を免かれ來りしばかりなる我が胸の衷なる心を亂さされ。さなり、寧ろ水にて汝自らを洗ひ淨め、新なる衣を汝自らの身に纏ひ、汝の侍女なる婦等と共に汝の上なる房にまで上り行き、ヂユウスの神が報復の業のなざるを許し得むことのため、悦ばしき犠牲を屠り捧ぐべく總ての神々にまで誓へよかし。されど我は我等の家にまで一人の他處人を呼び寄するため集會

の場所にまで赴くべし。其他處人は我がバイロスより此方へ來りし時我に従ひしところの者なり。我は彼を我が神聖なる仲間等と共に送り出だしき。しかして彼を導き歸るべく、又我が到るまでやさしく敬ひて彼をもてなすことに心を用ゆべくバイレイユウスに指圖しき。』

斯く彼は語りき。その言葉は彼女をとび去らずして留りき。乃ち彼女は水に彼女自らを洗ひ淨め、新しき衣を彼女自らの身に纏ひ、チュウスの神が報復の業のなされるを許し得むことのため悦ばしき犠牲を屠り捧ぐべく總ての神々にまで誓ひき。

今テイレマカスはその手に槍を携へて廣間を出で行きぬ。二匹の速かなる犬は彼に従ひき。しかしてアシイエの神は彼の上に不思議なる麗しさを注ぎぬ。總ての人々は彼の來りし時彼を見て驚き異しみぬ。かの求婚者等は彼等の唇に善き言葉を浮べながら、彼のまはりに集りしが、その心の奥底には悪しき事を思ひ謀りつつありき。その時彼は求婚者等の大なる雜踏を避け、昔より彼の家に親しかりしメントアとアンタイファスとハリザアシズとの掛けたりしところに赴きて、彼自らも腰を掛けぬ。彼等は總ての彼の冒險に就きて彼に問ひ尋ねき。その時槍手として名高きバイレイユウスは市を通りて集合の場所にまでかの他處人を導きながら近づきぬ。しかしてテイレマカスは久しく彼を遠ざかりてあることなく、やがて彼のところにまで近づき行きぬ。

その時バイレイユウスはまづ彼にまで語りて言へりき、『直ちに婚等をして我が家にまで行かしめよ。さらば我はメニレアスが汝に與へしところの贈物を汝に送り届くることを得む。』

その時賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、『バイレイユウスよ、我等はこれ等のことの如何に成行くべきかを知らず。かの求婚者等にして若しこの家の内にて我を謀かり殺し、彼等の間に我が父の遺産を分つことあらむには、さらば我はこれ等のものの中なる何人よりも寧ろ、汝が汝自らかの贈物を收めて樂しみとなさむことを願ふなり。されど我にして若しかの求婚者等のために死と宿命との種を播きたらむには、さらば悦びてかの贈物を我が家にまで運び來れ。しかして我も亦悦びてそれを受取るべし。』

斯く言ひて彼は旅疲れしたる他處人を家にまで導きぬ。今彼等が見事なる王宮にまで到りし時、彼等はその外套を椅子と高き腰掛との上に脱ぎ捨て、磨きたてられたる浴場に赴き浴みしき。斯くて少女等が彼等に浴みさせ檻籠の油を彼等に塗りて、厚き外套と上衣とを彼等のまはりに投げかけし時、彼等は浴場より出で來りて腰掛の上に腰を下ろしき。その時侍女は善き金の水甕に手を洗ふための水を運び來り、それをもて洗はすべく銀の鉢の上に水を注ぎ出だし、彼等の傍にまで一つの磨き立てられたる食卓を引き寄せぬ。かの品よき婦は小麥の麵麩を運び來りてそ

れを彼等の傍に置き、彼女のあづかれりし程のものを惜しみなく取り出でて、さまざまなる馳走を食卓にのぼせき。しかしてテイレマカスの母は廣間の柱の傍にして、彼の眞向ひに坐り、椅子に倚り掛かりて細き糸を紡ぎたりき。しかして彼等は彼等の前に置かれたる善き馳走の上に彼等の手を差し伸べき。今彼等が飲み食ひの慾を満たしたりし時、賢きピネロオビは先づ彼等の間にありて語りき――

「テイレマカスよ、げに我は我が上なる房にまでほり行き、我が床に我自らを横たふべし。我が呻吟の場所なるかの床は、オディシユウスがエエトウルウスの子等と共にイリオスに向ひて出で行きしかの日より、つねに我が涙によりて濡らされたり。されど汝はかの求婚者等がこの家まで來りしに先立ち、汝の父の歸國につきて、汝もしそれにつきて聞きたるところあらむには、明らかに我に告げ知らすことをなさざらむとす。」

而して賢きテイレマカスは彼女に答へて言へりき、「さなり今、母よ、我は總ての眞實を汝に告げ知らすべし。我等はパイロスへ、また人民の羊飼なるラストアにまで行きぬ。彼はその高き家の内に我を迎へ入れき。而して多くの年の後異なる國より新に來れる子を、その父の歡待す如くやさしく我をもてなすことを努めき。恰かもその如く努めて彼は彼の名高き子等と共に我が爲め

に心遣ひをなしき。されど彼は言へりき。心硬きオディシユウスにつきては、生きながらへたりとも死にたりしとも、地上の何人よりの如何なる言葉をも聞きたりしことなしと。されど彼は、よく仕立てられたる車及び馬と共に、槍手として名高きエエトウルウスの子メニレアスの處にまで我を送り出しき。その處にて我はアルゴスのヘレンを見き。その人の爲めにアルゴス人とトウロイ人等とが神々のもくろみによりて多くの患難を堪へ忍びしところの、かのアルゴスのヘレンを口き。その時直に、聲高き車の叫びを擧ぐる者メニレアスは、何の爲めに我が善きラシデエモンにまで來れりしかを我にたづねき。我は彼に總ての眞實を語りき。その時彼は答をなして言へりき――

「嗚呼汝等神々よ、心雄々しき人の寢床に彼等は、彼等の如き卑怯者等は臥ねむことを思ひきとや。たとへば一の牝鹿が、生れて間もなき未だ乳離れもせぬ仔鹿等を、猛き獅子の穴にねかし置きて、山の膝と草深き窪みにと草食むところを捜し求めたる時、そのあとにかの獅子は彼の床に歸り來りて、醜き死を仔鹿等の上に送り出すごとく、恰もその如くオディシユウスは醜き死をかの求婚者等の上に送り出すべし。願ふらくは、我等の父なるデュウスとアシニとアポロとにまで願ふらくは、そのむかし肥沃なるレスボスにて、オディシユウスがフィロミイリイディイズと

格闘し、力強く彼を投げ出して總ての希臘人等を悦ばしし時の如き、その如き力強さに於てオヂイシユウスがかの求婚者等と渡り合ふを得むことを。さらば彼等は皆速かなる宿命と苦き婚姻とを味ひ知るなるべし。されど、汝が我に問ひたづね、請ひ尋ねるところの事につきては、我が言ふところの何事に於ても、聊かの眞實をはなれたるものなきことを、また我が汝を欺くなきことを信ぜよかし。されど、かの眞實を言ふところの、海の老ひたる者が我に述べ示しし事につきては、我は一語をも汝に包みかくさざるべし。彼の言ふところによれば、彼はオヂイシユウスがある島にて、ニムフなるカリブゾオの館に甚だしき苦しみを嘗め居れるを見き。カリブゾオは強ひて彼をその處に引き留めしなりき。乃ち彼は彼自らの國にまで歸ることを得ざりき。何となれば彼の傍には權をもてる如何なる船もなく、また廣き海の脊を越えて彼の道に夜を送り立たすべき如何なる仲間の者もなかりければなり。」斯く槍手として名高きエトウルウスの子メニレアスは語りき。偕て總ての事を成し果したる後、我は故郷に向ひて出で立ちき。而して不死なる神々は一の宜しき風を我に與へ、速かに我自らの親愛なる國にまで我を連れ歸りき。」

斯く彼は語りて、彼女の胸の衷なるその心を煽りき。さて次に神の如きレオクリミイナスは彼等の間にありて語りき——

「嗚呼、レエアルテイイズの子オヂイシユウスの敬はれたる妻よ、げに彼は如何なる明かなる事をも知らず。されど我が言葉は汝は心にとめよ。何となれば、我は汝にまでいと眞實なる事を預言し、何ものをも包み隠さざるべければなり。今ヂユウスは如何なる神の前にも、我が來れる氣高きオヂイシユウスのこの懇なる食卓とこの爐との前にも、我が言ふことの證人となれかし。オヂイシユウスは恐らく今彼自らの國の中に、或は休み或は行きながら、これ等の邪なる行ひを聞き知りて、總てのかの求婚者等のために禍の種を播きつつあるならむ。我がかの船の上に坐してみたりしところのかの島の徴はさばかり明かなるものなりき。而して我はそれをティレマカスにまで告げ知らしき。」

その時賢きピネロオビは彼に答へて言へりき、「嗚呼、他處人よ、この汝の言葉にしてまことに成就したらましかば、直ちに汝は我が手より懇なる多くの贈物を與へらる可く、斯くて汝に出で會ふところの如何なる人も汝を呼びて祝福せられたる者と言ふべし。」

斯く彼等は互に相語りき。されどかの求婚者等はその時の間もオヂイシユウスの王宮の前にありて前の如く懼り恐るる事なく、平らなる場所の上に重きものと槍とを投げ遊びて彼等の樂しみをなしたりき。されど今夕餉をしたたむべき時となり、まはりの野より家畜の群の歸り來りて

常の如く彼等を入々の導き入れし時、その時總ての僕等の中にてかの求婚者等にまで最も悦ばれしところの、また饗宴に臨みて常に彼等と共にありし所のミイドンは、彼等にまで語りて言へりき——

『氣高き若人等よ、今汝等は心ゆく限り遊び事をなしたるなれば、我等が饗宴に備へをなすことを得むため家にまで入り行け。何となれば、宜しき時に食事を取るはまことに宜しきを得たる事なればなり。』

斯く彼は語りき。彼等は立ち上りて出で行き、彼の言葉に聽き従へりき。今彼等がかの見事なる家にまで入り來りし時、彼等はその外套を椅子と高き腰掛との上に投げかけき。彼等は大きいなる羊と太りたる山羊と、太りたる牡豚と、小牛の牝とを犠牲になして、彼等の饗宴に備へをなしき。

今總てこれ等のことの間におディシユウスとかの善き豚飼とは、野より市にまで行かむとて身仕度をなしたりき。而して人々の主なるかの豚飼は先づ語りて言へりき——

『さて、我が友よ、我が見る所によれば汝は我が主の言ひつけし如く、この日市に行かむことを切に願ひ求めてあり。我自らは汝がこの小屋に留らざること願ふなれど、されど我は後にて彼が我

を責むることなからむため、彼の言ひつけを敬ひ恐るべし。而して主等の咎めはその僕等にまで痛ましきことなり。さればいざ、我等をして我等の道に出で立たしめよ。何となれば見よ、日は已に傾きはじめたり。而して間もなく日の暮れに近く汝は風の冷たくなるを覺ゆるなるべし。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき、『我は心を留め、耳を傾けて聽けり。總てのこれ等のことを汝は物分りよき心をもて語れり。されど我等をして出で立たしめよ。而して汝は彼方へ行き着くまで我を導けよかし。又汝にして若し何れの處かに切り調へられたる一つの杖を持ちたらむには、我が寄り纏るを得むためにそれを我に與へよ。何となれば、まことに汝等はこの道の躓きやすきことを言へばなり。』

斯く言ひて彼は悉く裂け破れたる一つの卑しき小袋を彼の肩に投げかけ、それを吊すべき紐をも投げかけぬ。而してユウメイユウスは彼の望みに任せて一つの杖を彼に與へき。斯くてこれ等の二人は彼等の道に出で立ち、かの犬と家畜を飼ふ人々とのみ小屋を護るべく後に留りき。さてかの豚飼は一人の哀れなる、老ひたる、杖により纏れる乞食の姿をなしたる彼の主を市にまで導きぬ。その主の纏へりし着物は淺ましく哀れなる物なりき。されど彼等が躓き易きかの道を進み行きし時、彼等はつひにかの市に近づき、麗しく流れ出づる泉のところまで來りき。そのところ

より市の六々は水を汲み行きしなり。この井戸をイサカスとニリクスとボリクトアとは築きなしたりき。さてそのまはりには水に臨みて生ひ繁れる、何れもみな環形をなせる赤楊の繁みあり。冷たき流れは高き岩の上より落ち下り、その上には總ての旅人等の捧物をなすところの、ニムフにまで捧げられたる祭壇ありき。その處にてドリラスの子、メランジアスは彼等に出で會ひき。それは總ての家畜の群の中にいとよき山羊をかゝの求婚者等に饗應すべく、彼の山羊を連れ行くところなりき。二人の家畜を飼ふ者も彼に伴ひたりき。今彼がオデイシユウス等を見し時、彼は彼等を嘲り笑ひき。しかして恐るべき悪しき言葉遣ひをもて彼等に挨拶をなし、オデイシユウスの心をいらだたしめて言へりき――

『今まことに厭はしき人間は厭はしき人間を導きたり。何となれば神は常にひとしき者をひとしき者へ齎し行けばなり。いかに、何處へ汝は此意地きたなき奴を導きつつあるにや。汝あはれなる豚飼よ。この厄介なる乞食を、饗宴の邪魔者を何處へ導くにや。彼は劔または大釜を求むるにはあらで、食物の片端を乞ひ求めながら、多くの人々の柱をその肩にて磨りへらし廻るなり。汝若し我にこの漢を興へて、我が小舎を見張り又家畜の欄を掃き淨めしめ、鮮らしき牧草を仔山羊にまで齎らさしめむには、さらば彼は乳の水を飲みて彼自らの股をたくましく

することを得たるべし。さあれ、彼はただ悪しき事にのみ習へるなれば、農場の仕事に赴くことをねがはざるべく、むしろ彼の飽くなき腹を充たすべく施を求めて、國の内をうろづき廻ること撰ぶなるべし。されど今我は明らかに言ひ聞かすべく、我が言葉は恐らくその如く成し遂げらるるならむ。若し苟くも彼にして神聖なるオデイシユウスの家にまで赴かば、人々の手の投げつくるほどの多くの腰掛は彼の頭のまはりに飛ぶべく、また彼等が家の内に彼を轉ばし飛ばす時彼の肋の骨を挫くべし。』

かく言ひつつ彼の行き過ぎし時、彼は愚かにもオデイシユウスの腰の邊を蹴上げき。されど彼はオデイシユウスを道の外に追ひやること能はず、オデイシユウスはその儘にして立ちたりき。而して彼がメランジアスに打ちかかり、杖をもて彼の命を取り去り、或は彼を腕につかみ上げて、彼の頭を地に打ちつくべきや否やを思ひ沈みき。されど竟に彼はその心を硬くして耐へ忍び自ら制べき。而してかの豚飼はメランジアスを見やりて彼を咎め、その手をあげて聲高く祈り求めき

『ヂユウスの女なる泉のニムフ等よ、若しオデイシユウスにして苟くも汝等の祭壇の上に肥えたりたる山羊又は仔山羊の股の肉を燻きささげたりしならば、我が爲めに此願をかなへさせよかし

嗚呼、彼の歸り來たらましかば。又何等かの神ありて彼を連れ歸りたらましかば。さらば彼は、
 悪しき羊飼等が羊の群を滅ぼせる間に、つねに此市をさまよひ歩いて、今汝が不敵にも誇り示せ
 るところの總ての汝の勇氣を彼は打ち碎くべし。』

その時かの山羊飼は答へき、『今見よ、この痴犬は何を言へりしぞ。いつかは我は彼を黒き船に
 のせてイサカより遠き處へ連れ行くべし。さらば彼は我に多くの儲を得さすことあらむ。ねがは
 くば、銀の弓をもてるアポロの神が、この日館の内にてテイレマカスを襲ひ撃ちたらむとを。ま
 たオディシユウスの爲めに歸國の日が遠き國にて過ぎ去れることの如く、その如くたしかにテイ
 レマカスが、かの求婚者等の前に倒れたらむことを。』

斯く彼は語りき。而して彼等が徐に歩み出でし時オディシユウス等をその處に残しき。メラ
 ジアスは歩み出でて、甚だ速かに王の家にまで到りき。而して直に彼は入りて、とり分け彼をね
 むごろにしたりしところのユウリマカスの眞向にして、かの求婚者等の間に腰を下ろしき。給仕
 の者等は彼の傍に一片の肉を置き、かの品よき婦人は小麥の麵麩を齎らし來りて、それを彼の傍
 に置いて食はしめき。今オディシユウスと善き豚飼とは寄り近づきて傍に立ちき。而してかの空
 洞なる豎琴の音は彼等のまはりに聞えき。何となれば、ファイミアスは集まれる人々の間に其聲

をあげて願ひたりければなり。オディシユウスはかの豚飼の手を取り、語りて言へりき——

『ユウメユウスよ、げにこれはオディシユウスの見事なる家なり。げにもたやすくこれは、多
 くの家の間にありて知り分たるを得む。建物の上に建物あり。家の庭は障壁をもて巧みに造り
 なされ、またかの折戸は程よく護りふせがれたり。何人もそれをないがしろになすことなからむ
 而して我は多くの人々の中に騒ぎ樂めるを見る。何となれば、脂肉のよき匂は立ちのぼりてあ
 り、また神々が饗宴の附物たるべく定めなししところの豎琴の音はその邊に聞かれたればなり。』
 その時豚飼なるユウメユウスは答をなしき、『たやすく汝はそれを知る。何となれば、汝は固
 に心さとければなり。されどいざ、我等をして如何に事の成り行くべきかを慮らしめよ。汝は先
 づこの見事なる館の内に入り、かの求婚者等の仲間に加はれ。さらば我はこの處に留まらむ。或
 は汝にしてねがはば、この處に留まれ。而して我は汝をあとにして進み入るべし。されど久しく
 留まらざれ。しからざれば、汝の外にあるを見て、汝に投げつけ、または汝を打つところのもの
 あらむ。乞ふ、この事に深く思をいたせ。』

その時殺き善きオディシユウスは彼に答へて言へりき、『我は心を留め、耳を傾けて聞く。總て
 の此等の事を汝はよき分別をもて語るなり。されば汝は我に先立ちて行け。而して我はこの處に止

まらむ。何となれば、我は襲ひ打たれ投げつけらるることの如何なるものなるかを十分に知ればなり。我が心は硬さに充ちたり。何となれば、我は危き海の浪と戦との中に多くの悪しき事を苦しみ味ひたればなり。この苦しみをそれらの物語に附加へられしめよ。されど貪り狂ふところの腹は、何人も包みかくすことを得ざらむ。そは人々の爲めに多くの禍を齎らすところの忌まはしき物ぞ。この事の故に、かの實なき海を越えて敵人にまで災厄を運び行くところの船なぞも備へらるるなり。』

斯く彼等は互に相語りき。而して見よ、一の犬は彼の横たはりしところに、彼の頭を上げ彼の耳をそばたてき、心硬きオディシユウスの犬なるアルゴスなり。それをオディシユウスはそのむかし彼自ら養ひ育てたれど、未だ樂しみをなすに至らずして、神聖なるイリオスにまで去り行きしなり。さてこれまでの間に、かの若き人々はこの犬を山羊、鹿、野兎などにけしかけ用ふることを常となしき。されど今や、彼の主人も遠きにありたれば、驛馬や牡牛などの深き糞の中に淺ましくたは横りき。其糞のたまれる床は、オディシユウスの僕等が彼の廣き圃のこやしになすべく運び去るまで、戸口の前に擴げられてありしなり、其處にかの犬のアルゴスは毒蟲に充ちて横たはりき。されど今しもオディシユウスが傍に立てるを認め知りし時、彼はその尾をふり動かしその二

の耳を垂れき。されど彼の主人にまで、より近く行くことの力を彼はもたざりき。オディシユウスは目をそらし、たやすくユウメエユウスよりかくししところの涙を押し拭ひき。而して直に彼はユウメエユウスにまで問ひ尋ねて言へりき――

『ユウメエユウスよ、げに不思議なるはこの犬がこの糞の中に横たはれることなり。まことに彼は生ひ立ちの見事なる犬なり。されど我は、彼がこの美しさと共に速さを有てるや否やを知らず。或は彼が人々の目を悦ばす爲めに飼はれたる食卓のほとりの犬共の如く、ただ見事なるのみなるや否やを知らず。』

この時豚飼なるユウメエユウスは答をなしき。『げにこれは遠き國にて死にしところの人の犬なり。かつてオディシユウスが彼を残してトウロイへ去り行きし時、この犬が如何に遅しく且つすばしこかりしかを見たらむには、汝はそれを見て驚嘆したりしなるべし。彼に追ひかけられし時森の奥深き處にして彼より逃れ得たる如何なる獸もなかりき。なにとなれば、追ひ求むることに於ても彼はいと鋭き犬なりければなり。されど今彼は悪しき有様に置かれたり。而して彼の主は彼自らの國を離れて亡び去り、心なき婦等は彼の爲めに如何なる世話をもなしやらざるなり。』

さたり、僕等はもはや、彼等の主人等が支配を休めたる時、正直なる勤をなさむとするの心を有

たず。何となれば、遠くにまで呼ばはり聞ゆるヂュウスの神は、人間が奴隷にまで落ち行く時、彼の徳の半ばを取り去るものなればなり。』

斯く言ひて彼はかの見事なる家の内に入り、直にかの廣間にまで、かの思ひ上れる求婚者等の集まれる處にまで到りき。されどアルゴスの上には、彼が二十年目にして再びオディシユウスを見し時に於て、黒き死の運命は來りき。

今神の如きテイレマカスは、かの豚飼が廣間にまで入り來りし時、彼を見しところの初めての人なりき。乃ち直に彼は相圖して、自らの側にまで呼び寄せき。かくてユウメエウスは邊を見廻はして、その傍に据えられたりしところの一の背高き長椅子にかけき。そはかの肉を切り分つ者が、この家の中に饗宴を張るところの求婚者の間にありて、多くの肉を切り分ちながら坐するを常としたりしものなり。この腰掛を運びて彼は、テイレマカスの食卓に近く彼の眞向ひに据え、彼自らそれに腰を下ろしき。かの僕は彼の分前なる肉を持來りてそれを彼に與へ、また小麦の麵麴をも籃より取り出でて彼に與へき。

彼の直ぐあとにオディシユウスは、あはれなる年老ひたる乞食の姿にて、あさましき着物をまといひて、その杖によりながら家に入りき。而して彼は入口の内なる秦皮の闕の上に腰を下ろし、工

人の巧みに造りなし樹てなしたるいと、すぎの柱にもたれき。テイレマカスはかの豚飼を彼自らにまで呼び寄せ、かの見事なる籃より一の麵麴の塊を取り出し、また彼の手の掴み得るより多くの肉を取り出しながら言へりき——

『これを取りてかの他處人にまで與へよ。而して彼自ら總ての求婚者を順々に廻りて乞ひ求むることをなさしめよ。何となれば、恥づると云ふことは窮乏に惱める人にとりて悪しき友なればなり。』

斯く彼は語りき。豚飼はその言葉を聞きし時行きてオディシユウスの傍に立ち、翼ある言葉を彼にまで語りき——

『他處人よ、テイレマカスは汝に此等の物を與へ、汝が總ての求婚者等を順々に廻りて乞ひ求むることをなさしむ。何となれば、彼の言へる如く、「恥づると云ふことは窮乏に惱める人にとりて悪しき友」なればなり。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき、『王なるヂュウスの神よ、テイレマカスが人々の間にありて幸福なるべきことを我に許せよ。また彼が總ての彼の心中の願ひを遂ぐることを得よかし。』

斯く言ひて彼は兩の手に施物ほしものを取り、それを彼の足の前なる見苦しき袋に置きぬ。やがて彼はかの樂人が館の内に歌へりし限り食ひつづけき。彼の食事をなしたへ、樂人が彼の歌を終りたりし時、その時求婚者等は館の内に一の喧噪を起しき。されどアシイニの神はレエアルティイズの子なるオデイシユウスの傍に立ち、彼を動かして求婚者等の間に麵麴屑を集める爲め行き、何人の正しくして、何人の正しからざりしかを知らしめき。されど尙ほ、彼女は彼等の中なる一人をも悪しき宿命より免れしめむことを思はざりき。かくて彼は右側よりはじめて、彼がむかしよりの乞食なりしかの如く、各の側にその手をさしのべて、各の人に乞ひ求むることに取りかかりき。彼等は憫みて彼に何等かの物を與へき。而してかの乞食を驚き異おかしみながら、彼の何人なりしか、彼の何處より來りしかを互に相たづねたりき。

その時山羊飼なるメランジアスは彼等の間にあつて語りき——

『汝等名高き后きさきの求婚者等よ、この他處人に就きて聽け。何となれば、げに我はこれより前に彼を見たればなり。かの豚飼こそはげに彼をこの處へ案内しき。されど、彼が何處に生れしものなるかにつきては、我は何等のたしかに知るところなきなり。』

斯く彼は語りき。されどアンタイヌウスはかの豚飼を咎めて言へりき、『嗚呼、世に聞へたる豚飼

よ、そもそも何故なれば汝はこの人を市にまで連れ來りしぞ。さなきだに我等は饗宴の邪魔物なる流浪者を、厄介なる乞食等を有てること足れるならずや。汝は彼等がこの處に集りて汝の主ま人の生業なりわいを食ひ盡すをたやすき事に思ひ、またこの人間をも呼び入れざるべからずと思へるにや。』

その時豚飼なるユウメユウスは答をなしき、『アンタイヌウスよ、汝の高貴にかかはらず、汝の此等の言葉は聊かの宜しきところなし。何となれば、人々の中の藝能ある者、即ち預言者か、病を癒す者か、船工ふねたくか、またはその歌をもて總ての人々を悦ばし得べき神聖なる樂人なぞにあらざれば、何人か自ら遠方よりの他處人を求め出し、饗宴にまで招き寄することをなすものぞ。さなり、右の如きは總ての廣き地の上に歡び迎へらるるところの者なり。されど何人も彼の資財を浪費する爲め乞食を饗宴に招き寄することを爲さざるべし。しかるに汝はつねに他なる總ての求婚者等にまさりてオデイシユウスの僕等にまで酷こく、とりわけ我にまで酷し。されど見よ、我が女主人おんなのしやうじんなる、貞淑なるピネロオビが、またテイレマカスがこの家の中にあらむ限り、我は心に留めざるなり。』

その時賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、『靜かになしてあれ、ねがはくば多くの言葉をもて彼に答ふるなかれ。何となれば、アンタイヌウスは苦くるき言葉をもて口ぎたなく我等をそしる

ことを常とすればなり。げに又他の人々をも煽り立てて同じ事をなさしむればなり。」

斯く言ひてのち彼は翼ある言葉をアンタイヌウスにまで語りき、「アンタイヌウスよ、げに汝は父がその子の爲めになす如く、我が爲めに善き心遣ひをなしたり。乃ち汝は我をして我等の客人を荒々しく家より逐ひ出さしむるなり。神は斯かる事のなさるべきを禁めよかし。何等かの物をとりにてそれを彼に與へよ。見よ、我はそれを惜まず。さなり、我は汝がそれをなさむことを求む。而してその事に於ては我が母をも、神聖なるオディシユウスの家の中なる僕等の何人をも憚らざれ。さなり、されど汝は汝の心の中に聊かも斯かる事を思はず。何となれば、汝は他の人に與ふるよりも、遙かに先づ汝自ら食はむことをねがへればなり。」

その時アンタイヌウスは彼に答へて言へりき、「大言壯語するところの、また前後を辨へざるまでに憤り狂へるテイレマカスよ、汝は如何なる事をば言へるぞ。總ての求婚者等にして若し我が與ふるほどの物を彼に與へたらむには、この家は三月に亘りてかの乞食を遠ざくることを得たるべし。」

斯く彼は語りき。彼が饗宴に坐しし時彼の澤かなる足をのせしところの足臺を取り、その横はりしところなる食卓の下よりしてそれを示しき。されど總ての求婚者等は何等かの物を與へ、麴

麴と肉とをもて乞食の袋を充たしき。さて今オディシユウスは關の處にまで引返しし時、希臘人の恵みを味い試みむ爲め、關の處にまで引き返さむとしてありき。されど彼はアンタイヌウスの傍に立ちとまり、彼にまで語りて言へりき——

「友よ、我に何等かの物を與へよ。何となれば、我が思ふに汝は希臘人の中にいていと賤しき者ならで、むしろ彼等總ての中にいていと善き者なればなり。即ち汝は王の如くなればなり。されば汝は我にまで麴麴の一片を、他の人々のそれより宜しきを與へざるべからず。さらば我は汝を總ての廣き地の上にて名の聞えたる者になすべし。何となれば、我も亦曾つて人々の間に我自らの家を有ち、豊かなる家を有てる富豪なりき。而して屢々、如何さまなる人にもあれ、また如何なる物を求めて來りしとも、漂泊ひ來れりし者にまで施し與へむとしき。我は數知れぬ僕等を有ちまた人々が善き日をくらし、富豪の名をうたはるるに必要なるほどの、他なる總ての物を夥しく有ちたりき。されどクロオノスの子なるデュウスは我をして總ての物を失はしめき。恐らくはそは彼の覺召なりしならむ。彼は我を送りて漂泊へる海賊等と共に、遠き道なる埃及にまで、我が彼滅にまで赴かしめき。而してエチプタスの川に我は我が船をとどめき。その時げに我は我が愛する仲間等に云ひつけて、その船の傍に留まり、その船を守らしめ、眺望の宜しき處を探り出す可

く斥候の者等を送り出しき。今彼等は彼等自らの力を知らざりしままに、その放恣なる心に従ひき。而して間もなく彼等はすぐれて見事なる埃及の野を荒らしはじめ、彼等の妻等と幼き兒等とを運び去り、彼等の男子等を屠り殺しき。その叫は速かに市にまで來りき。人々は叫びを聞き、夜明くると共に出て來りき。總ての野は歩卒と騎兵とをもて、また青銅の輝きをもて充たされき。雷を悦びとなすところのヂュウスの神は、悪しき戦きを我が仲間等の上に送りき。而して何人も敵に立ちむかふとを敢へてなさざりき。何となれば、危険は各の側に我等をとりまきたればなり。その處にて彼等は劍のさきをもて我等の多くを屠り殺し、他なる者を彼等は、彼等の爲め働かすべく生きながら彼等と共に導きたりき。されど彼等は彼等に出で會ひしところの一人の友に我を與へて、サイプラスにまで連れ行かしめき。勢強くサイプラスを治めたりしところのアイエエサスの子なるミイトアにまで連れ行かしめき。而して見よ、その處より我は酷だしき困苦をなして今此處へ來れるなり。」

その時アンタイヌウスは答をなして言へりき、「如何なる神が饗宴を授すべくこの厄介者を此處には連れ來りしぞ。その如く中程に立ちて、我が卓に近づぐことなかれ。然らざれば汝は直にヤの手厳しき埃及と一の悲しきサイプラスとに到るべし。何となれば、汝は不敵なる又耻知らぬ乞食なればなり。汝は順々に總ての人々の傍に立ち、漫りに彼等は汝にまで與ふ。乃ち彼等はその手を引き込むることなく、又他の人々の財を惜しげなく與へて悔ゆることをなさず。何となれば各の人はその傍に移しく有ちたればなり。」

その時智謀に富めるオデイシユウスは引き退きて彼に答へき、「今見よ、我が見るところに依れば、汝は汝の美しさと共に賢さを有たざるかな。汝自らの家よりして汝は、汝の哀願者にまで一粒の鹽ほどの物をも與ふことをなさざるべし。何となれば、今他人の食卓に坐してあり、夥しき物を汝の手に近く有ちながら、麵麴を取りてそれを我に與へむことをさへ思はざればなり。」

彼は語りき。アンタイヌウスは大に彼を怒りて、恐ろしく彼を打ち眺め、翼ある言葉を語りて言へりき——

「我が思ふに、この後汝は面目を保ちて此室より出で行かざるなるべし。汝はこの我を罵り辱むることをなしたれば。」

斯く言ひて彼はその足台を取り上げ、右の肩端に近くオデイシユウスの脊を打ち据えき。されどオデイシユウスは殿の如くかたく立ちたりき。彼はアンタイヌウスの打撃を受けてひるむ色なく、その心の奥底に悪しき事を思ひ企てながら、無言の儘にして其頭をふりたりき。やがて彼は闕

の處へ引き返してその處に腰を下ろし、彼の充ち満ちたる袋を横へ置き、かの求婚者等の間にありて語りき——

『汝等かの名高き後の求婚者等よ、我に聞け。我は我の内なる我が心の我に云ひつくる儘を言ふべし。げに人が牛にてもあれ、または白き羊にてもあれ、彼目らの持物の爲めに戦ふ軍に於て打たるる時、その處には如何なる痛みも心の悲しみもあることなし。されど今アンタイヌウスは我があはれなる口腹の慾の爲めに、人間に多くの惡をもたらすところの一の忌まはしき物の爲めに我を打ちたり。ああ、若しまことに神々と乞食の復讐者とのあらましかば、死の禍はアンタイヌウヌの婚姻に先立ちて彼の上に襲ひ來れよかし。』

その時、ユウビイゼスの子なるアンタイヌウスは彼に答へき、『他處人よ、靜かに坐して汝の肉を食へ。もしくは他の處へ出でて行け。しからざれば、この若き人々は汝の惡しき言葉の故に汝の手足を取りて家の内を引きずり廻はし、總ての汝の肉を汝の骨より剝ぎ取るべし。』

斯く彼は語りき。而して彼等はいづれも彼の言葉を甚だしく憤りたりき。而して次ぎの如く若き人々の一人は語らむとしき——

『アンタイヌウスよ、汝はこの不幸なる流浪者を打ちて惡しき事をなしき。若し固に天上に神あ

らば、汝は報いを受けざること能はざらむ。げにかの神々は遠き國々よりの他處人の姿を取り、さまざまなる装ひをなして市々を漂泊ひ渡り、人間の罪なると正しきとを見守れるなり。』

斯く求婚者等は語りき。されど彼は彼等の言葉を意に留めざりき。今テイレマカスはオデイシヌウスの打たれたるを見て大なる悲しみをその胸に抱きぬ。されど彼は如何なる涙をもその目蓋より地に落ちしむることなく、その心の奥底に惡しき事を思ひ企てながら、無言の儘にして其頭をふりたりき。

今賢きピネロオビはかの他處人が室の中にて打たれしことを聞きし時、彼女の侍女等の間に語りて言へりき——

『嗚呼願はくば、名高き射手なるアポロの神が、アンタイヌウスよ、汝自らをもその如く打てよかし。』

家の事を司れる婦ユウリノオミは彼女に答へて言へりき、『嗚呼、我等の祈にして聽かるることを得たらましかば。さらば此等の人々の中なる何人もかの麗はしき玉座につけるあかつきの面を見ることなかるべし。』

而して賢きピネロオビは彼女に答へき、『乳人よ、彼等はいづれも皆絶間なく惡しき事をかくら

めるなれば、いづれも皆敵^{あつ}人なり。しかも彼等總ての中にてアンタイヌウスはいとよく黒き運命に適^{あは}へり。或あはれなる他處人はその窮乏の云ひつくる儘に、人々の施しを乞ひ求めつつ家のまはりをさまよへり。而して總ての他^{あつ}なる人々は彼の袋を充たし、何等かの物を彼に與へき。されどアンタイヌウスは足臺をもて右の肩端^{かたまたま}を打ちたり。』

善きオディシユウスが食事をなしたりし間に、彼女はその房^やに坐して侍女等の間に語りき。やがて彼女は善き豚飼を呼び寄せて彼にまで語りき――

『善きユウメイユウスよ、汝の道を行き、かの他處人をしてこの處に來らしめよ。さらば我は挨拶の言葉を彼に語り、又彼が心堅きオディシユウスの消息をききたりしや、或は彼の目をもて見たりしやを問ひ尋ぬることを得む。何となれば、彼は遠くより彷徨ひ來れる人の如く見ゆればなり。』

その時豚飼なるユウメイユウスは答へをなしき、『后^{あつ}よ、嗚呼、かの希臘人等がその静けさを保ちてあらましかば。さらば彼は汝の眞^{まこと}なる心を引きつくるなるべし。その如きことを彼は言ふべし。何となれば、彼が船を脱れし時まづ我に來りし故、我は三日三晩に亘りて我が小屋の内に彼を留めき。しかも尙ほ彼は彼の艱難の物語をなし了へざりき。神々が人間に取りての渴望の悦び

を歌ふことを教へたる一人の歌ひ手を、或人の打ち眺むる時の如く、又彼の歌へる限り彼に聞かむとする絶え間なき願ひを人々の持つところの、その歌ひ手を人の打ち眺むる時の如く、恰もその如く彼は家の内^{うち}にて我が傍に坐しながら我が心を引きつけ動かしぬ。彼は言へり、彼はオディシユウスの、また彼の家の友なりと。ミノスの影^{かげ}の住める處なる、クリイトに住める者なりと。その處より彼は彷徨ひ彷徨ひて、途すがら様々なる悲しみを爲しつつ今この處に來れるなり。彼はそれに附け加へて言ふ、彼がシスプロオティアに近き處にてオディシユウスの消息を聞きたる事と、またオディシユウスが尙ほ生き存へて彼の地の人々の間に在る事とを。而してオディシユウスは彼の家にまで多くの財を齎らしつつありとなり。』

その時賢きピネロオピは彼に答へて言へりき、『彼が目^めの當り我にまで語るを得むことのため、行きて彼をこの處に呼べ。されどこれ等の人々をしてこの入口に、或は家の内^{うち}に坐して彼等の悦びをなさしめよ。彼等の心は輕^{かろ}やかなり。何となれば、彼等自らの富は、麵麩も甘き葡萄酒も安らかにして家に横はり、ただ彼等の僕等のそれを飲み食ひするのみなればなり。彼等は日毎に我等の家に通ひ來りて、牡牛や羊や肥えふとりたる山羊などを犠牲になし、暗き葡萄酒を飲みて憚らず樂み騒げり。而して見よ、我等の大いなる富は滅ぼされたり。何となれば、この家を護る

べくオディシユウスの如き如何なる人も今や在らざればなり。嗚呼オディシユウスにして若し再び彼自らの國にまで歸り來らましかば、さらば直ちに彼と彼の子とはこれ等の人々の邪なる行ひに報ゆるなる可し。』

斯く彼女は語りき。而してティレマカスは聲高に噓しき。その音は屋根の下に驚くべく鳴り響きぬ。ピネロオピは笑ひて、直ちにユウメイユウスにまで翼ある言葉を語りき——

『直ちに行きて、かの他處人を我が處にまで呼び來れ。汝は如何に我が子が總ての我が言葉を祝して噓したるかを心づかさるや。斯の如くなれば避け難き宿命は總ての求婚者等の上に落ち來る可く、又何者も死と運命とを免れざるべし。されど今一つのことを我は言ふべければ、汝はそれを汝の心の中に記し留めよ。我にして若し彼自らが眞實の他なる何物をも言はざることを見出しなば、我はよき着物なる外套と上衣とを彼に與へて纏はすべし。』

斯く彼女は語りき。豚飼は彼がその背姿をききし時立ち去りて、かの他處人の傍に立ち、翼ある言葉を語りて言へりき——

『父の如き他處人よ、ティレマカスの母なる賢きピネロオピは汝を呼べり。彼女は已に多くを悲しみたれど、彼女の心は彼女をしてその夫に就きて問ひ尋ねしむ。而して彼女若し汝が眞意の他

なる何事をも言はざる事を見出しなば、彼女は汝に最も必要なる外套と上衣とを汝に與へて纏はすべし。且つ又汝はこの國の中を巡りて汝の麵麩を乞ひ求め、汝の腹を満たすべく、志ある者は汝にまで與ふるなるべし。』

その時賢きオディシユウスは彼に答へて言へりき、『ユウメイユウスよ、直ちに我はアイケエリアスの女なる賢きピネロオピにまで總ての眞實を語り告ぐべし。何となれば、我はよく彼の物語を知り、また我は我等の苦しみを諸共に堪へ忍びたればなり。されど我はその恣にして邪なる行ひの天上にまで聞えたる、かの頑なる求婚者等の雑踏の前に震へたり。何となれば、今しも我がこの家の中を行きし時、如何なる悪しき振舞の故にもあらで、かの人の我を打ちて酷だしく苦しめたりしなれど、ティレマカスも他の如何なる人もそれを押し止めざりき。この故に今ピネロオピが如何ばかり切に求むるとも、彼女をして日の落つるまで房の中に留まらしめよ。然る後彼女をして彼女の夫に就きて彼の歸國の日に關することを問ひ尋ねしめよ。又彼女をして火にまで近き席を我に與へしめよ。何となれば見よ、我は哀れなる着物を纏へればなり。而して汝はまづ汝にまで我が乞ひ求むることをなししなれば汝自らそれを知れり。』

斯く彼は語りき。豚飼は彼がその言葉を聽きし時立ち去りき。而して彼が敷居を横ぎりし時ピ

ネロオピは彼にまで語りき——

第六〇

「ユウメイユウスよ、汝は彼を連れ來らず。こはそもかの彷彿人まがまがひとにありて何の意ぞや。彼が限りも無く何物かを恐るることのあり得るや。或は彼はこの家の中に留まることを耻ぢたるか。耻づる心あるは悪しき乞食なり。」

その時豚飼なるユウメイユウスは答へをなしき、「彼の言ふところは宜しきを得たり。不遜なる人々の怒りを避くる爲めには、如何なる他の人も亦その如く言ふなるべし。彼はむしろ日の落つるまで汝の待たむことを願ひき。げに、后よ、かの他處人ひとりにのみ汝の言葉を懸け、彼の物語に耳を傾くるは、汝自らに取りて遙かに宜しきことなり。」

その時賢きピネロオピは答へき、「かの他處人は愚ならず。彼の思ふところの如くして、兎も角もそはあるべきなり。何となれば、我が思ふにこれ等の求婚者の如く恣なる如何なる人間も在らざるべく、又かかる不敵なる行ひを爲すところの何者もあらざる可ければなり。」

斯く彼女は語りき。かの善き豚飼は彼が總ての告ぐべきことを彼女に告げ示したりし時、かの求婚者等の群れる處にまで去り行きぬ。而して直ちに彼は他なる人々の聞くを得ざらむため、テネレマカスにまで彼の頭を近寄せながら翼ある言葉を彼に語りき——

「友よ、我はこれより汝の生業なまはらにして且つ我が物なる、汝の豚と畑のものとを見守るために行くなり。されど汝はこの處にある總ての物を等閑おぼろにせされ。されど何よりも先づ汝自らを護り、如何なる悪しき事も汝に近づかさるやう心せよ。何となれば、かの希臘人等の多くは我等に對して悪しき事を企つればなり。彼等の禍が我等を覆ふ前にヂユウスの神は彼等を滅ぼし去れよかし。」

賢きテイレマカスは彼に答へて言へりき、「父の如きユウメイユウスよ、恰かもその如くあるべきなり。しかして汝は食事を爲し了へたる時汝自らの道に出で行けよかし。而して明朝再び來りて、犠牲の爲めの見事なる生物いせものを齎らせ。總てのこれ等のことは我と不死なる神々とにまで委ねらるべきなり。」

斯く彼は語りき。豚飼は再びかの磨き立てられたる腰掛に腰を下ろしき。而して飲み食ひの物をもてその心の満ち足らひし時、彼は饗宴する人々に満ちたる庭と廣間とを後にして、彼の豚にまで歸り行きぬ。饗宴する人々は舞踏と歌とをもて楽しみ騒ぎたりき。何となれば、そは己に夕暮に近かりければなり。

第十八章

オディシユウスと乞食アイラスと拳をもて相戦ふ。アムフィノオマスへの彼の訓戒。ピネロオビは求婚者等の前に現れて彼等よりの贈物を受く。

その時イサカの市の間をまはり歩くことを常としたりしところの一人の乞食は來りき。そは狂氣じみたる意地きたなさの故に、彼の涯しなき飲み食ひする事の故に總ての人々の間に知られたる乞食なりき。されどそのたくまじき外觀に似もやらで、彼は如何なる力をも強さをも有たざりき。アルネエユウスは彼の名なりき。何となれば、斯く彼の善き母は彼の生れたりし時彼に名づけたればなり。されど總ての若き人々は彼をアイラスと呼びき。何となれど彼はいつにてもあれ人より言ひ付けらるる時、使ひ歩きをなしたりければなり。斯くて今彼は來りき。而してオディシユウスを彼自らの家より逐ひ出ださんとしき。彼はオディシユウスを罵り辱かしむることを始めて翼ある言葉を語りき――

『老ひたる者よ、汝はこの戸口より去り行け。然らざれば汝は直ちに足をとりて引き出ださるべし。汝は今總ての人々が我に目配せし、我をして汝を引き出ださしめむと爲しつつあるを見ざるか。されど、我はその事に當るを耻かしく思ふなり。さなり、我等の争ひのやがて手荒なるものになり行かざらむ事のため汝は立ちて去れ。』

その時智謀に富めるオディシユウスは恐ろしく彼を打ち眺めて言へりき、『友よ、行にも言葉にも我は汝を害ふことを爲さず。又我は人ありて夥しき物を汝に與へたらむとも恨み憤ることなし。この敷居は我等二人を容るるに足れり。而して汝は他なるへ々の施しの爲めに妬み猜むことを要せざるなり。汝は我とひとしき彷徨人なるが如く我に見ゆ。我等に恵むものは天上の神々たり。願くばあまりにも甚だしく我を怒らしめされ。然らざれば如何に老ひたりとも、我は汝の胸と唇とに血を塗ることを爲さむ。斯くて明朝我はより安らげくある可し。何となれば、我が思ふに汝はつひに又レエアルテイイズの子なるオディシユウスの館にまで來らざるべければなり。』

その時乞食アイラスは怒りて彼にまで語りき、『いま見よ、如何に愚かしく老ひたる醜女の如くこの大食家は喚き立つるかな。彼の上に我は我が思ふ所のことを爲し、右に左に彼を撃ち据え

て、恰かも穀物を荒らすところの豚の牙の如く、總ての齒を彼の顎より地にまで食ひ入らしめむ。いまこれ等の人々が何れもみな我等の戦ひの烈しさを知ることを得むため汝自ら身繕ひせよ。さなり、いかでか汝は汝より年若きこの我と戦ひをなし得るものぞ。』

斯くて彼等は高き戸口の前に磨きたてられたる敷居の上にして言葉荒く互に相挑みき。而して力強き若者なるアンタイヌウスは二人の言ひ争へるを聞きて、心地よげに笑ひ出だし、求婚者等の間に語りて言へりき——

『友等よ、これまで曾つて斯くの如きことはなかりき。斯くも善き勝負を神はこの家にまで甞らしたり。彼方なる他處人とアイラスとは互に相挑めり。いざ、我等をして彼等を咬かしめよ。』

其時總ての人々は其言葉を聽きて聲高く笑ひ出だしながら立ち上り、いらだてる乞食等のまはり集りき。而してユウピイゼスの子なるアンタイヌウスは彼等の間に在りて言へりき——
『汝等求婚者よ、我にきけ。我は何等かのことを言ふべし。この處に山羊の腹は火の中に横はれり。そは我等か夕餉の爲めにとて備へたる、脂肪と血とをもて満たされたる山羊の腹なり。いまこの二人の中の何れにてもあれ打ち勝ちて、より強きことを示したらむには、彼をして立ちてこれ等の腹のいと善きものを選び取らしめよ。更に又、彼は常に我等の饗宴につらなりて食ふことを

得む。而して我等は如何なる他の乞食も我等の間に來りて施しを乞ひ求むることを許さざるべし。』

斯くアンタイヌウスは語りき。而して彼の語れるところは人々を十分に悦ばしめき。その時智謀に富めるオディシユウスは彼等の間に在りて狡猾に語りき——

『友等よ、年老ひたる又勞苦をもてよりへらされたる人間はいかでか年若き者と戦ふことを得む。されど我が幸福の慾は、悪しきことを勸むる者なるその慾は、我が打ち据えらるることにまで我を驅り立つるなり。ともあれいま、汝等の總ては一つの嚴しき誓ひを我に爲せ。而して何人もアイラスにまでひいきするの故をもて、謂れなき加勢を彼に與へて我を負けしむることなかれ。』
斯く彼は語りき。而して彼等は何れもみな彼の言ひ附けし如く彼の撃たざることを誓ひをなすき。今彼等がその誓ひをなしたる時、力強き若者なるテイレマカスは今一度彼等の間に在りて語りき——

『他處人よ、汝の心と氣高き魂とにして若しこの漢を追ひ退けむことを汝に求むるならむには、さらば希臘人等の如何なる他の者をも恐るるなかれ。何となれば、何人にもあれ汝を撃つところの者は多くの人々と戦はざるべからざればなり。我は汝の介添役なり。而してこの人々は、智

口腹

舞を有てる人々なるアンタイヌウスもユウリマカスも我に同意せむ。』

四六六

斯く彼は語りき。而して彼等は何れも皆その言葉に同意しき。その時オディシユウスは彼の破れたる着物をその腰のまはりに掲げ、善き大なる彼の股をして見えしめき。彼の巾廣き肩と胸と力強き腕とは露はなりき。而してアシイニの神は近づき來りて、人々の牧羊者なる彼の手足を遅ましく爲しき。その時かの求婚者等はいたくも驚き異しみき。而して互にその隣りなる者にまで次の如く言はむとしき——

『まことに速かにアイラスは彼自らの禍を引き出だすなるべし。如何に遅ましき股をかのおひたる人はその破れたる着物の下より現はしたるかな。』

斯く彼等は語りき。アイラスの心は哀れにも揺り動かされき。尙ほ且つ僕等は彼に身繕ひさせ、大いなる恐れのためにその手足の肉の震ひわななける彼を強ひて引き出だしき。その時アンタイヌウスは言葉を荒らげて彼にまで語りき——

『汝鈍物よ、汝にして若しこの人の前に震ひわななき、さばかり恐ろしく恐れたらむには、いま汝の在らざりしこと、又は汝の生れてあらざりしこと、汝に取りて宜しかりしならむ。彼は年老ひてあり、又彼を襲へる勞苦のためにすりへらされてあるにあらずや。されど我は明らさまに汝に告

げて言はむ。そのことは思ふに爲しとげらるべし。この人にして若し汝に打ち勝ち。汝の主なることを證しせむには、我は汝を一つの黒き船に投げ入れ、エティイタス玉のところまで流しやるべし。總ての人間を傷むる者なるかの玉は無慈悲なる鋼をもて汝の鼻と耳とを殺ぎ去り、汝の隠蓋を抜き出して犬に與へ、彼等の裂き食ふに任すべし。』

斯く彼は語りき。而して更に大いなる震へはアイラスの手足を捕へき。彼等は環の中にまで彼を導きぬ。二人の者は各その手を上げき。その時殺き善きオディシユウスは彼自らのうちに思ひ沈みき。相手の者の倒れしところにして彼の命の身體を離るるやうに彼を撃つべきか、或は軽く彼を撃ちて地の上に倒れしむべきか、このことに就きてオディシユウスの思ひ沈みし時、彼にまでよ、善く思はれしは、希臘人等が彼の何人なるかを心づかさらむ爲め、相手の漢を軽く撃ち据えることとなりき。やがて二人はその手を上げ、アイラスは相手の右の肩を撃ちしが、オディシユウスは相手の頸の耳の下なる所を撃ちて骨を碎きぬ。赤き血は直ちに彼の口より迸り出で、一つの呻吟き聲を擧げて彼は地に倒れ、彼が地上を蹴りし時その齒を食ひしばかりき。されどかの思ひあがる求婚者等はその手を差し上げ、息を吐く隙もなく笑ひつづけき。その時オディシユウスは相手の足を掴みて、戸口の外に引き出だし、つひに廣庭と館の門の所とに到りき。彼は相手の漢を引き据

えて廣庭の壁に寄せかけ、その手に杖を置き與へ、彼の聲を出だして翼ある言葉を彼にまで語り
き――

『汝は今その所に坐して、豚と犬とを追ひ拂へ。汝の如き淺ましきともがらは他處人と乞食との
上に主顔（まごころ）することなかれ。然らざれば何等かの更に悪しきこと汝の身に及ぶべし。』

斯く彼は語りて、彼の肩のまはりに悉く裂け破れたるその卑（いや）しき袋（ふくろ）を投げかけ、又それを吊す
べき繩を投げかけぬ。而して彼はかの敷居の處に引き返して、再びそのところに腰を下ろしき。『
いま求婚者等は面白げに打ち笑ひながら入り來り、彼に挨拶して言へりき――

『他處人よ、チュウスと總ての他の不死なる神々とは汝にまで汝のいと尊き願ひを、總ての汝の
心よりの願ひをも許し與へよかし。何となれば、汝はかの飽く所なき痴者（ちか）をしてこの國の中に乞
食することを止めしめられたればなり。やがて我等は彼を黒き船に投げ込みて、總ての人間を傷むる
ものエティクス王のところまで逐ひやるべし。』

かく彼等は語りき。善きオディシユウスはこれの言葉の前徴（まへしるし）を悦びき。アンタイヌウスは脂肪と
血とを満たされたるかの大なる山羊の腹をオディシユウスの傍に置きぬ。アムフィノオマスは二
づの麵麩の塊を籠より取り上げて、それを彼の傍に置き、金の盃にて彼を祝しながら言へりき――

『父の如き他處人よ、安かれ。來るべき時に於て幸福は汝のものにてあれかし。されど今汝は多
くの悲しみの中に閉ぢ込められたり。』

智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき、『アムフィノオマスよ、げに汝は憤しみ深
きこと足れる人の如く我に見ゆ。何となれば、汝を生みしところの父も亦その如き人なりき。乃ち
我は彼の善き評判を聴き、ドリチアムのナイザスが善く且つ富める人なりしことを聴けり。而し
て人々は汝が彼の子なることを言ひ、汝は分別の明かなる人の如く見ゆるなり。この故に我は汝に
告げて言ふべければ、汝は心を留めて我に聴け。』
地（ち）の面（おもて）に生き且つ動くところの總ての生
物（もの）の中、人間より弱き如何なるものをもこの地は養ひ育つることなし。見よ、神々が彼に幸福を
與へ、彼の手足の軽く動ける時、彼は彼自らが來るべき時に於て決して禍を蒙ることなかるべきを
思へり。されど又祝福せられたる神々が彼のために悲しみを作り成したる時、その時彼は毅（い）き心
をもてそれを堪へ忍ばざるべからず。何となれば、地の上なる人々の魂は、神々と人々との父より
彼等の上に来るところのその日の如く移ればなり。げに我も亦會つて人々の間に富み榮えたりし
が、我自らの力と勢とに任せて、また我が父と我が兄弟達とに倚り頼みて、多くの善からぬ行ひを
爲したりき。この故に何人もこの上不法なる行ひをなすことなからしめよ。而して何者にててもあ

れ、神々の與へむことの贈物を靜かに守り保たしめよ。かの求婚者等がある一人の人の富を使ひへらしその妻を蔑にする時、我は彼等がその如き不法なる行ひを爲せるを見るなり、我が思ふに、かの人はもはや久しく彼の友等と彼自らの國とより遠ざかりてあらざるべし。彼は甚だ近きにあり。されど汝自らの上を言へば、何等かの神ありて汝をこの處より汝の家にまで連れ歸れよかし。而して汝は彼が彼自らの愛する國に歸り來らむ日に於て彼に逢ふことなかれかし。何となれば、我 思ふところに依れば、オディシユウスの一度彼自らの屋根の下に來りたらむ時、かの求婚者等は血を呷ずして引き放たるることなかるべければなり。』

斯く彼は語りて、一つの捧物を注ぎ捧げ、次に蜜の如き甘き葡萄酒を飲み、再び人々を率ゆる者の上に盃を置きぬ。されどアムフィノオマスは悲しき心を抱きその頭を曲げながら廣間の間を退きぬ。何となれば、げに彼の心は悪しき事の徴あるを覺えければなり。尙ほ且の彼は彼の運命を避けざりき。何となれば、アシイニの女神は彼をも亦テイレマカスの手に罹りて、彼の槍に依りて屠り殺さるることに定めたりければなり。斯くて彼は一度彼の立ちたりし高き腰掛の上に再び腰を下ろしき。

今灰色の眼したるアシイニの女神はアイケエリアスの女なる賢きピネロオビをして求婚者等の

前に彼女自らを示さむことを思ひ立たしめき。そは彼女が彼等の心をして望みに燃えたたしめむことのためなりき。又彼女が彼女の夫及び彼女の子よりして是れまでも増したる尊敬を獲むことのためなりき。斯くて彼女は徒らなる笑ひを笑ひて、かの乳人にまで語りき――

『ユウリノオミよ、これ迄我はかかる願ひを有ちたる事なけれど、かの厭はしき求婚者等にまで我自らを示さむことを、我が心は切に求むるなり。我はまた我がこの幸となるべき一つの言葉を、汝にまで言はむとす。乃ちその唇をもて親しげに語りながら、善からぬことを心に企らめるところの、かの思ひ上れる求婚者等と彼は落ち合ふ事なくしてあるべきなり。』

その時家のことを司れる婦ユウリノオミは彼女にまで語りて言へりき、『げに我が兒よ、總てのことを汝は奇しくも語り。さらば行きて、汝の言葉を汝の兒にまで宣べ聞かせて隠すことなかれ。されど先づ汝自らを洗ひ濯ぎて、汝の顔に油を塗り、汝が今ある如き涙によれたる顔をもで行くことなかれ。何となれば常に嘆き悲しみて休むときなきは、その甲斐のなきことなればなり。而して見よ、汝の兒は今や汝に聞くべき齡となれり。汝は彼がその顔に鬚を有ちたるを見むことのため、總てのものに越えてかの神々に祈り求めたりしにあらすや。』

その時賢きピネロオビは彼女に答へて言へりき、『ユウリノオミよ、汝の如何に愛したらむと。

も、斯く我を言ひ慰めて、我をして我自らを洗ひ濯ぎ、我が顔に油を塗ることを爲さしむるなかれ。何となれば、オリムパスを護れる神々は彼が空洞なる船にて出で去りし日の後我が華かさを減ぼしつくしたればなり。されどオオトノオイとヒツポダミアとが我に來り、房の内にて我が傍に立つことを言ひ附けよ。我はうら耻かしき故に、我一人にして人々の間に行くことを願はざるなり。』

斯く彼女は語りき。かの老ひたる婦は彼女等に告げ知らせてその來ることを速かにせむ爲め房の間を行きすぎぬ。

この時灰色の眼したるアシイニの女神は他なることを思ひ浮びき。彼女はアイケエリアスの女の上に甘き微睡を注ぎければ、彼女は椅子にもたれて眠り始め、彼女の眠り始めし時その總ての手足は弛み去りき。而してその間にかの麗しき女神は、總ての希臘人等が彼女を見て驚歎するを得むことのため、不朽なる賜物を彼女に與へつつありき。先づ女神は、花の冠を戴けるサイゼリイアがグレエセス等の面白き舞踏に赴く時塗らるる如き、不滅の麗しきをもてピネロオビの麗しき面を飾りき。また女神は彼女をより高く且つより大きく見えしめ、彼女を新しく鋸切られたる象牙よりも白く爲しき。今彼女が斯くの如き業を爲したりし時、麗しき女神は立ち去りき。而して腕白

き侍女等は房を出で、その聲を立てながら近づき來りき。その時甘き眠りはピネロオビを釋し放ちき。彼女はその手をもて頬をすりながら言へりき——

『我はいと哀れなる者ながら、柔かなる眠りは我を包み纏ひたりしと覺ゆ。あはれ、貞潔なるアルテイイミズのいま斯くも柔かなる一つの死を我に與へたらましかば。さらば我は最早心悲しみつつ、又我が愛する夫のさまさまなる慕はしさを渴き求めつつ、我が命を荒し滅ぼすことなかるべし。我が斯く言ふは、彼は希臘人等の中にいとすぐれたる者なりければなり。』

此言葉と共に彼女は輝ける上の房より下り行きぬ。而して二人の侍女等もまた彼女に従ひ行きぬ。されどこの麗しき夫人が今かの求婚者等にまで到りし時、彼女は彼女の前に彼女のきらめける面帕をかかけながら、見事に造り成されたる床根の柱に添ひて立ち、彼女の各の側に一人の忠實なる侍女は立ちき。立處に求婚者等の膝は弛み、彼等の胸は愛の心を吹き込まれき。而して各の者は彼が彼女の夫たるを得むことのために祈をなしき。されど彼女は彼女の親愛なる子ティレマカスにまで語りき——

『ティレマカスよ、汝の心と汝の思ひとはもはやありし日の如く健かならず。汝が尙ほ幼兒なりし間は、汝は更に聴く更に賢き心もちたりき。今や汝は生ひ立ちて大人の年頃になり、汝の身長

と汝の美しさを目にするとこの他處人は、汝が何れかの富豪の子なるべきことを言ふならむ。然るにその汝の心と汝の思ひとはもはやありし日の如く正しからざるなり。何となれば、見よ、汝が汝の客人をして斯くもあさましく扱はれしめたる時、如何さまなる行の此等の室々にしてなされたりしぞや。今若しこの他處人にして斯く我等の家に入りながら、この悪しきもてなしの故に何等かの害はるところありたらむには、それは如何にありたるべき。この後耻辱は人々の間に汝の物にてありたるべし。』

その時賢きティレマカスは彼女に答へき、『我が母よ、この事柄につきては、汝の怒れるを我は聊かの咎むべき事とも思ひ做さず。されど我は近き頃まで幼児なりしかど、今や各の事を、善き事と悪しき事との分別を有ちたり。されば我は智慧によりて總ての事を企つること能はず。何となれば、こなたかなたに我をとりまける此等の人々は、その悪しきたくらみをもて我を恐れしめ、我を扶くべき何人もあらざればなり。アイラスとかの他處人との間なる戦は、かの求婚者等の望みし如くになり來らざりしなれど、ともあれかの他處人はより、勝れたる人なることを證しき。父なる神ヂイウスとアシイニとアポロとに願ふらくは、我等の廣間の中なる求婚者等が今斯く、あるひは廣庭に、あるひは家の内に彼等の頭を揺り動かしながら消え失せたらむことを。又、

各の者の手足がアイラスの今かなたに坐したる如き有様にして弛められたらむことを。かのアイラスは廣庭の處に醉漢の如くその頭を揺り動かしてあり、その手足の弛みたる故に、二の足を踏み立つることをも、彼自らを彼自らの處にまで連れ歸ることをもなし得ざるにあらすや。』

斯く彼等は互に相語りき。されどユウリマカスはピネロオビにまで語りて言へりき――

『アイケエリアスの女なる賢きピネロオビよ、總ての希臘人等にして若しアイエシアのアルゴスに汝を見たりしならむには、求婚者等の更に大なる群さへも明日の朝より汝の家に饗宴を張りたるべし。何となれば、汝は美しさと大きさに於ても、また内なる心の賢さに於ても總ての婦にまさりたればなり。』

その時賢きピネロオビは彼に答へき、『ユウリマカスよ、アルゴス人等がイリオスに向ひて船出でをなし、彼等と共に我が夫のオデイシユウスの行きし時の日に、恐らくは顔容の我がすぐれたりしところを神々は滅ぼししならむ。彼にして若し苟くも來りて、この我が生涯を見守り得たらむには、我が評判は更に高く更に見事なりしなるべし。されど今我は悲しみの中にあり。かくも夥しき禍を何等かの神は我に送り寄せたり。嗚呼、今尙ほ思ひ出づるは、彼が出で立ちて彼自らの國を去りし時、彼は我が右の手なる手首を取りて、次ぎの如く言へりき――

「妻よ、我が思ふに總ての武装せる希臘人等は泰らかにしてトゥロイより歸ること能はざるべし。何となれば、トゥロイ人等もまた人の云へるところによれば、槍を使ふ者、弓を射る者、速ぎ馬を驅る者の如き善き武装者を有ちてあり、それらは等しき戦の大なる争をいと速く決定するところの物なればなり。この故に我は、神々が我の歸るを許すべきや否や、また我がかのトゥロイにて滅ぼさるべきや否やを知らず。されば汝は總ての此等の事に心配りせよかし。我が遠くはなれたる間に、汝の今しもなせる如く、または今よりもいやまさりて、この館の内なる我が父と我が母とを心に懸けよかし。されど汝が汝の子に髯の生ひ出でたるを見し時、汝は汝の嫁がむと思ふ人にとつぎて、汝自らの家を去れ。」

斯く彼は語りしが、今や總ての此等の事は終りたり。忌まはしき婚姻の我を、いとあはれなる我を見出すべき夜は來るならむ。我が幸をデュウスの神は取り去りたるが如し。されど、その上に我が胸と魂とを襲ふところの酷だしき惱みあり。何となれば、そのかみの求婚者等はかれが如き事を爲ししものにあらざりければなり。何人にもあれ、身分ある婦人または富豪の女に求婚し他と相競ふところのものは彼等自ら、彼等自らの牡牛と善き羊の群とを携へ來り、花嫁の友等の爲めに饗應をなし、またその婦人に見事なる贈物をなすなれど、贖ふところなくして他人の生業を

食ひ盡すが如きことをなさざるなり。」

斯く彼女は語りき。而して毅然善きオディシユウスは心喜びき。何となれば、彼女は其の心を他なる事の上に向けながら、求婚者等より贈物を引き寄せ、またやさしき言葉をもて彼等の魂を欺き迷はせたりければなり。

その時ユウビイゼスの子なるアンタイヌウスはまたもや彼女に答へき、「アイケエリアスの女なる賢きピネロオピよ、希臘人の中なる何人にもあれ、彼がこの處へ持ち來らむほどの贈物を汝は取れ。何となれば、贈物を斥くるは宜しからぬ事なればなり。されど我等自らとしては、汝が希臘人等の中なるいと善き者に嫁ぎたるまでは、我等自らの土地へもまた他の土地へも行くことなかるべし。」

斯くアンタイヌウスは語りき。而して彼の斯く語りしことは十分に彼等を悦ばしき。乃ち各の人は彼の贈物を齎らすべく侍僕を送り遣はしき。アンタイヌウスの爲めには、彼の侍僕は一の刺繡を施したる、大なる甚だ見事なる衣裳を齎らしき。その衣裳には都合十二個の巧みに鉦金を曲げられたる金の飾針ありき。ユウリマカスの爲めには、彼の侍僕は直に日の如く輝ける琥珀の珠をもて貫ける珍らかなる首飾の鎖を齎らしき。ユウリデエマスの爲めには、彼の侍僕は三個の垂飾

をもて巧みに造りなされたる。きらびやかなる耳環の一對を齎らしき。ポリクリアの子なるピイ
サンダアの家よりは、彼の侍僕は甚だ麗はしき寶玉の首環を齎らしき。而して他なる希臘人等も
各皆何等かの他なる美しき贈物を齎らしき。

その時かの麗はしき后なるピネロオビは彼女の上なる房にのぼり行き、彼女に附添へる少女等
は彼女の爲めにそれらの見事なる贈物を運びしが、その間に求婚者等は舞踏と歌の悦びとに向ひ
て、その事の中に樂みをなし、夕暮の來るを待ちたりき。さて彼等が樂みをなしたりし間に暗き
夕暮は彼等に迫り來りき。やがて彼等は彼等自らの邊を明るくすべく室々に三個の火鉢を置き、
その上によく枯らされたる、新しく斧をもて割かれたる薪を積み、更にその上に火把をのせき、
而して心硬きオディシユウスの少女等は順次に焰をかき立てき。その時智謀に富めるオディシ
ユウス王は彼自ら彼等の間に語りて言へりき——

『汝等まことに久しく遠ざかりたる君主オディシユウスの少女等よ、汝等はいかの敬はれたる后の
ある處なるかの房にまで上り行き、彼女の側にありて絲を撚り、かの房に止まりて彼女の心を悦ば
せ、或は汝等の手をもて羊の毛をかけ。されど我はこの處なる此等の總ての人々の爲めに燈火を
司どらむ。何となれば、たとひ彼等が留まりて、玉座につけるあかつきの現るるに及びたらむと

も、彼等は我を勞れしめざるべし。さばかり我は辛棒づよきなり。』

斯く彼は語りしかど、彼等は打ち笑ひて互に顔を見かはしき。而して麗はしきミランゾオは彼
を罵り辱めき。ミランゾオはドリアスの生みしものなれど、ピネロオビはこれを養ひ育て、彼女自
らの兒にてもありしかの如くやさしくもてなし、彼女の望み求むるが儘に玩具なども與へたり
き。しかるに、ピネロオビの悲しみは彼女の心を動かすことなく、彼女はユウリマカスを愛して彼
の戀人なりき。今彼女はオディシユウスを罵り辱めて言へりき——

『あさましき客人よ、思ふに汝は心狂へる者ならむ。何となれば、汝は鍛冶場もしくは公の建物
の軒下などに行きて眠ることを擇ばずして、多くの貴人等の間に憚らず饒舌をなし、心に聊かの
恐れたるところもなければなり。げに葡萄酒は汝の心をみだしたり。然らざれば汝はつねに斯か
る有様にてあり、かくていたづらに言葉を弄ぶものならむ。汝は乞食のアイラスに打ち勝ちたる故
に、その悦びのあまりに汝自らを忘れしにや。心せよ。然らざればアイラスより勝れる人は直に
汝に向ひて起ち上り、その力強き手を汝の頭のまはりに置き、血をもて汝をぬらし、汝をこの家
より突き出すことあらむ。』

その時智謀に富めるオディシユウスは恐ろしく彼女を眺めやりながら言へりき、『さなり、直に

我はかなたへ行き、汝耻知らぬ婦よ、この汝の言葉につきてティレマカスに告げ知らすべし。さらば直に彼は汝をきれぎれに切り裂くことあらむ。』

斯く彼は語りき。斯く語りて婦等を脅かし去らしめき。婦等は廣間の間をぬけて逃れき。而して各の者の膝は弛みき。何となれば、彼等は彼の言葉の眞實なりしことを思ひければなり。されどオディシユウスは燈火の世話をなしながら燃え立てる火鉢の傍に立ち、總ての人々を眺めやりき。されど彼は遙かに他なる事を、成し遂げでは止まれざるべき事を其心の内に思ひ沈みたりき。

今アシイニの神は思ひ上れる求婚者等をしてとげとげしき侮蔑を差し控へさらしめむことを思ひき。そは激しき痛の愈々深く、レエアルテイイズの子なるオディシユウスの胸にまで食ひ入るを得むことの爲めなりき。かくてポリバスの子なるユウリマカスはオディシユウスを挑みながら彼等の間にありて語りき。而して彼の友等を喜び笑はしめき——

『汝等名高き後の求婚者等よ、我に聞け。我は我の内なる我に云ひつくるところの事を言ふを得む。神々の意によらずしては、この漢はオディシユウスの家にまで來らざりしならむ。我が思ふにこの明るき光はただに燃え立てる火より來るのみならずして、彼の頭よりもまた來るもの如し。何となれば、彼の頭には一の毛筋もなければなり。さなり、かばかり毛の薄き頭はあることな

けむ。』

かく語りて更に彼は、市々を荒らす者オディシユウスにまで言葉をむけぬ、『他處人よ、我にして若し山奥の圃の業をさすべく汝を連れ行かむことをねがはば、また汝の給金にして定められ、汝にして壁をきづく爲めの石を集め、高き樹木を植ふることなどをなすべくば、固に汝は我が傭人たむとねがふにや。さらば我は汝に絶えず麵麩を賄ひ、着物を汝に着せ、汝の足に靴を穿かすべし。さあれ、汝はただ悪しき事を爲すにのみ習ひたれば、野の仕事をなすことをねがはざるならむ。而してむしろ汝の飽くところを知らざる口腹を養ひ得むことの爲め、この國の間を乞ひ歩くことを選ぶならむ。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき、『ユウリマカスよ、ねがはくば長き日の始まる春の季節に於て、我等二人の間に仕事の試みのありたらしましかば。その試みは深き草を刈ることにもあれ。我は一の曲れる鎌を持ち、汝はそれとひとしき他なる鎌を持ちて、日の暮るるまで、またその處に草の残れる限り、草刈の仕事に於て我と汝と何れか勝れるやをためし見む。或は更に願ふらくは、我等の驅るべき牡牛のあらむことを。そはいづれも獨草をもて肥やされたる、ひとしき年頃なる、軛を負ふ力の、またすべての力強さの異らざると善き牡牛にてあ

れかし。而してそは四エエカアの野にてあるべく、土塊は鋤頭の前にすき起されざるべからず。その時汝は見るべきなり、我が我自らの前に、聊かも壞れざる畝々を鮮かに築きなすことを得たるや否やを。或は、恰かも此日クロオノスの子なるヂュウスの神にして若し、何處へなりとも彼のねがふところへ戦を送り起したらましかば。また我にして若し一の盾と一の槍と、悉く青銅をもて作りなされたる、我がこめかみにふさへる一の胃とを有ちたらましかば。その時汝は戦の先頭に立てる我を見るべく、この我が腹を口にして我をないがしろになさざるべし。さなり、汝は甚だしく恚にして、汝の心は酷し。而して汝自らを何等かの大いなる力強きものと思へり。何となれば、汝は多くの人々及び強き人々と出で合ふことなければなり。嗚呼、オディシユウスにしてもし彼自らの國にまで歸りつきたらむには、彼方なる戸口は如何に今巾廣からむとも、やがて汝が説れ去るためにあまりにも狭きにすぐるものとなべるし。』

斯く彼は語りき。ユウリマカスはいよいよその心に憤りを加へ、恐ろしく彼を打ち眺めながら彼にまで翼ある言葉を語りき——

『嗚呼、如何に汝が卑しき者ながら、やがて我は汝に有難からぬことを爲すべし。何となれば、汝は多くの貴人等の間にありてさばかり憚らず饒舌し、心のうちに聊かの恐れをも抱かざればなり。げに葡萄酒は汝の頭をみだしたりとおぼし。然らずば汝はつねにその有様にてあり、かかる空しき言葉を弄ぶものならむ。汝は乞食アイラスに打ち勝ちし故その悦びのあまりに汝自らを忘れたるにや。』

斯く言ひて彼は一つの足臺を取り上げきされどオディシユウスはユウリマカスを恐れてダリチアムのアムフィノオマスの膝のところに坐りき。ユウリマカスはこの足臺を投げて右手なる酌とりの若者を撃ちき。酌盃はひびきをたてて下に落ち、かの若者は呻吟きの叫びをあげながら、仰向さまに塵の中に倒れき。その時求婚者等はうす暗き房々の中に騒ぎ立ち、その一人の者は隣りなるものを顧みながら次の如く言へりき——

『願くは、我等の彷徨へる客人は他の處にて滅び失せたらましかば、或はこれよりさき已にこの處へ來りたらましかば。さらば彼は我等の間に在りて總てのかかる騒ぎを爲すことなかりしなるべし。されどいま我等は總て乞食等のことに關はりて争ひ始めたり。もはや善き饗宴のいかな悦びもなかるべし。何となれば、さまざまなるより、悪しきことは始りたればなり。』

その時力強きティレマカスは彼等の間にありて語りき、『友等よ、汝等は心狂へり、今汝等の有様は汝等の飲み且つ食へることを裏切り示せり。神々の中なる何者かは、思ふに汝等を動かしつつあ

るならむ。さなり、汝等の十分に飲み食ひを樂しみたる今は、汝等の心の指圖するままに、それぞれに歸りて横はり休め。何となれば、我自らとしては如何なる人をもこの處より逐ひ出ださざればなり。』

斯く彼は語りき、彼等は何れもみなその唇を嚙み、テイレマカスの憚らず語れることを驚き異しみき。その時アムフィノオマスは演説をなして彼等の間に語りき、エエリティアスの子、ナイザスの名高き子なるアムフィノオマスは語りき――

『友等よ、一つの正しき言葉の語られたる時、何人も恐らくは辛き言葉をもて他なる者を責め且つ怒らざるべし。汝等はこの他處人を、又神の如きオディシユウスの家の中なる僕等の何者をも辱げされ。いざ、かの葡萄酒を携へたる者をして次々に各の盃にまで注ぎ捧げしめよ。そは飲物の捧物をなしたる後我等が家に歸りて床に横はるを得むことのためなり。されど我等をしてこの他處人をオディシユウスの館やかたの中に、テイレマカスの見張りの下もとに留とどめしめむ。何となればテイレマカスの家にまで彼は來りしなればなり。』

かく彼は語りき。彼の言葉は彼等の總てにまで悦ばれき。その時アムフィノオマスの臣下にしてダリチアムの使者をなしたりしミニリアスは彼等のために葡萄酒をうすめて飲みよく爲しき。

彼は總ての人々の傍に立ち、次々に彼等にまでそれを注ぎ分ちき。彼等は祝福せられたる神々の前に注ぎ捧げて、蜜の如く甘き葡萄酒を飲みき。いま彼等が注ぎ捧げて心ゆくかぎりを飲んだりし時、彼等はおのがじしその家に歸りて横はり休むべく立ち去りき。

第十九章

オディシユウスとティレマカスとはかの廣間より上なる房にまで武器をうつす。やがてオディシユウスはピネロオビと相語りて、彼の冒險したる事のうちなる面白き物語をなす。ユウリクリイアはオディシユウスに浴みさせながら彼の膝の古傷によりてオディシユウスなることを知りたれど、彼はそれをピネロオビにまで告げ知らすことを許さず。

今よきオディシユウスはアシイニの神の助けによりて、かの求婚者等を屠り殺すことを目論みながら、かの廣間のうちに留りたりき。さて直ちに彼は翼ある言葉をティレマカスにまで語りき――

『ティレマカスよ、我等は各の武器をかくし置かざるべからず。而してかの求婚者等がそれ等のものあらざるに心付き、それ等のものにつきて汝に問ひ尋ぬる時、汝は穩やかなる言葉をもて

彼等を欺き言ふべきなり――

『煙のかからぬところに我はそれ等のものを移したり。何となればそれ等のものはオディシユウスがトゥロイにまで行きし時、その昔彼のあとに残ししところの物の如くならずして。もはや全く錆び曇りたり。さばかり力強く火の息はそれ等のものの上に及びたり。しかのみならず何等かの神ありて今一つの大きいなる心遣ひを我に思ひ浮ばしめたり。即ち汝等が葡萄酒に酔ひたる時、汝等は汝等相互の間に争ひを起し、相手を傷けあひ、それに依りて饗宴と求婚とを汚すことあるやも計りがたしと思ひしなり。何となれば、鐵は自らにして人を引きつくればなり。』

斯く彼は語りき。ティレマカスは彼の親愛なる父にまで聴き従ひて、乳人のユウリクリイアを呼び出だし、彼女にまで語りて言へりき――

『老女よ、いま我は汝に乞ひ求む。我が父のこの處を去りし時、又我が尙ほ幼なかりし時より以來、廣間の内に棄て置かれて煙の爲めに煤ぼり錆びたる我が父の善き武器を、我が今武器の庫に藏め置かむまで、かの婦等を彼等の房に閉ぢ込めてあれよかし。我はそれらの物を、火の息の及ばざる處に藏め置かむことをねがふなり。』

その時善き乳人なるユウリクリイアは彼に答へて言へりき、『ああ、我が兒よ、汝にして若し苟

くもこの家を思ひ、總てのこの富を守る上に斯くまで心遣ひをなさむとねがはましかば。されど
いざ、汝の行くとき、汝の爲めに灯を携へたるべきかの少女等が、汝に先立ち行くことを汝はね
がはざるなれば、何人か今その灯を揚げて汝と共に行くべきぞ。』

その時賢きティレマカスは彼女にまで答へき、『この處なるこの他處人ぞよかるべき。何とな
れば、我は我が麵麩を食ふところの何人をも無爲にしてあらしむるをねがはさればなり。そは彼
が遠きより來れるものならむともまた然り。』

斯く彼は語りき。而してその言葉は彼女の心に残り留まりき。彼女は見事に造り成されたる
室々の扉を閉ぢき。やがて彼等二人はオディシユウスと彼の名高き子とは起ち上り、胄と、盛り上
りたる盾と、端の尖りたる槍とを運び入るることを始めき。彼等の前に、パラス・アシイニは金の燈
明臺を運びて、いと美しき光を投げひろげき。その時ティレマカスは忽ち彼の父にまで語りき

『父よ、我自らの目をもて我が見るところのこれは、まことに大なる不可思議なり。少くともこ
の廣間の壁と屋根の見事なる大梁と、松の木の横梁と、高く走れる柱とは、あたかも燃え立てる
火に照らされたるが如く明らかに見ゆ。げに、廣き天上を守れるそれらの神々の中なる何等かの

神はこの内に臨めるならむ。』

智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき、『靜かにしてあれかし。而して汝の思ふと
ころを包み、それにつきて問ひ尋ぬることなかれ。見よ、こはオリムパスを守る神々のつねに
爲すところなり。されど汝は行きて臥し横はれ。我はこの處に止まりて、更に少女等と汝の母と
の心を誘ひ動かさむ。彼女は彼女の悲しみよりして順次に各々の事につきて我に問ひ尋ぬるな
るべし。』

斯く彼は語りき。ティレマカスは廣間を通りぬけて、燃え立てる炬火の光によりて彼の室にま
で行きぬ。その室はこれまで甘き眠の彼を襲ひ來りし時、彼が臥し横はりしところのものなり。
その處に今もまた彼は臥し横はりて、輝かしきあかつきの現るるを待ちき。されど善きオディシ
ユウスはアシイニの神の助けによりてかの求婚者等を屠り殺すことを思ひはかりつつ、廣間の内
にあとに残れりき。

今賢きピネロオビはアルテイイミズ又は金のアフロダイテイの如くして彼女の房より出で來り
き。而して人々は彼女がつねに坐り慣れたる處なる火の前に、近く彼女の爲めに一の椅子を置きぬ。
その見事に造り成され、銀と象牙とをもて飾られたる椅子は、かつて工人イクメエリアスの作り

しものにて、それには椅子の一部なる足臺をも附けてあり、その上には大なる羊の毛の布きのべらるるをつねとしたりき。さて此處に賢きピネロオビは腰を下ろし、次ぎに腕白き侍女等は婦等の房より來り、多くの食物の片と、食卓と、かの思ひ上れる求婚者等の飲みたりし盃とを取り片附けはじめき。彼等は又火を火鉢より床の上にまで掻き落し、明るく且つ温かになすべく多くの新なる薪を火鉢の上に積み上げき。

その時ミランゾオは更に再びオディシユウスを罵りはじめて言へりき、『他處人よ、汝は夜も家の内をうろづき廻り、婦等を狙ひて、尙ほ我等を惱まさむとするか。さなり、汝あさましき者よ出でて行け。而して汝の夕食を儲けたることを有難く思へかし。然らざれば、直ちに汝は炬火をもて打ち叩かれ、かくして戸の外へ逐ひ出さるべし。』

その時智謀に富めるオディシユウスは恐ろしく彼女を眺めやりながら言へりき、『善き婦よ、斯くも怒れる心より我に當り散らすところの汝は何物にか憑かれたる。そは我が醜き姿をなし、あはれなる着物をまとひて行きめぐり、乏しきに堪へずして國內を乞ひ歩くことの故なるか。かくの如きは乞食をなす者の、また流浪せる人間のあるべき有様なり。何となれば、我もまた曾つては人々の間に我自らの家を有ち、豊かなる家をもてる富豪なりき。而してあまたたび我は、如何

なる有様の流浪者にてあらむとも、また如何なる物を求めて彼の來りしならむとも、その流浪者の求むる物を與へむことをねがひき。又我は數知れぬ僕等を有ち、更に人々の泰らかに生き、富と謳はるる爲めにあるべきほどの總ての他なる物を夥しく有ちたりき。されどクロオノスの子なるヂユウスの神は、總ての物を我に無からしめき。何となれば、そは思ふに彼のねがふところなりければなり。されば婦よ、いつかは汝も亦、今汝が侍女等の間に秀でたる總ての汝の美しき姿を失ふことの無からむ爲め心せよ。汝の女主にして若し汝を怒ることあらば、或はオディシユウスにして若し歸り來ることあらば、それほどの事はたやすく起るならむ。我が斯く云ふは、オディシユウスの歸り來ることにつきては、尙ほ必ずしも望みなきにあらざればなり。而してたとひ彼にして汝の思ふ如く滅び失せてあり、つひに再び歸り來ることのなからむとも、尙ほ且つアポロの恵みによりて彼には彼と似たるところの一人の子ティレマカスあり。婦等の中なる何人も彼の家の内にありて、彼に知られずして恣なる行を爲すことを得ざらむ。何となれば、彼はもはやそれに心附かざるほどの年頃にあらざればなり。』

斯く彼は語りき。賢きピネロオビは彼の語れるを聞き、かの侍女をたしなめて言へりき——
『汝向ふ見ずなる耻知らぬ者よ、汝の大なる罪の我にまで隠されてあらざることと思へ。而して

汝の頭の上にその事の贖ひを汝はなさざるべからず。何となれば、汝は我が唇よりして聞きしことの故に十分に善く知ればなり。如何に我が夫の消息につきて、我が館の中にてかの他處人に問ひ尋ねむことを思へるかを知ればなり。何となれば、我は痛ましくも苦しみ居ればなり。」

斯く言ひし後彼女は家の事を司れる婦のユウリノオミにも亦語りて言へりき——

「ユウリノオミよ、かの他處人が坐して我と語り、我が言葉を聞くことを得む爲め、羊の毛を布きたる一の腰掛をこの處に持ち來れ。何となれば、我は總ての彼は物語を彼に問ひ尋ねむことをねがへばなり。」

斯く彼女は語りき。乳人は取り急ぎて一の磨き立てられたる腰掛を持ち來り、その上に羊の毛の敷物を投げ展げき。やがて毅き善きオデイシユウスはその處に腰を下ろしき。而して賢きピネロオビは先づ語りて言へりき——

「他處人よ、我は敢へて先づこの事を汝に問ひ尋ねむ。汝は人々の子の中にて何人ぞや。また何處より來りしぞ。汝の市は何處ぞ。汝を生みしところの人々は何處にありや。」

智謀に富めるオデイシユウスは彼女に答へて言へりき、「后よ、廣き世界の中なる如何なる人間も汝を咎むること能はざるべし。何となれば見よ、汝の善き評判はあたかもかの、神々を畏れ敬

ひ、多くの力強き人々の間に君臨して正しきを支へ守るところの、咎むるに由なき國王の善き評判の如く廣き天上にまで聞えたり。黒き地は小麦と大麥とを産み出し、樹木は豊かに實を結び、今は子を生みて生まざることなく、海は善き導きによりて魚類の善き貯へを與へ、民草は榮えに昌ゆるといふやうなる宜しき國の國王の善き評判の如くにも聞えたり。この故に汝は今汝の家にありて、汝がねがふところの他の如何なる事柄につきても我に問ひ尋ねよ。されど我が族と我自らの國とに就きて問ひ尋ねざれ。然らざれば、思ふに汝は更に甚だしき苦しみをもて我が胸を充たすならむ。何となれば、我は多くの悲しみをもてる人間なればなり。しかのみならず、他人の家にありて徒らに泣き歎かむことは我にふさはしからず。何となれば、絶間なく常に悼みなげくは無益の業なればなり。若しさらば恐らく、かの少女等の一人或は汝自ら我を怒りて、我は葡萄酒に酔ひしれたる者の如く涙に耽れりと言ふべし。」

その時賢きピネロオビは彼に答へて言へりき、「他處人よ、希臘人等がイリオスに向ひて船出し彼等と共に我が夫なるオデイシユウスの行きし日に、神々は我が容貌の勝れたるところのものを滅ぼし去りしと覺し。若し彼にして苟くも歸り來り、この我が暮らしを見守りくれたらむには、その如く我が評判は善く且つ見事なるものとなりたるべし。されど今我は悲しみの中にあり。かばか

り夥しき禍の群を何等かの神は我が上に送り來したり。何となれば、かの島にてギリチアムと、セ
エミと、森深きツアシンサスとに君臨せる總ての貴人等は、彼等は我が意に反きて我に求婚し、こ
の家を食ひ盡しつゝあり。この故に我は他處人をも、哀願者をも、公の使者等をも、民共の神靈
にせられたる工人等をも心に留むることをなさず。ただ我はオディシユウスを憧れ望むことによ
りて我が胸をすりへらせるなり。かくて彼等は我が婚姻を迫り立て、我は詭計をもてそれを禦げ
り。はじめ何等かの神ありて、此家の内に一の大なる織機を仕立つること、それにて地絲の精
かなる幅廣き衣を織ることを我が心にまで吹き込みき。やがて我は彼等の間に語りて言へりき。
『汝等身分よき若人等よ、我が求婚者等よ、今善きオディシユウスは死せるなれば、汝等は我が
此婚姻をはかどらすべく如何ばかり切にねがへりとも、我がこの衣を織り上ぐるまで忍びて待て
よかし。我はこの絲の如何なる用をもなさずして失はるるをねがはじ。こはかの勇士レエアルテ
イイズの上に死滅の運命の見舞ひ來らむ日に於て、彼に纏はすべき經幄子なり。さらば、大なる
持物を有てりし人なる彼の、經帷子なくして横はるべかりし時我が上に下さるべき咎めを、希臘
人の婦等の中なる何人も我が上に下すことあらざらむ。』
斯く我は語りき。而して彼等の高き心はそれに同意しき。乃ち晝の間に我はかの大なる織機を

織り、夜に入りて我が傍に炬火を置きたりし時我はその機を斷ち切りき。かくして三歳の間我は
巧みに事を包みかくし、希臘人等の心を欺きたりき。されど日を迎へ月を送りて四歳目になりし
時、その時かの恥知らぬ向ふ見する侍女等の助けによりて、求婚者等は來りて我を看破り、聲
高に我を罵りき。かくして我は心ならずもかの織機を織り上げき。何となれば、しかなさざるを
得ざりければなり。而して今や我は婚姻を脱るることも、この上の如何なる謀をなすことも叶は
ず。而して我が父母は我が嫁ぐことを我に迫り、我が子は、彼の心配りするとき、かの求婚者等
が彼の生業を食ひ盡すことを苛立ち憤れり。何となれば、今や彼は自ら彼の遺産を護り得可き、
またチユウスが名譽を許し與ふるところの人間となりたればなり。されど汝が如何なる種族の生
れなるかを我に告げ知らせよ。何となれば、汝は古き物語にある如く椶の樹または岩より生れ出
でたるものにあらざればなり。』

智謀に富めるオディシユウスは彼女に答へて言へりき、『嗚呼、レエアルテイイズの子なるオデ
イシユウスの敬はれたる妻よ、汝は我自らの種族に就きて我に問ひ尋ねることをやめざるか、さな
り、されど我は汝に告げ知らすべし。思ふに汝は我が痛ましき悲しみを更に痛ましきものとなす
なるべし。何となれば、今我がある如く久しく彼自らの國を離れて、甚だしきなやみのうちに多く

の市々を彷徨ひ渡りたる人間は、その如き痛ましき悲しみを有てるものなればなり。されど尙ほ且つ我は汝が我に問ひ尋ねるところのものを汝に告げ知らすべし。葡萄酒の如く暗き海の真中にクリイトと呼ばれたる國あり。水をもてかこまれたる麗しき豊なる國にして、そのうちに數知れぬ多くの人々と九十の市々とあり。その言葉はただ一つならずしてさまざまなるものを交へたり。ある處には希臘人、ある處には心氣高きクリイトのクリイト人等、またある處にはサイドニア人とドリリア人と善きベラスジア人と住めり。これ等の市々の間にノオザスの大いなる市あり。マイノスが九歳に及びし時その市を治め始めき。彼は大きいなるチヌウスと語りあへりき。而して我が父即ちデウカリオンの父なりき。さてデウカリオンは我とアイドミニウス王とを生みき。然るに彼はエエトウルウスの子等と共にイリオスにまで空洞なる船にて行きたりき。我は二人の兄弟のうちなる弟にして、我が聞えたる名はイイソムなり。その處に我はオデイシユウスを見て彼に客人の贈物を爲しき。何となれば、彼がトウロイの國に向ひてありしとき、風の力は彼をもクリイトにまで運び來り、マリイアを過ぎて彼を漂はせ來りたりければなり。斯くて彼は港に到り着くこと難きままに、イイリジヤの洞に近きアムナイザスに彼の船を留めき。而して辛うじて彼は嵐をまぬがれき。やがて彼はかの市に到り着きてアイドミニウスを尋ね、自らが彼の友にし

て、愛情と尊敬とを彼にまで捧げたりしことを言へりき。されどそはアイドミニウスがその船にてイリオスにまで出で行きたりし後十日目^此は十一日目のことなりき。その時我は家にまで彼を導きて、我が家のうちなる夥しき物を取り出で、總ての親切なる歡待を彼に與へき。また彼及び彼に従へりし彼の仲間なる他なる人々の爲めに、我は公の蓄へのうちより大麥の粉と暗き葡萄酒とを、更に彼の心を悦ばすための牡牛を集めて與へき。その處に善き希臘人等は十二日の間を留りき。何となれば、何等かの怒れる神の吹き起したる強き北の風は、彼等をその處に閉ぢ込め彼等^のの上^にはあることを許さざりければなり。十三日目に風は落ちて、やがて彼等は碇を上げき。斯く彼はまことしやかに偽りの物語を爲し、彼女の涙は彼女の聴きたりし時流れ落ち、彼女の肉は解けゆるみき。而して西の風が高き山々に吹き落したる雪を、南東の風があたか^に吹き渡りて解かす時、その解けたる雪が川の流れを滿ち溢れしむる時の如く、恰もそのことの如く彼女はその傍に今しも坐したりし彼女目らの夫を悼み嘆きし時、彼女の麗しき頬はその涙に滿ち溢れたりき。今オデイシユウスは彼女の悼み嘆くを見てその真心の底より彼の妻を憫れみき。されど彼の目は恰かも角又は象牙にてもありしかの如くその目蓋の間に動かさずして立ちたりき。而して巧みに彼はその涙をかくしたりき。されど彼女が心ゆくかぎり^を悼み嘆きたりし時、彼女は彼に

答へて言へりき——

四九八

『いま他處人よ、我は尙ほ且つ今少し汝を試みて、汝の言へる如くまことに汝の家の中に彼の神聖なる仲間等と共に我が夫を歡待したりしや否やを知り確めむことを願ふなり。抑も彼はその身體のまはりに如何様なる着物をまとへりしぞ。彼自ら如何様なる人にてありしぞ。また彼に従へりし彼の仲間等に就きて我に告げ知らせよ。』

智謀に富めるオディシユウスは彼女に答へて言へりき、『后よ、斯くも久しく彼と離れたりし人間に取りて、總てのこれ等のことを汝に告げ知らさむは易からじ。何となれば、彼が彼處に到り着き、我が國を去りし後今や二十年目にもなればなり。されど尙ほ且つ我は我が心の目に見るところのものを汝に告げ知らすべし。善きオディシユウスは二重になれる厚き深紅の外套を纏ひき。その外套には金をもて作れる一つの飾針をつけたりしが、それには針を包む二つの鞘あり、またその金にて作れる飾針の表には一つの珍しき模様を打ち出したりき。乃ち一つの犬はその前足に斑なる鹿の子を掴みながら、その鹿の子の身悶えするを打ち眺めたる模様なり。そは金にて作り出だされしものながら、犬は鹿の子を打ち眺めながらそれをしめ殺さむとしてあり、鹿の子は足をもてもかきながら脱れ去らむとしてある様の、驚くべき技巧を總ての人々は驚きぬ。しかのみ

ならず我は乾ける玉葱の皮の輝ける如く、彼の身體のまはりに照り輝ける上衣を認めき。そはさばかり滑かにして且つ日の如くきらきらと照りたりき。げに多くの婦等はそれを眺めて驚きおしみき。されど今一つのことを我は汝に告げ知らすべし。汝はそれを汝の心のうちに記しとどめよ。我はオディシユウスが故郷にありても斯かる物を纏へりしや否や、或は彼が速き船に乗りて行きし時、彼の仲間なる一人よりその着物を與へられしや否や、或はそれを與へし者の何等かの他處人なるべきや否やを知らず。我が斯く言ふは、オディシユウスは多くの人々にまで親しまれてあり、且つ彼の仲間希臘人等は極めて尠かりければなり。我も亦彼に青銅をもてつくれる一つの劍を與へ、二重の鬘をもてる見事なる深紅の外套と房のつきたる上衣とを與へき。而して我は總ての敬意を拂ひて彼の船にまで送り返しき。しかのみならず、彼より些か年上なる一人の僕は彼に従へりき。我は彼に就きて亦如何様なる人にて彼がありしかを汝に告げ知らすべし。彼は圓き肩と黒き肌と毛の渦巻ける頭とを有ち、その名をユウリベエテイイズと呼ばれたり。而してオディシユウスは彼の總ての仲間等に越えてその僕を敬ひき。何となれば總ての事柄に於てその僕は彼自らと心を同じくしければなり。』

斯く彼は語りき、而してオディシユウスの彼女に示したる確なる徴を彼女が知りし時、彼は彼

女の胸のうちにいよいよ泣かまほしき心を起さしめき。斯くて彼女がその心ゆくかぎり泣き嘆きたる時、その時彼女は彼に答へて言へりき——

『他處人よ、今げに前程まで憫まれたりし汝は、我が館のうちにありて親しみ敬はるべし。何となれば、汝の言葉によりて思ふに、我こそはそれ等の着物を彼に與へ、それ等のものを我自らたたみ、それ等のものを房より運び出で、更に彼の飾りとなすべく輝ける飾針をつけ加へたりしなれ。されど我は彼自らの親愛なる國に歸り來れる彼を悦び迎ふる時なかるべし。乃ちオディシユウスが空洞なる船にてかの悪しきイリオスを見るべく去り行きしは、悪しき運命によりて行きしなり。』

智謀に富めるオディシユウスは彼女に答へて言へりき、『レエアルティイズの子オディシユウスの敬はれたる妻よ、今汝の麗しき肉を此上滅ぼすことなかれ。或は汝の夫を悼み嘆くことによりて、汝の胸をすり減らすことなかれ。固より我はそのことをもて汝を咎むる者にあらず。何となれば、相慕へる間にして兒等を生みなしたる、その夫を失へる多くの婦等は、その夫のオディシユウスに遠く及ばざるなれども悲しみ嘆けばなり。さなり、汝の悼み嘆くことを止めて我が言葉を汝の胸のうちに記しとどめよ。我は謬なきことを汝に告げ知らせ、如何なることをも包み隠

さざるべし。さて我は近頃オディシユウスの歸國に就きて聞きたり。彼はこの處に遠からぬシスプロオティアの人々の肥えたる土地に尙ほ生き有らへてあり、國々の間を乞ひ求めながら、多くの優れたる財を携へたりとなり。されど彼はスリネエシアの島より出で立ちし間に、葡萄酒の如く暗き海の上にて彼の親愛なる仲間等と彼の親愛なる空洞なる船とを失ひたり。何となれば、彼の仲間等がヒリオスの牛を屠り殺したりし事の故に、デュウスとヒリオスとは彼を憤り憎みたりければなり。彼の仲間等は總てみな海の洗へる中に滅びしかど、波は彼を船の龍骨に乗せて海岸に運び、神々に血統近きフィエシア人等の國に投げ上げき。フィエシア人等は恰も神になす如く眞心よりして敬ふことを彼に爲し、彼に多くの贈物を與へ、彼等自ら安らかなる故郷に彼を送り返さむことを願ひき。げにオディシユウスはその處に久しく留らむことを願ひき。されど彼は彼が廣き國々を彷徨ひ渡りて多くの富を集むることを更に賢しと思ひき。まことにオディシユウスは地の上なる總ての人々に越えて有用なる業に長けたりき。如何なる人間も賢さに於て彼と相競ふことを得ざりしならむ。斯くシスプロオティア人等の王なるフィイドンは我に告げき。加之、我自らの目のあたりにて、彼の家にして飲物を注ぎ捧げながら彼の誓へりしところに依れば、船は海にまで引き下ろされてあり、またオディシユウスの親愛なる國にまで彼を運ぶべかりし仲間等

は既に備へられたりき。されどその事に先きだちて彼は我を送り出だしき。何となれば、たまたまシスプロオティア人等の一つの船は穀物に富める國ダリチアムに赴かむとしてありければなり。王はオデイシユウスが集めたりしところの總ての富を我に示しき。げにそは彼の後なるその兒等の爲めに、十代目に至るまでも足れりしなるべし。彼が王の家に蓄へたりしところの財は斯くも大いなるものなりき。王の言ふところに依れば、オデイシユウスは今や久しく遠ざかれる彼の親愛なる國にまで如何にして歸り行くべきか、公にして行くべきか、或はひそやかにして行くべきかを、ヂユウスの託言にきくべく、高き葉の繁りたる神の櫛の樹よりききとるべくドドナにまで行たりしなりき。

我が汝に告げ知らす如く、この有様にして彼は安らかにあり、且つ程なく歸り來るべし。彼は甚だ近き處にあり、この上久しく彼の友等と彼自らの國とより離れてあらざるべし。しかもこの事に就きて我は汝にまで我が誓ひをなすべし。神々の中にいと高きいと善き者なるヂユウスよ、また我が來れる氣高きオデイシユウスの寵よ、まづ我が證人となれ。總てのこれ等の事は確に我が汝に告げ知らす如く爲しとげらるべし。かの古き月の滅びて新しき月の生れ行く間に、この年のうちにオデイシユウスはこの處に來るべし。』

その時賢きピネロオピは彼に答へき、「嗚呼、他處人はこの言葉のなしとげられむことを願へよかし。間も無く汝は我が手より親切と親切なる多くの贈物とを與へらるべく、かく汝に出で合ふほどの人は何れもみな汝を仕合なる者と呼ぶべし。されど我が胸のうちには一つの蟲の知らせあり。而してその知らせの如くなるべきなり。オデイシユウスは最早歸り來たらざるべく、汝も亦この處より護送せられて去ることなかるべし。何となれば、今やオデイシユウスが人々の間にありし時の如く、如何なる君もこの家に在りて、客人等を敬ひ迎へ、彼等を送り立たすことをなさざるべければなり。されど我が侍女等よ、汝等はこの人の足を洗ひ、彼の爲めに寢床を伸べ、外套と輝ける毛布とをも備へよかし。善く且つあたたかにして彼が金の玉座につけるあかつきの時まで及ぶことを得むために。而して夜明ければ夙く彼に浴をさせ、彼に油を塗れ。家の中にてテイレマカスの傍に、安らかに坐して彼が食事を爲すことを得むために。そはこの他處人を惱ます求婚者の中の何れの惡意ある人々にとりてもより、惡しかるべく、げに彼はこの後いかに酷だしく憤りたらむとも、彼自らこの處に何等の爲すところなかるべし。何となれば、若し浴みをせず、油を塗られず、惡しく着物をまとひて、汝が我が家の食事に坐したりしならむには、固に我が才略と謀とに於て總ての婦等に僂ぐれたるや否やを、他處人よ、如何にして汝は知るべきぞ。人間の

生涯はかなりに短し。人にして若し心酷き人間ならむには、總ての人々は彼の尙ほ生き存へたる間に、來るべき時に於て彼の上に悪しき事を願ひ、彼の死したる時彼を嘲り笑はむ。されど人にして若し咎むべきところなき人間ならむには、彼の客人等は全地の上に彼の善き名を傳へ弘め、多くの人々は彼を呼びて高貴なりといはむ。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼女に答へて言へりき、『嗚呼、レエアルティイズの子なるオディシユウスの敬はれたる妻よ、さきに我が櫓長き船に乗りて、クリイトの雪深き山をあとに去り行きしこのかた、げに外套と輝ける毛布とは我にいとほし。さなり、我はこれまでねつかれぬ夜々を臥し慣れたりし如くにして臥し横はらむことをねがふ。何となれば、まことに多くの夜々を我はあさましき寢床の上に横はりて、輝かしきあかつきの現るるを待ちたりければなり。足を洗ひすすがるもはや我が悦びにあらず。汝の家の内の侍女なるそらの者の如何なる婦も我が足に觸るべきにあらず。偶ま心忠かなる何等かのふるき妻ありて、我自らほどに多くの患を堪へ忍びたる妻ありて、それを爲すにあざれば。我は固より左様なる者のありて我が足に觸るるを惡まざるべし。』

その時賢きピネロオビは彼に答へき、『親愛なる他處人よ。何となれば、これまで遠きよりこの我が家に來たりし他處人等のうち、斯くまでに慎しみ深く智慧の言葉を語り出づる、汝の如く親愛なるまた心賢しき人はあざりしなり。我に物解りよき心を有てる一人の老ひたる婦あり。彼女は我が夫なるかの不幸なる人を忠實に養ひ育てき。彼女は彼の母の彼を生みし時その腕のうちに彼を引き取りき。彼女の力は弱りたれども、彼女は汝の足を洗ふべし。賢きユウリクリイアよ、今起ちて汝の主と齡を同じふせるところのこの人を洗ひ濯げ。げに或は斯くの如きものオディシユウスの足にして、又斯くの如きもの彼の手なるやも知るべからず。何となれば、禍のうちありて人々は速かに老ゆるものなればなり。』

斯く彼女は語りき。かの老ひたる婦はその手をもて面を覆ひ、熱き涙を注ぎ、嘆きの言葉を語りて言へりき――

『嗚呼、兒よ、汝の爲めに我は、施すところなき我は禍なるかな。思ふに汝は神を畏るる魂を有ちたれど、ヂユウスの神は總ての人々に越えて汝を憎みしならむ。何となれば、汝が滑かなる老年を迎へて、汝の名高き兒を育て上ぐるを得むことの爲め祈り求めつつ、雷を悦びとなすところのヂユウスにまで與へし如く、彼にまでさばかり多くの肥えふとりたる股の肉と、さばかり多くの優れたる犠牲とを燔き捧げたる如何なる人間も曾つてあざりければなり。然るに今一人汝より

ヂュウスの神は汝の歸國の目を悉く打ち滅ぼしたり。思ふにいつにてもあれ彼が名高き玉宮にまで到りし時、恰かもこの處に此等の耻知らぬ婦等の悉く汝を嘲り辱しむる如く、彼をもまた遠き他處國にて婦等は嘲り辱しめしならむ。汝が汝の足を洗ひ濯ぐことを彼等に許さざるは、彼等の嘲りと多くの辱かしめとを避くるためならむ。されどアイケエリアスの女なる賢きピネロオビは、まことに悦びてこの業をなすなる我に言ひ附けたり。この故に我はピネロオビの爲めにも汝自らの爲めにも汝の足を洗ひ濯ぐべし。何となれば、我のうちなる我が心は動かし亂されたればなり。されどいざ、我が語るべき言葉を心にとめよ。旅疲れしたる多くの他處人等は今までにもこの處に來りたり。されど我は敢て言はむ、聲にも足の有様にも、汝がオデイシユウスに似たる如く、その如く他なるものに似たる他處人を我は見しことなし。』

その時智謀に富めるオデイシユウスは彼女に答へて言へりき、『老ひたる婦よ、オデイシユウスと我と、我等二人を見し處の總ての人々は、汝の心附きて言へる如く我等の互に甚だしく相似たることを言ふなり。』

やがてかの老女は彼の足を洗ひ濯ぐために輝ける大釜を齎し來り、先づ多くの冷たき水を注ぎ入れ、次に温かなる水を交ぜ合しき。いまオデイシユウスは爐より起ちて、忽ちにその面を暗闇

にまで振り向けぬ。何となれば、彼女が彼をあづかひし時彼の古傷を認め、總ての事を暴露せらるるやも知れずと心附きたればなり。今彼女は彼を洗ひ濯ぐために寄り近附きぬ。而して立所に彼女は、久しき前に猪がその白き牙をもて彼に加へたりし傷の跡を認め知りき。彼がその傷を受けしは彼がオオトリカス並に、偽ることと誓ふこととに最も秀でたりし彼の母の氣高き父なるオオトリカスの兒等を見る爲め、パルナッサスに赴きし時のことなり。その秀でたる技術をハアミイズの神自らオオトリカスに與へき。何となれば、彼は山羊と仔山羊の股の肉の悦ばしき捧物を彼にまで焼き捧げければなり。げにこの故にハアミイズは悦びて彼を助けしなりき。さてオオトリカスは曾つて豊なるイサカの國にまで赴き、彼の女の新に生める幼兒を見出だしき。而して彼が樂しき食事を了へたりし時、見よ、ユウリクリイアは彼の膝の上にその幼兒を置き、彼に挨拶して言へりき、『オオトリカスよ、今汝の兒の生める兒に與ふべき一つの名を汝自ら見出でよ。何となれば見よ、彼は多くの祈りに依りて生れたる兒なればなり。』

その時オオトリカスは答へをなして言へりき、『我が女並びに我女の夫よ、汝等は如何なる名にてもあれ我が汝等に告ぐるところのものを彼に與へよ。我は男と婦と多くのものに對する怒りの故に實多き地の上をこの處に來れるなれば、幼兒をして怒りの人、即ちオデイシユウスと呼ばれし

めよ。されど幼児が大人となりて、バルナツサスなる彼の母の肉身の大いなる家に來らむ時、我は我が持物の中より贈物を爲し、彼をして楽しきその歸途に出で立たしむべし。』

この故にオディシユウスはかの見事なる贈物を受けむとて出で行きしなり。オオトリカスとオオトリカスの兒等とはオディシユウスの手を握り、やさしき言葉をもて彼を迎へ、また彼の母の母なるアムフィシヤはその腕のうちに彼を抱きしめ、彼の顔と彼の麗しき二つの眼とに接吻けしき。やがてオオトリカスは饗應の備へをなすべく彼の名高き兒等にいひつけ、彼等はそのいひつけに聽き従ひき。斯くて直ちに彼等は五歳の牡牛を引きいれて皮剥ぎ、急がはしく備へを爲して總ての手足を切り割き、手際よくそれ等のものを切りきざみ、燂串に貫きて巧みに燂り、それを客人等に分ち與へき。かくて終日日の沈み入るまで彼等は饗宴を張り、彼等の魂はよろしきにかなへる食物を心ゆく限り味ひ楽しみき。されど日の沈みて暗闇の迫り來りし時、彼等は臥し横はりて眠ることの悦びを取りき。

今指紅き夙きあかつきの輝き出でしや否や、彼等はいづれも、獵犬とオオトリカスの子等とは狩にまで出で行き、彼等と共に善きオディシユウスも行きぬ。かくて彼等は森深きバルナツサスの險しき丘をのぼり、速かに彼等は風強き凹みにまで來りき。今や日は恰かも深き大海の穩かな

る流より現れ出で、野の上を照らしはじめたる處なりき。その時獵人等は森林の或穴隙に到り着きぬ。而して彼等の前に獵犬は匂を嗅ぎながら追ひ行き、そのあとにオオトリカスの子等は行き、また彼等の間にありて善きオディシユウスは、かの獵犬にまちかく一の長き槍をふり廻しながら進み行きぬ。偕て一の繁き藪蔭に一の大なる猪は臥したりき。その藪を通しては濕りたる風も力も吹き入ることなく、輝かしき日の光もさし入ることなく、雨の滴もまた落ち來ることなかりしなり。さばかりその藪は繁りてあり、その内に夥しき落葉もありしなり。人々と獵犬等とが追ひ迫り來りし時、彼等の足を踏みつくる音は猪の耳にまで及びき。彼は悉く毛の逆立ちたる頭と火の燃え立てる眼とをもて、彼の寢床より彼等の方へ跳り出で、よんどころなくして彼等すべての前に立ちたりき。その時オディシユウスは彼の強き手に彼の槍を構へながら、猪を刺さむことをいと切に願ひ求めつつ、いちはやく突き込みき。されど猪は機先を制して、オディシユウスの膝の上に躍り込み、體をひねりながらその牙をもて深く肉に突き刺しき。されど猪は人の骨にまで突き及ばざりき。その時オディシユウスは狙ひを定めて、猪の右の肩を打ちしに、輝かしき槍の尖端は猪を悉く刺し通し、猪は一の叫びをあげて塵の中に倒れ、その命は猪を棄て去りき。その時オオトリカスの親愛なる子等は忙しく獸の死體を始末しはじめき。而して氣高き神の如きオデ

イシニウスの傷手いたでにつきては、彼等は巧みにそれを纏帯し、まじ、なひの歌をもて其黒き血を停め、直に彼等の親愛なる父の家にまで歸りき。やがてオオトリカスとオオトリカスの子等とは十分にオデイシニウスの傷手を癒しいやすやり、見事なる贈物を彼になし、速かにあらゆる深切を盡し、悦びて出で立つ客人きやくじんを悦びてイサカにまで送りき。乃ち彼の父も后あきこなる母も彼の歸りしを悦び、總ての彼の爲したる冒険につきて問ひ尋ね、また如何にして彼が其傷を受けしかにつきて問ひ尋ねき。僞らず彼は總ての事を語り告げき。即ち、如何に彼がオオトリカスの子等と共にバルナツサスにまで行きし時、かの猪が追ひつめられたるままに、その白き牙をもて彼に突きかかりしかを語り告げき。

今かの老ひたる婦おんなはオデイシニウスの傷跡のある足をとりにて、彼女の手をそれに置き、觸ることに依りてその傷跡を認め知り、俄かにその足を落ちしめしかば、オデイシニウスの膝は温ぬかなる水にまで陥り、黄銅の器うつはは高く響をたてて覆りき。而して見よ、巾なる水は地の上に散りこぼれき。その時同じ刹那に悦びと悲しみとは彼女を襲ひ來り、彼女の兩眼は涙に溢れ、彼女の聲はその出づる道をふさがれき。而してオデイシニウスの頸くびに觸れながら彼にまで語りて言へりき——
「げにさなり、我が親愛なる兒よ、汝はオデイシニウスなり。而して我は前に我が主の總ての身

體をあづかはざりし程は汝を認め知らざりき。」

斯く言ひて彼女はピネロオピの方を見やりき。そは彼女の夫つまの今歸れりし事を合圖せむとするものの如くなりき。されどピネロオピはユウリクリアの眼に出で合ふことも彼女に心を留とどむることもなかりき。何となればアシニは他なる事にまで彼女の思ひを向けしめたりければなり。オデイシニウスはかの老ひたる婦の咽喉のどを手探りしつつ、その右の手をもてそれを掴み、左の手をもて彼にまでより、近く彼女を引き寄せながら語りて言へりき——

「婦よ、如何なれば汝はまことに我を滅ぼさむとするぞ。汝自らの胸に抱き育てたりしは汝なりき。而して今苦しみと多くの悩みとをなしたる後、我は二十年目にして我自らの國に歸れり。されど汝が我を知り、またかの神がこの事を汝の心に吹き入れたるなれば、家のうちなる他の人々の聞き知らざらむことのため秘密にせよ。何となればこの事に就きて我が告げ知らすところのことは、必ずや爲しとげらるべければなり。乃ち神々にしてもしかの求婚者等を滅ぼすべく我に許さば、我は我が家のうちなる他の侍女等を屠り殺す時、我が乳人お乳ながら汝自らをも假借せざるなるべし。」

その時賢きユウリクリアは答へて言へりき、「我が兒よ、如何なる言葉の汝が唇を洩れ出でし

ぞ。汝は我が魂の如何に強くして頑カクなるかを知れり。我は堅き石又は鐵の如く確かに我自らを守るべし。されど今一つのことを我は汝に告ぐべければ、汝はそれを汝の心のうちに記しとどめよ。神々にして若しかの求婚者等を滅ぼすことを汝に許さば、さらば我は家のうちなる婦等に就きて彼等の何れが汝を蔑あはにし、また何れがその罪なきかを悉く汝に告げ知らすべし。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼女に答へて言へりき、『乳人よ、抑も汝は何故なればこれ等のことを語らむとするぞ。汝はその事を爲すに及ばず。何となれば、我自ら十分に彼等を心に留め、各の者に就きて辨へ知るべければなり。さなり、汝は汝の言葉を汝自らのうちに收め置き、他なる總ての事を神々にまで委ねよかし。』

斯く彼は語りき。かの老ひたる婦は彼の足を洗ひすすぐ爲めの水を齎らすべく廣間を出て行きぬ。何となれば、かの初めの水は悉くこぼされたりければなり。かくて彼女が彼を洗ひすすぐ、櫛櫛の油を弄く彼に塗りたりし時、オディシユウスは再び彼自らを暖むべく火により、近く腰掛を引寄せよせ。彼の破れたる衣をもて其舊瘡オホキを覆ひかくしき。その時賢きピネロオビは先づ語りて言へりき――

『他處人よ、我が敢へて汝に問ひ尋ねむことをねがふところの今一の小さな事あり。何となれば、

間もなく楽しき休息の爲めの時は来るべければなり。何人にもあれ、彼が心遣ひに類はされたりとも、苟くも甘き眠に誘はるるほどの者は、その時楽しき休息をなすなり。されど、我にまで神は悲しみを、さなり限りなき悲しみを與へたり。何となれば、我は我自らの家の仕事に、また家の内なる少女等の仕事に心配りしながら、終日心行く限りを悼み歎くなり。されど、夜の來りて、眠の總ての人人を捕ふる時、我は我が寢床に横はり、我が心の奥深く食ひ入る鋭き心遣ひは、我が悲しみの中に我を擾たし騒がすなり。恰かも緑の森のナイティンゲルなるパンデエリユウスの女が、樹木の葉繁りの中なる彼女の處より、春の初めにやさしき歌を歌ひ、さまざまに節づけて圓らかなる聲を張り上げ、彼女の兒なるイテイラスを悼み歎く如く、曾つて彼女が自ら知らずして劍をもて屠り殺したる、デイザス王の子なるイテイラスを悼み歎く如く、あたかも彼女の歌の如く、我が煩へる魂はかなたこなたへ揺れ動きぬ。そもそも我は我が子と共に留まり、總てを我が牛業ウシバの總ての物を、我が僕等及び大なる屋根高き家などを泰らかに守り保ち、我が夫の寢床と民の聲とに尊敬を失はざるべきか。或は今この館の内にて我に求婚をなし、夥しき花嫁の價を與ふるところの、希臘人等の中のいと善き者に従ひ行くべきか。今我が子は、彼が幼兒オホキにして心輕やかなりしほどは、我が嫁ぎて我が夫の家を去り行くことを許さざりき。されど、彼の生ひ立ち

て十分に大人となりし今、見よ今彼は、かの希臘人等が彼の眼前まへにして食ひ盡すところの彼の持物に對する苛い立たしさより、我が此家をすてて生れし家に歸り行くべきことを我に乞ひ求むるなり。されどいざ今、我の夢を聞き取りて、その意味を我が爲めに解き明かせよかし。我は水より出で來りて小麥を食ふところの二十羽の鵝が鳥を家のうちに有てり。而してそれを見ることを悦べり。今鶯くわいの曲れる一つの大きいなる鶯は山の上より落し來りて、總ての彼等の頸を碎き、彼等を屠り殺しき。而して彼等は彼が輝かしき空にまで舞ひ上れりし間に、床とこの上にその空骸そらがらを曝さらしたりき。夢なりしかどそれを見て我は泣き嘆きぬ。而してかの鶯が我が鵝鳥を屠り殺したりしことの故に、我が痛ましく悼み嘆きし時、髮の毛麗しき希臘の婦等に我のまはりに集れりき。されどかの鶯は引き返し來りて、屋根の梁うらばちの合せ目の上にとまり、人間の聲をもて語りて我が泣くことをやめしめき――

「嗚呼、名高きアイケエリアスの女よ、勇ましかれ。これは如何なる夢にもあらずして、むしろ汝の爲めになしとげらるべき事の眞實なる幻なり。かの鵝鳥は求婚者等なり。而してさきにかの鶯なりし我は、今汝の夫つまとして引き返し來れり。その我は總ての求婚者等の上に淺ましき死を落ちしむるなるべし。」この言葉と共に甘き眠りは我を離れき。我はあたりを見合はせて、かの鵝鳥等が

居り慣れしところなる厩庭のうちに、彼等の小麥を啄つばみつつあるを見き。」

その時智謀に富めるオディシユウスは彼女に答へて言へりき、「后よ、オディシユウス自ら如何に彼がそれをなしとぐべきかを汝に示したるなれば、何人もその夢を他の意味に解き明かすことを得ざらむ。乃ちかの求婚者等はそれぞれにまた悉く、滅ぼしつくさるべき事明かに示されたり。彼等のうちなるただ一人も死の運命を免がることあらざるべし。」

その時賢きピネオピは彼に答へき、「他處人よ、げに夢はむづかしく、解き明かさることむづかし。またその夢の中なる總てのことは人人の爲めになしとげられざるなり。暗き夢の門戸は二つありて、一つは角をもて作られ、また一つは象牙をもて作られたり。鋸のこき切られたる象牙の門を通り抜くる如き夢は偽りのものにして、なしとげられざるべき消息そほうを齎もたらすなり。されど解きたてられたる角の門を出で來るところの夢は、何人にもあれそれを見たる人間にまで一つの眞實を齎もたらすなり。されど我が異あやしき夢はその如き門を出で來らざりしやうなり。もしその如き門を出で來りしものならむには、我に取りてまた我が兒に取りて、まことにこの上もなく悦ばしきものなりしなるべし。されど今一つのことを我は汝に告げ知らすべければ、汝は汝の胸のうちにそれを記し留とどめよ。見よ、今しもオディシユウスの家より我を引き離すべき呪まじなはしき朝は近づくな

り。何となれば、今我はオディシユウスが彼の家のうちにて試み慣れたりしところの事をかの求婚者等として試みしめむとあるなり。乃ちオディシユウスは船を作る時に櫂の樹の杖を打ちたつる如く、總て十二の斧を一並びに立て置き遠く難れて自ら立ち、その總ての斧をとほして矢を射ることを常となしき。而して今我はこの業を競ふことを求婚者等に申し出づべし。乃ち何人にてもあれ、いと容易くその手に弓を引き張り、總て十二の斧をとほして射るところのものと、彼と共に我は行き、この家を捨て去るべし。我が夢の中にも、尙ほ且つ思ひ出づべき、斯くも麗しく總ての善き事に満たされたる、我が嫁ぎ來れるこの家を捨て去るべし。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼女に答へて言へりき、『レエアルティイズの兒なるオディシユウスの敬はれたる妻よ、もはや汝の家においてこの競技を遅延すること勿れ。何となれば、見よ、その處に磨き立てられたる弓を試むるその等の人人が、その弓を引き張り、かの鐵の間をとほして矢を射ることの前に、智謀に富めるオディシユウスは來るべければなり。』

その時賢きピネロオビは彼に答へき、『他處人よ、汝にしてもしいやくもなほこの家のうちに我が傍に坐し、我を悦ばす事を願ひたらむには、我が目蓋の上に眠りの注がるることなかるべし。されど人人はいつまでも眠らずしてとどまる事を得ざらむ。何となれば、不死なる神々は地

上に住める死ぬべき人間のために、眠りを、總てのものを量るところの尺度に定められたればなり。我は我が上なる房にまで上りゆき我が床の上に我自らを横たふべし。我が悲しみの場所なるかの寢床は、オディシユウスがかの呪はれたる悪しきイリオスの市を見るべく出で行きし以來常に我が涙をもて濡らされたり。其處に我は我自らを横たふべけれど、汝は下なる此處に横はり眠れよかし。汝は床の上に何等かの物をまき擱げ、或は彼等をして汝の爲めに寢床をつくらしめよ。』

斯く言ひて彼女は彼女の輝ける上なる房にまでのぼりき。而して彼女と共に彼女の侍女等も上り行きぬ。斯くて彼女は彼女の侍女なる婦等と共に彼女の上なる房にまで到りつきぬ。而して灰色の眼したるアシニの神が彼女の目蓋の上に甘き眠りを投げしまで、彼女の親愛なる夫オディシユウスをその處に悼み歎きたりき。

第二十章

オディシユウスはかの求婚者等と猥りがはしき事を行へる召使の婦等を、彼が滅ぼすべきや否やを思ひ惑へりしかど、つひに一先づ彼等を許し置くべき事に思ひ定む。彼はヂユウスよりの徳を乞ひ求め、また家族の一人より何等かの優しき言葉を聞く可く、ヂユウスが彼に許さむことを乞ひ求む。彼の乞ひ求めたる所のは二つながら與へられたり。饗宴の爲めの備へはなさる。かの求婚者等は食卓につける間に、パラス・アシニの神は恐るべき亂心をもて彼等を襲ひ撃つ。その異しき作用を見て取れるシオクリミイナスは彼等の破滅を預言したれども、彼等はその預言を嘲笑ふ。

されどかの善きオディシユウスは家の前廊に眠るべく横はりき。彼は絆ぎとられたる牡牛の毛皮を地上に伸べ、希臘人等が犠牲に屠り殺すことを常としたりしところの羊の多くの毛皮をその上に伸べ、ユウリノオミは彼が横はりしところにして彼の上の一つの外套を投げかけき。そのとこ

ろにオディシユウスはかの求婚者等に對して惡しきことを思ひ耽りながら眠りをなさずして横はりき。さてこれまでかの求婚者等と共に臥ることをつねとしたりしところの婦等は、彼等自らの間に笑ひと悦びとをなし乍ら彼等の房より出で來りき。その時オディシユウスは彼の胸のうちに掻きむしられき。而して彼が彼等の上に飛びかかりてその各を屠り殺すべきや否や、或は今一度かの思ひあがれる求婚者等と共に臥る事を彼等に許すべきや否や、それ等の事を彼は彼の心と魂とのうちに深く思ひはかりき。彼のうちなる心は苦々しく唸り呻吟きぬ。而して牝の狼が見知らざる人間の姿を認めたる時、彼女のやさしき乳香兒の上に咆えながら立ちあがり、近寄れる人間を撃たむとせちに願ひ求むる如く、その如くオディシユウスのうちなる彼の心は彼等の惡しき行ひを怒り憤りて咆えたてき。その時彼は胸の上を打ち叩きて、彼自らの心を責めながら言へりき——『我が心よ、堪へ忍べ。さなり、かのサイクロオプスが怒りにまかせて我が仲間等の力強き人々を食ひつくししかの日に於て、汝は曾てより淺間しきことをも堪へ忍びき。その時汝は死なむことを思へりしなれど、汝のさかしさがかの洞より汝自らを連れ出だすべき道を見出でしまで堪へ忍びたりき。』

彼のうちなる彼自らの魂をたしなめつつ斯く彼は語りき。而して彼の心はげに彼の言葉に聴き

従ひてその確かさを失はざりき。されどオディシユウス自らは此方彼方に寝返りをうちて横はりき。さて人が大いなる火の燃ゆる傍にありて脂と血とに満ちたる腹の肉を取り、それを此方彼方にかへしながら、そがいと速かに燐かれたらむことを願ひ求むる時の如く、その如くオディシユウスは幾度か寝返りを打ちながら、彼が如き多くのものに對するただ一人のものとして、如何にして彼がその手を耻知らぬ求婚者等の上に伸はし得可きかを思ひ沈みき。その時天上よりアシニの神は下り來り、一人の婦の姿を取りて彼に寄り近づきぬ。而して彼女は彼の頭の上に立ちて彼にまで語りき——

『今再び見よ、總ての生きてたる人間のうちいと不仕合なる者汝は何の爲めにか眠らずしてあるぞ。これはこれ汝の家にあらずや。汝の妻も、人々が彼等自らの兒として有たまほしく願ふ如き汝の兒も、共にこの家のうちに在るにあらずや。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼女に答へて言へりき、『さなり、女神よ、總てこれ等のことを汝はよろしきにかなひて語れり。されど我のうちなる我が心はその事に就きて思ひ沈めるなり。彼等がつねに相結びてある時ただ一人なる我の、如何にして我が手をかの耻知らぬ求婚者等の上に伸ばすべきかを思ひ沈めり。加之^{レハカニヤ} 次^ノよりむづかしき事柄を我は我が心のうちに思ひ煩

へり。假令わが汝の心とチユウスの心とに依りて彼等を屠り殺すべかりしとも、何處へ我はその復讐者等よりして脱れゆくべきぞ。これに就きて善く思ひ計らむことを我は汝に祈る。』

その時灰色の眼したるアシニの女神は答へき、『嗚呼信仰のうすきものなるかな。さなり、我よりも弱き者をさへ、死ぬべき人間にして然も我が如き賢さを知らざる者をさへ信ずるところの多くのものはあり。されど我はあらゆる種類の勞苦に於て最後まで汝を守護し行くべき神なり。而して今我は汝に明らさまに告げて言ふべし。死ぬべき人間の五十の群ありて、我等をとりかこみ我等を屠り殺さむことを願ふとも、汝は彼等の牛と彼等の勇ましき羊の群とをさへ逐ひ斥くべし。されど眠りをして安らかに汝をとらへしめよ。終夜眠りを成さざるは、これもまた魂の惱みなり。而して間もなく汝は汝の煩ひより救ひ出ださるべし。』

斯く彼女は語りて彼の目蓋の上に微睡^{ミクモ}を注ぎき。されど麗しき女神なる彼女自らはオリムパスにまで引き返しき。

人人の手足を弛むるところの眠りが、オディシユウスの魂の心配りをゆるめながら彼を囚^ヒにしたりし間に、彼の善き妻は目を醒し、彼女の柔かなる寢床に坐りながら泣きぬ。されど彼女が心ゆく限りを泣きたりし時、アルティイミズにまで先づかの麗しき妻は祈りをなしき——

「デュウスの女なる女神アルティイミズよ、願くは今しも汝が汝の矢を我が胸のうちに立てて、立所に我が命を取り去りたることを。或は、願くはかのあらしの風が我を掴み、かの薄暗き道々に我を運び行き、逆しまに流るる大海に我を投げ捨てたることを。さらばあらしの風がパンデエリユウスの女等を運び去りし時の如くなるべし。彼等の父と母とを神神は屠り殺し、少女等は孤兒となりて家に残されき。麗しきアフロダイティは凝りたる乳と甘き蜂蜜と葡萄酒とをもて彼等を養ひ育てき。ヒイリリは婦等の定めを越えて美しさと賢さとを彼等に與へ、神聖なるアルティイミズは善き體格を彼等に具へさせ、アシイニは總ての名高き手工の巧みを彼等に教へき。今麗しきアフロダイティは一つの悦ばしき婚姻がかの少女等のためになしとげらるるを得むことのため、デュウスに祈り求むるべく高きオリムパスにまで向ひたりき。雷を悦びとするところのデュウスにまで彼女の行きしは、運命が死ぬべき人間にまで何を與へ何を拒むかに就きて、彼は總てのことを善く知ればなり。さて彼女の行きし間に、あらしの精はこれらの少女を掴み去り、かの厭はしきヒユウリイラにまで侍女とすべく彼等を與へき。願くはオリムパスの宮殿を守る人々が斯くして人々の目のあたりより我を取り去りたることを、或はかの髪の毛麗しきアルティイミズが我を撃ち、そのために我が目の前にオデイシユウスの幻を有ちながら我が恐るべき地の下に入りゆき、或は卑しき人間の悦びをなし得たらむことを。されど終日を大いなる悲しみに泣き暮らして、夜の眠りに囚となる時、これはよく堪へ忍ばることを得む。何となれば、眠りは善きも悪しきも總てのことを忘れしむるものなればなり。されど我に在りては、神々が我に贈るところの夢さへもよろしからず。加之、恰かもこの夜人ありて我が夫の軍勢と共に出行きし、かの時の姿を取り、我が傍に臥し横はれる如く思はれき。而してその時、そが空しき夢ならで明かなる眞實の幻とも見えたりし故、我が心はいたく悦べりしなり。」

斯く彼女は語りき。而してやがて金の玉座に坐したるあかつきは來りき。今善きオデイシユウスは彼女の泣ける聲を耳にして、深き思ひに沈みき。而して彼にまで、今や彼女が彼を認め知れるやうに、又彼の頭の邊に立てりしやうに思はれき。かくて彼は彼の横れりし外套と羊の毛皮とを取上げ、それを廣間の中なる一つの高き腰掛の上に置き、かの牡牛の毛皮を扉の外に運び出でてそれをその處に横へ、彼の兩手をさし上げながらデュウスの神にまで祈りき——

「父なるデュウスよ、若し汝等神々が酷だしく我を苦めたりし後、汝等の好意よりして我を我自らの國にまで、海と陸とを越えて導きたらむには、願はくば目覺さめたる人人の中なる或者をして、家の内に善き兆の言葉を我に示さしめよ、又外には或る徴をもデュウスより我にまで顯はさ

れしめよ。』

斯く彼は祈をなして語り、助言者なるデュウスは彼に聞きぬ。立處に彼は輝けるオリムパスより、高き雲の中より雷を鳴り轟かしき。而して善きオデイシユウスは打ち喜べりき。しかのみならず、粉磨場なる一人の婦は、家の内なるいと近き處よりして兆の聲を出しき。此等の粉磨場に十二人の婦等はその業をいそしみながら、人間の髓なる大麥の粉と小麥の粉とを作りき。今總ての他なる婦等は粉を磨くことのその業をなしをへたりければ眠に就きしが、ただ一人の婦のみ總ての中にていと弱き者なりしままに尙ほ休まずしてありき。彼女は今彼女の石臼をとどめて、彼女の主にまで一の兆なる言葉を語りき――

『神神と人人とを統べ治むるところの父なるデュウスよ、聲高く汝は星多き天より雷を鳴り轟かしたれど、尙ほ且つ何處にも雲は見られず。思ふにこは汝が何等かの人間にまで示すところの前兆ならむ。希くは今、あはれなる我にまで、我が語るべき言葉を成就せよ。この日かの求婚者等はオデイシユウスの館にありて、いやはてに彼等の樂しき饗宴を張れよかし。彼等の大麥の粉をひくべく酷たらしき勞苦をもて我が膝を弛めたる彼等は、今彼等のいやはての晚饗を取れよかし。』

斯く彼女は語りき。善きオデイシユウスはその聲の兆とデュウスの雷とを打ち悦べりき。何と

なれば、彼は彼が罪ある者等の上にてを償復したることを思ひければなり。

今オデイシユウスの見事なる家の中の他なる少女等は打ち寄りて、爐の上に不斷の火を燃やしつつありき。さて神の如き人テイレマカスは彼の寢床より起ち上り、彼の衣裳を纏ひ、一の鋭き劍を肩のまはりに投げかけ、彼の輝ける足の下に彼の佳きさんだるすを結びつけぬ。彼は鋭き青銅を穿かせたる彼の大なる槍を取り上げ、行きて闕のほとりに立ち、ユウリクリイアにまで語りき――

『親愛なる乳人よ、汝等は家の内なる我等の客人を食物と寢床とにて敬ひたるか、或は彼は我が恐るる如く、如何なる心遣ひをもなされずして横れるか。何となれば、かくの如きは賢けれども我が母のしばしば爲すところなればなり。見界もなく彼女は死ぬべき人々の中なる或者を、より悪しき者を敬ひ、より善き者を敬ふこともなく送り斥くればなり。』

その時用心深きユウリクリイアは答へき、『さなり、我が兒よ、汝は如何なる咎もなき處に今彼女を咎むべからず。何となれば、かの他處人は彼の心行く限りを坐して葡萄酒を飲みき。而して食物につきては、汝の母が問ひ尋ねし時、彼はもはやねがひ求めざる由を言へりき。しかのみならず、彼が休みと眠りとを思ひ出づべき時に近くなりては、彼女は少女等をして彼の爲めに一

の寝床をのべしめき。されど彼は、全くみぢめなる不仕合せなる者として、寝床の上に毛布の下に臥ぬることを拒み、剝がれざる牛の皮の上に、又羊の毛の上にして前廊に眠りしかば、我等は彼の上に一枚の外套を投げかけき。』

斯く彼女は語りき。テイレマカスはその手に槍を携へてかの廣間を外に出で行きぬ。二匹の足速き犬は彼に従ひき。彼は善く武装せる希臘人の仲間に加はるべく集會の場所にまで赴きぬ。されどピイジイノアの兒オプスの女なる善きユウリクリイヤは聲高く彼女の少女等にまで呼ばはりき——

『いざ、汝等の或る者は急がはしく行きてかの廣間を掃き清め、それに水を撒き、見事につくられたる腰掛の上に深紅の覆を掛けよ。また他なるものは海綿をもて總ての食卓を拭ひ清め、葡萄酒を飲みよくするための壺と見事なる廣口の盃とを清らかにし、更にほかなる者は水を汲む爲め井戸にまで出で行き、水を携へていと速かに引き返せよ。何となればかの求婚者等は久しく廣間の外に在らざるべく、甚だ速く歸り來るべければなり。げにそは總ての人々の爲めに饗宴の日なればなり。』

斯く彼女は語りき。彼等はいづれもまめやかなる耳を傾けて聽き従ひき。彼等の二十人は暗き

水の井戸にまで出で行き、ほかなる者等は廣間のうちに甲斐々々しく立ち働きたりき。

やがて希臘人等の僕等は入り來りき。而して彼等が巧みに善く薪を切り割きたりし間に、見よかの婦等は井戸より歸り來りき。その時かの豚飼ひは總ての群のうちにていと優れたる三頭の肥えふとりたる牡豚を引き連れながら彼等に伴ひ來りき。これ等のものを彼は廣庭に残して飼葉を當てがひ置き、彼自らオディシユウスにまでやさしく語りて言へりき——

『他處人よ。如何にかの希臘人等はいづれも皆前よりも重く汝を見ることをなすや。或は彼等は前と同じく汝を蔑にすることをなすや。』

その時智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき——

『嗚呼、ユウメイユウスよ、願はくはこれ等の人々が暴慢にも他人の家のうちにさまざまなる我儘の振舞ひをなし、些かの耻づるところもなき、その非道に神神は仇を復せよかし。』

斯の如く彼等は互に相語りき。而してかの山羊かひなるメランチアスはかの求婚者等の爲めに備へらるべく總ての群のうちにていと優れたる者なる山羊共を引き連れながらオディシユウス等に近づき來りき。而して二人の牧羊者はメランチアスに従ひ來りき。斯くて彼はその山羊共を鳴り響く前廊の下に繋ぎ、彼自らオディシユウスに語り、彼を嘲りて言へりき——

『他處人よ、汝は汝が人人に乞ひ求むる事に依りて、この館ウチのうちに尙ほ我等にまで禍をなし、而してこの處を去り行かむとは思はざるや。我が思ふに我等が互ひに他の拳こぶしを味ひ知りたるまで、我等二人は引き分けられざるべし。何となれば、汝の乞ひ求むるは理不盡なればなり。希臘人の他なる饗宴もまた何處にかあるにあらずや。』

斯く彼は語りき。されど智謀に富めるオディシユウスは一語も彼に答へず、無言のままにその頭かしらを打ち振りながら、その胸の奥底に悪しき事を思ひ謀りたりき。

更に第三の人なる、人人の首長かしらフイレエティアスはかの求婚者等の爲めに兒を生まぬ牝メスの仔牛こぶしと、脂ぎりたる山羊とを引き連れながら來りき。(今渡守の人人は、その岸に來れるほどの者を悉く運び渡すところの船人等は彼等を選び渡しき)その家畜を彼はかの鳴り響く前廊の下に心して繋ぎ置き、彼自ら豚飼にまで近附き行きて、彼に問ひ尋ね始めき――

『豚飼よ、我等の家にまで近頃來りしばかりなるこの他處人は何者ぞ。如何なる人人より彼は生れしと言へるぞ。彼の肉親と彼の故郷の野とは何處にあるや。彼は哀れなる者なれど、尙ほ且つその有様には王侯にも似たるところあり。されど神祇かみかみは諸の王の爲めにすら悲しみの網を織りたる時、彷徨へる人人のよろしきところを滅ぼし去るなり。』

斯く彼は語りて、彼に寄り近づきながら彼を迎ふるべくその右の手を差出だし、その聲を出して翼ある言葉を語りき――

『父の如き他處人よ、安かれ。幸は來るべき時に於て汝の物にてあれよかし。されど今は汝は多くの悲しみの中に閉ざされたり。父なるヂユウスよ、他なる如何なる神も汝より酷ひどからず。汝は汝自らの生める人間の上に如何なる憐れみをも垂るる事なく、禍と甚だしき苦しみのうちに彼等を陥るるなり。我が彼を見し時汗は我が身體の上に進り出で、我が眼はオディシユウスを思ひ出でて涙に満たされき。何となれば我が思ふに、彼にして若し尙ほ生き存まゐへてあり、日の光を見てあらむには、斯の如きむさくろしき衣を纏ひて、人人の間を彷徨ひ渡れるなるべければなり。されど彼にして若し既に死に、ヘエディイズの家に行きてあらむには、さらばかの氣高きオディシユウスの我にまで悼み歎かるるかな。彼は我がシイファレニヤ人等の地に年若かりし時彼の家畜を我に委ねき。而して今それ等の家畜はその數を知らず殖え加はりたり。如何なる人間の額廣き家畜の群もこれにまさりて増し加はる事能はざりしならむ。されど他處人等は我をして彼等自らが食ふためにこれ等の家畜を追ひ來らしむるなり。而して彼等はこの家の跡繼あとついでに些かの憚るところなく、神神の怒りをも恐れ戦くことなし。何となれば、彼等は今久しく遠き處にある我等の主の持

物を彼等自らの間に分ちとらむことを切に願へればなり。今我が胸のうちなる我が心は屢々この事を繰返し思ふなり。まことに主の兒が尙ほ生き存へたる時、他處人等の地にまで去り行き、家畜と總ての物とを携へて縁なき人人にまで去り行くは悪しき行ひなるべし。されどこの處に留りて他なる人人の家畜を見張りながら苦しみ悩むは更に悼ましきことなり。さなり、久しき昔に我はかの思ひあがれる王等の何人かにまで脱れ行きたらましかばと思ふなり。何となれば、事態は今や既に堪へ忍び難きものあればなり。されど尙ほ且つ我が思ひは、或は彼の何處よりか歸り來りて、この館のうちなる求婚者等を追ひ散らすこともやと、かの不幸なる主の上に飛び行くなり。』

その時智謀に富めるオデイシユウスは彼に答へて言へりき——

『家畜を飼ふ者よ、汝は邪なる人とも愚なる人とも見えずして、我自ら汝が善き分別を有てる事を認むるなれば、されば我は或る事を汝に告げ知らせ、それを確かむるために一つの大きい誓ひを誓ふべし。今チユウスと、我が來れる氣高きオデイシユウスの懇なる食卓及び籠とよ、如何なる神の前にも我が證人となれかし。汝が尙ほこの處に留まれる間にオデイシユウスは歸り來るべく、汝は若し願はば今この處を支配せる求婚者等の屠り殺さるるを汝自らの目をもて見るべし。』

その時家畜を飼ふものは答へをなして言へりき——

『嗚呼、他處人よ、願くばクロオノスの子なるチユウスの神がこの言葉をなしとげ得むことを。さらば汝は我が力の如何なるものなるかを、また如何に我が手の爲し得るかを知るべし。』

ユウメイユウスもまた同じく、賢きオデイシユウスの彼自らの家にまで歸ることを得む爲め、總ての神神にまで祈り求めき。

斯くの如くして彼等は互ひに相語りき。されどかの求婚者等はその時ティレマカスの爲めに死の宿命を企らみつつありき。折しも彼等の左側に一羽の鳥は近づき來りき。乃ち一羽の鷺は縮こまれる一羽の鳩を掴みながら高きところより飛び來りき。その時アムフィノオマスは彼等の間に演説を爲して語りき——

『友等よ、我等のこの謀事は、即ちティレマカスを屠り殺すことは安らかに運ばれざるべし。むしろ我等をして饗宴のことを思はしめよ。』

斯くアムフィノオマスは語りき。而して彼の言へることは十分に彼等を悦ばしき。彼等は神の如きオデイシユウスの廣間にまで進み入り、彼等の外套を椅子及び高き腰掛の上に投げ出だし、大いなる羊と、逞ましき山羊と、肥へふとりたる牡豚と、牝の仔牛とを犠牲にしき。やがて彼等

は内臓の肉を燻き、それを各自に配ち與へ、葡萄酒を飲みよく薄め、また豚飼は各の人の側に一つの盃を置きぬ。さて人人の首長なるフィレエティアスは麗はしき籠かごに盛れる小麦の麵麩を彼等に渡し、メラランチアスは葡萄酒を注ぎ出だしき。かくて彼等は彼等の前に置かれたるよき馳走の上に彼等の手を差し伸べき。

今ティレマカスは彼の賢き策さだよりして、オディシユウスをして石の敷居に近くかの大廣間のうちうちに坐せしめ、彼の前に一つの低き腰掛と一つの小さき食卓とを据えき。彼はオディシユウスの傍に内臓の肉の俵わらを置き、一つの金の盃にまで葡萄酒を注ぎ、彼にまで語りて言へりき——
『その處に汝はかの求婚者等の間に汝の葡萄酒を飲みながら坐してあれ。而して彼等の罵り嘲ることと責め害むる事とより我自ら汝を護るべし。何となれば、これは公の所有所有に屬する家にあらずしてオディシユウスその人の家なればなり。また我が爲めに彼の得たるものなればなり。されど、汝等求婚者等よ、如何なる争ひも戦ひも起らざらむことの爲め、汝等の舌を押へ、汝等の手を差し控へよかし。』

斯く彼は言へりき。彼等は彼が憚らず言へりしことの故にティレマカスを驚き異おどしみながら彼等の唇を噛みき。やがてユウピイジイズの子なるアンタイヌウスは彼等の間に語りて言へりき——

『如何にその言葉の荒々しからむとも、乃ちティレマカスの言葉の如何ならむとも、如何に甚だしく彼がその言葉に於て我等を脅したらむとも、希臘人等よ、我等をしてそれを受け入れしめよ。何となれば、クロオノズの子なるヂユウスは我等の願ふところを我等に阻さみたればなり。然らざれば我は如何に彼がすぐれたる辯舌家ならむとも、我等の廣間のうちに彼を沈黙せしめたりしなるべし。』

斯くアンタイヌウスは語りき。されどティレマカスは彼の言葉にまで些かも心をとどめざりき。今かの僕等は市の間を神神に捧ぐる神聖なる獸けものを導き來りき。而して見よ、髪かみの毛長き希臘人等は弓を射るものアポロの神の仄暗き森の下に集れりき。

今彼等が外側なる肉を燻きて、それを焼申より抜き取りたりし時、彼等はその食物を分ち取りて、華華しき饗宴を共にしき。而して給仕をなししところの者等は彼等自らの受けしと同じ程なる分前わけまへをオディシユウスの傍に置きぬ。何となれば、神聖なるオディシユウスの親愛なる子ティレマカスはかくなすことを命じければなり。

今アシイニの神はかの思ひあがる求婚者等が烈しき侮蔑を慎しむことを許さざりき。そはそ

の爲めに受けたる痛みがレアアルティイズの子なるオディシユウスの胸にまで更に深く沈み行かむことの爲めなりき。さてかの求婚者等の間にセエミ仕れのティシツバスと言へる一人の卑しく恣なるものありき。彼はげに、彼の廣大なる所領を頼みとなして、遠く去り行けるオディシユウスの妻を娶らむことを願へるなりき。今彼は思ひあがれる求婚者等の間に語りて言へりき——

『汝等氣高き求婚者等よ、我にきけ。我は些かの語るべき事あり。かの他處人はげに宜しきになひて、その正しき分前を、即ち等しき分前を有ち來れり。何となれば、何人にもあれこの家に來れるほどのティレマカスの客人より、その權利を奪ひ去らむはよろしき事にあらず。さらばいざ、我もまた他處人の贈物を彼に爲すべし。而してそは彼がその報いとして浴場の婦にまで、或は神聖なるオディシユウスの家のうちなる總ての僕等にまで、一つの贈物をなすを得む爲めなり。』

斯く言ひて彼は大皿の中より牡牛の足を取り上げ、強き手をもてそれを投げつけき。されどオディシユウスは軽くその頭を轉してそれを避け、其胸の内に喰しき心を包みて微笑みたりき。而してかの牡牛の足は廣間の壁を打ちき。其時ティレマカスはティシツバスを咎めて言へりき——
「實に、ティシツバスよ、汝は仕合なりき。汝はかの他處人に撃ち中つることなかりき。何となれば、

彼彼自らに投げつけられしところのものを避けたればなり。然らざれば、思ふに我は銳き槍をもて汝の身體の中程を突き刺したりしなるべし。また婚姻の備へを爲す代りに汝の父はこの處にて葬儀を營むに急がはしかりしなるべし。この故に、何人もこのわが家の中にて見苦しき行ひを示さされ。何となれば、過ぎし日にこそ幼兒なりしなれど、今や我は善きと悪しきとを見分くる程の分別を有ちたればなり。されど據所なく我等は、羊の殺され、葡萄酒の飲まれ、麵麩の食ひ盡さるる時、尙ほこれ等の行ひを見ることを堪へ忍ぶなり。何となれば、總てを拒み斥くるは人の力に及ばざる事なればなり。されどいざ、もはや悪しき心より我を傷むることなかれ。されど汝等にして若し劍をもて我を屠り殺さむことを思はば、我はむしろそれを堪へ忍びたるべし。而して他處人等を酷たらしく扱ひ、この麗しき家のうちにて淺間しくかの侍女等を辱かしむるなど、それ等の善からぬ行ひを常に目のあたりに見てあらむより、潔く屠り殺さる事は遙かに勝りたることなるべし。』

斯く彼は語りき。彼等は悉く皆無言のままにしてありき。ややありて、ダマストアの子エエチイレエアスは遂に彼等の間に語りき——

『友等よ、一の義しき言葉の語られたる時、思ふに何人も酷き事を言ひて人を咎め、また怒るこ

とあるべからず。汝等はこの他處人をも、また神聖なるオディシユウスの家の内なる僕等の何者をも虐ぐるなかれ。されどテイレマカス彼自らにまで、又彼の母にまで我は一のやさしき言葉を述べ聞かさむ。幸にそがそれらの二人にまで悦ばるることを得よかし。汝等の内なる汝等の心にして、賢きオディシユウスが彼自らの家にまで歸り來べしとの望みを有ちたる限り、その限り汝等が待ち望みて、館の内に求婚者等を拒み斥くるを、何人も怒ること能はざりしなるべし。何となれば、オディシユウスにして引き返し、彼自らの家にまで歸り來りしならむには、そは更に宜しき事なりしなればなり。されど今、彼のもはや歸り來らざるべきは明らかなる事柄なり。さらば行きて汝の母の傍に坐し、總ての事を彼女に告げ知らせよ。即ち、彼女が彼女に求婚するところの、またいと多くの贈物をなすところのいと善き人に嫁がざるべからざることを。さらば彼女が他人の家の事を思ひ煩へる間に、汝は飲み且つ食ひて汝の父の遺産を楽しく繼ぎ行くことなるべし。』

その時賢きテイレマカスは答へて言へりき、『さなり、エエディレエアスよ、ヂユウスによりて、又イサカより遠く離れて滅び失せたる。或は行きさまよへる我が父の悲みによりて我は誓はむ。聊かも我は我が母の婚姻を阻み止めざるべきことを。さなり、我は何人にもあれ彼女のねがふし。』

ところの人にまで嫁ぎ行くべきことを彼女に言ひつけ、それと共に數知れぬ贈物をさし出さむ。されど我は固より、強制の言葉によりて、彼女の意にもなく、彼女をこの館より遂ひ出すことを耻づ。神はかくの如き事の爲さるるを禁むればなり。』

斯くテイレマカスは語りき。されどかの求婚者等の間にパラス、アシニの神は鎮めがたき笑を起さしめ、彼等の分別を失はしめき。さて今彼等はずねと異なる唇をもて笑ひ、彼等の食ひし肉は血をほとばしらせ、彼等の目は涙をも充たされ、彼等の魂は泣き歎かむことをねがへりき。その時神聖なるシオクリミイナスは彼等の間に語りき――

『嗚呼、あはれなる人人よ、汝等の上に今臨めるは如何なる禍ぞ。汝等の頭と汝等の顔と汝等の膝とは夜の闇に包まれ、歎きの聲は燃え立たせられ、總ての頬は涙に濡れ、屋根の見事なる大梁は血をまき散らされたり。而して入口と廣庭とは暗闇の下に地獄へ急ぐところの幽靈に充ちみち、日は天より滅び去り、悪しき霧は世界の上に擴がりたり。』

斯く彼は語りき。彼等はいづれも皆面白げに彼を笑ひき。その時ポリパスの子なるユウリマカスは彼等にまで語りはじめて言へりき――

『新に他處なる國より來れるかの客人は心狂へり。汝等若き人々よ、速かに彼を戸の外に連れ出

せ。彼がこの處を夜の如く暗しと見るなれば、かの集會の場所にまで行くことを得む爲めに。』

その時神聖なるシオクリミイナスは彼に答へき、『ユウリマカスよ、我は決して汝が我を案内して我が道に送り出すことをもとめず。我には目も、耳も、我が二の足もあり。また聊かの卑しきところなきたしかなる心も我が胸の中にあり。これらの物をもて我は出で行くべし。何となれば、我は汝等の上に悪しき事の襲ひ來れるを見ればなり。それを求婚者等の中なる何人も避け、または遠くすることを得ざらむ。神聖なるオデイシユウスの家にありて、理不盡に人人を扱ひ、また前後を辯へぬ行を企つるところの汝等總ての中なる、何人もそれを避け、または遠くすることを得ざらむ。』

斯く言ひて彼は見事なる宮殿を出で、彼を歡び迎へしところのピイレエユウスの家にまで到りき。その時總ての求婚者等は互に顔を見かはしながら、テイレマカスの客人等を嘲り笑ひて彼の怒りを煽り立てき。さて斯く思ひ上れる若人等の或る者は語れるなりき——

『テイレマカスよ、何人もこの客人をもてることに於て汝より仕合せならず。何となれば、汝のとどめ居れるきたなき流浪者は、つねに麵麩と葡萄酒とを乞ひ求めてあり、如何なる平時の仕事にも戦争の業にも熟れずして、ただ地上の重荷たるばかりなればなり。而してかの今一人の客人

はまた預言者をもて任ずるを見よ。さなり、されど汝若し我 聽かむことをねがはば、そは更により善き事なるべし。我等をして此等の他處人等を船にのせ、彼等をシシリア人等にまで送らしめよ。さらばその處より彼等はその價を汝に獲さすべし。』

斯く求婚者等は語りき。されど彼は彼等の言葉に心を留めずして、無言の儘に彼の父の方を見やりき。而して父がかの恥知らぬ求婚者等の上に其手を差し伸ばすべき時をつねに待ち受けてありき。

今アイケエリアスの女なる賢きピネロオビは求婚者の向ひ側に彼女の置はしき椅子を据え、館の中なる人人の各の言葉を聞きたりき。何となれば、笑の間にありて彼等は晝の食事に備へをなしなければなり。そは樂しき豊かなる食事なりき。何となれば、彼等は多くの家畜を犠牲になしければなり。されど、かの女神と勇ましき人とがやがて彼等の爲めに延ぶかりし如き、その饗宴にまさりて痛ましき饗宴はかつてあり得ざりき。而してその如き饗宴は彼等目らの恥づべき行の招き致ししところのものなり。

第二十一章

ピネロオビは彼女の夫の弓を取り出だす。そはかの求婚者等が曲ぐることに能はざれど、オ
 ディシユウスに依りて曲げられしところの弓なり。

今灰色の眼したるアシイニの女神は、アイケエリアスの女なる賢きピネロオビの心を動かし、
 彼女をしてオディシユウスの館のうちなる求婚者等の爲めに、試合の武器となし、死滅の緒とな
 すべく、弓と灰色なる鐵の斧とを持ち出ださしめき。乃ち彼女は彼女の房の高き階段を登り行
 き、彼女の強き手に善く鍛へられたる鍵を取りき。青銅をもて作れるその見事なる鍵の上には象牙
 の把手を附けたりき。而して彼女は彼女の侍女等と共に家のいと高き所なる財の藏に入り行きぬ。
 その處には青銅と金と精巧なる鐵との如き彼女の夫のさまざまなる財を蓄へたりき。而してそ
 の處に頑なる弓と多くの矢を收めたる矢筒とありき。その弓と矢筒とをオディシユウスは彼の友

なる神の如き人ユウリタスの子イファイタスとラシデイイモンに出で合ひし時彼より贈られき。
 これ等の二人はラシデイイモンのメツシイニにて、賢きオルテイロオカスの家のうちに出で合ひ
 き。抑もオディシユウスは彼の受取るべき物をその地の人人より受取らむとてその處へ赴きたり
 しなり。何となれば、メツシイニの人人はイサカより船にて三百の羊を羊の群を飼ふ者等と共に
 連れ歸りたりければなり。オディシユウスが尙ほ若かりし時かけ離れたる處への使をなして赴き
 しは、これ等の物の價を獲む爲めなりき。何となれば、彼の父と他なる貴族等は彼を送り出だし
 ければなり。されどイファイタスは彼の失へる十二頭の馬と十二頭の驃馬とを求めてこの處に來り
 しなりき。而してその處に間も無く彼は痛ましきその死を見出だしき。何となれば、かの大いな
 る冒險を知るデユウスの子ヘラクリーズの家に來りし時、彼は彼の酷たらしき宿主に依りて屠
 り殺されたればなり。乃ちヘラクリーズは神神の怒りをも畏れず、彼自らの食卓の上に守らるべ
 き事をも願ずして、始めに彼を歡待し、次に彼を屠り殺しき。何となれば、ヘラクリーズの家
 うちにかの馬と驃馬とは隠されたりければなり。それ等のものを捜し求めたりし間に、彼はオデ
 イシユウスと出で合ひてかの弓を彼に與へき。そはさきに大いなるユウリタスが齎らし來りて、
 彼の死にし時彼の高き家のうちにて彼の子にまで遺したりしところの物なり。さてオディシユウ

夫は親しき友情の緒としてイファイタスに一つの鋭き劍と一つの強き槍とを與へき。されど彼等はつひに食卓の上にて互に相知る事なかりき。何となれば、それに先立ちてデュウスの子たるヘラクリスは不死なる神に似たる人ユウリタスの子イファイタスを、オディッシュウスに弓を與へしところのその人を殺しければなり。されど善きオディッシュウスは彼が戦ひにまで出で行きし時、かつてその弓を黒き船の上に載せ行くことを爲さざりき。而してその弓は親愛なる客人のかたみとして彼自らの國の中に留め置かれたりき。

今かの麗しき后は財の蔵にまで到り着き、櫛の樹の敷居の上を踏み越えたりき。その敷居を木工は曾て巧みにも企てつくり、その傍に入口の柱を立て、その處に輝ける戸を据えたりき。今彼女がその敷居を踏み越えたりし時、速かに彼女は戸の把手より革紐を緩め、鍵を差し入れ、視ひを定めて門をはね返しき。而して教場に草食めるところの牡牛の咆ゆる如く、鍵によりて彈かれたるその麗しき戸はその如く強く咆えたりき。而して直ちに彼女の前に戸は開きぬ。その時彼女はかの高き床に登りしが、その處に匂ひ高き衣裝を收めたる櫃の類は置かれたりき。その上に彼女はその手を差し伸べ、掛釘より弓を取り外づしき。弓はその輝かしき箱のうちに收められたりき。彼女はその處に坐りて、箱を膝の上に置き、聲高に泣き叫びながら、彼女の夫の弓を取り出

しき。今彼女が心ゆく限りを泣き歎きたりし時、彼女は頑なる弓と多くの矢を收めたる矢筒とを手携へて、かの思ひあがれる求婚者等の處にまで引き返し始めき。彼女の侍女等は彼女に附添ひて一つの箱を運びたりしが、その箱の中には彼等の主の戦ひの器なる鐵と青銅とをもて作れる多くの物を收めたりき。今かの麗しき后が求婚者等の處にまで到り着きし時、彼女は見事に作られたる屋根の柱の傍に立ち、彼女のきらめける面帕をその面の前に掲げたりき。一人のまめやかなる少女は彼女の各の側に立ちき。さて直ちに彼女は求婚者等の間に語り出でて言へりき――

『この家を煩はし來れる汝等氣高き求婚者等よ、我に聽け。汝等はこの家の主の久しく遠き處にある故、常にこの處に飲み且つ食へり。而して總ての汝等の願ひは我を娶りて妻になすことなりき。今汝等求婚者よ、これは汝等の前に置かる賭物なり。我は汝等のために神聖なるオディッシュウスの大なる弓を差し出だすべし。而して何人にもあれいと容易くその手に弓を引き絞り、總ての十二個の斧の間を抜けて射るところの人と共に我は行き、この家を、斯くも麗しく總ての豊なる物をもて満たされたるこの我が嫁ぎ來れる家を棄つべし。思ふに我が尙ほ且つ夢にも思ひ出づべきこの家を棄つべし。』

斯く彼女は語りき。而して善き豚飼ひなるユウメイユウスに言ひ附けてかの求婚者のために弓

と灰色なる鐵の斧とを置かしめき。ユウメイユウスは涙ながらにそれ等のものを取りて下に置きぬ。さて別の處にてはかの牛を飼ふ者も彼がその主の弓を目のあたりに見し時泣きぬ。その時ア
ンタイヌウスは彼等を咎めて言ひ出だしき——

『見とほしのつかざる愚なる匹夫等よ、嗚呼、哀れなる二人の者よ、かの后がその親愛なる夫を失へる事の故に、既にその心の沈みきりたる時、今如何なれば汝等は涙を流して彼女のうちなる魂を亂し動かすや。さなり坐して、靜かに飲み食ひせよ。然らざれば汝等は外に出で行きて泣き、かの弓を求婚者等のための恐ろしき力試しとなすべくこの處に残し置け。何となれば、我が思ふにこの磨き立てられたる弓は容易く引き絞らるべくもあらざればなり。即ちこの處に居合せたる總てのこれ等の人人のうちにオデイシユウスの如き何人もあらず。而して我自らは彼を見き。げに我は尙ほ幼兒の時なりしかど、我が見し所のものを忘れずしてあるなり。』

斯く彼は語りき。されど彼のうちなるその心は、彼がかの弓を引き絞るか鐵の斧の間を射抜くべきことを望み設けき。されどげに、彼こそは氣高きオデイシユウスの手に依りて矢を味ひ知るべき第一の人なりき。そのオデイシユウスを先程まで彼は、オデイシユウスが廣間のうちに在りし時蔑にし、總てのその仲間等をして同じことをなさしめたりき。

その時力強きテイレマカスは彼等の間に語りて言へりき、『今見よ、げにもクロオノスの子なるヂユウスの子等は我より分別を奪ひ去りたり。賢けれども我が親愛なる母は彼女が他處人と共に行きてこの家を棄て去るべきことを言へり。されど我は打ち笑ひて、我が愚なる心のうちに打ち悦べり。さなりいさ、汝等求婚者よ、これこそは汝等の前に置かれたる賭物なれ。この賭物になれる人に似たる何ものも今希臘の中にあることなし。神聖なるバイロスにも、アルゴスにも、マ
イシイネエイにも更にイサカにもかの黒きエピラスの城壁のうちにもあることなし。さなり、されど汝等は總てこの事を汝等自ら知れるなれば、何の爲めにか我は我が母を賞むることをせむ。さればいさ、空しきかこつけをもて時を延ばすことなかれ。また我等が事の成行を見るを得むため、餘りに久しく弓を引くことを差し控ゆるなかれ。げに我自らもこの弓を試し見るべし。我にしてもしそれを引き絞り、鐵の斧の間を射抜きたらむには、さらば我は我が母なる后のこれ等の廣間を棄てて他處人と共に行くべかりしとも、悲しみ歎くことをなさざるべし。何となれば、今や我は我が父の善き武器を扱ひ得るほどの者となりて取り残さるるなればなり。』

斯く言ひて彼はその頸より深紅なる上衣をかなぐり捨て、勢よく立ち上りて、彼の肩より劍を取り外づしき。先づ彼は一つの善き溝を堀り、かの總ての斧の爲めに堀られたる一つの長き溝

にその斧を立て、その上を平なだかになしてまわりの土を踏み固めき。如何に程よく彼が斧を植えしかを見しところの總ての人々の上に驚きは襲ひき。然も彼は會てその如くなすことを教へられしにあらざるなり。やがて彼は行きて敷居の傍に立ち、かの弓を試し始めき。三度彼はそれを引き絞ることの大いなる願ひより震ひわななかしめき。而して彼が尙ほその心にかの弓を引き絞る、鐵の斧の間を射抜く事を望み設けしなれど、三度彼はその骨折りを休みき。さて今つひに彼は、四度目に力強くそれを引き絞らむとなしき。されどオデイシニウスは眉をひそめて、テイレマカスの切きりに願へるにも係はらず彼を押し止めき。その時力強いテイレマカスは彼等の間にありて再び語りき――

『今汝等は見よ、我が生涯の終りの日まで我は心をくれたる弱者にてあるべし。或は我は尙ほ若きに過ぎて、謂はれなく邪よこしまをなすところの者等より自ら護るべく我が手を頼むこと能はざるなり。されどいざ、我より力強い人々なる汝等はこの弓を試し、我等をしてこの勝負に終りを告げしめよ。』

斯く言ひて彼は弓を下に置き、滑なめかなる丈夫なる屏よこにそれを寄せかけ、かの速かなる矢を麗うしき弓のさきに近く持たせかけぬ。やがて彼は彼の立ちあがりたりし高き腰掛の上に今一度腰を下ろしき。

その時ユウビイデイズの子なるアンタイヌウスは彼等の間に語りて言へりき、『總ての我が友等よ、左の方よりして、即ち葡萄酒の注がれたるところよりして始めながら、次々に出で来れよかし。』

斯くアンタイヌウスは語りき。而してアンタイヌウスの語れることはよく彼等の心を悦ばしき。やがて先づオオイイノツプスの子リイオデイズは立ち上りき。リイオデイズは彼等の預言者にして、つねに廣間の端はしなる葡萄酒を味あじよく薄めるところのかの麗うしき魂たまの傍に坐したりき。彼のみは彼等の前後まへを辨わへぬ行ひを憎み、總ての求婚者を憤りたりき。彼は今まづ弓と速き矢とを取り、行きて敷居の傍に立ち、その弓を試し始めき。されど彼はそれを曲ぐることに能はざりき。或はその事のあり得たりし共彼の手は、その事に馴れざる華奢なる彼の手は弓を引き絞ることに依りて萎へ疲れき。乃ち彼は求婚者等の間に語りて言へりき――

『友等よ、まことは我はそれを曲ぐる事能はず。他なる何人かをしてそれを取らしめよ。嗚呼、我等のいと勇ましき者の多くよりこの弓は魂と命とを奪ひ去るべし。何となればげに、かの賭物かちものを目標して毎に我等がこの處に集れるなる。そのものを獲ずして生き存まふるより、命死ぬるは

我等に取りて遙かにまさりたる事なればなり。今その處には多くの者ありて、彼等の胸の中に望をもち、オディシユウスの妻なるピネロオビを娶らむことをねがへるならむ。されどその者にしてこの弓を試み、その出来榮えを見たらむには、その後は彼をして何等かの他なる衣美しき希臘の婦にその花嫁の贈物をなし、彼女を娶ることをねがはしめよ。かくて我等の後は、いと多くの贈物をなすところの、而して運命に選ばれたるものとして來るところの人に嫁げよかし。」

斯く彼は語りてかの弓を置き、滑らかに丈夫なる扉の方にそれをよせかけ、かの速き箭を見事なる弓の端に近く立てかけぬ。而して彼は彼のさきに起ちたりしところの-high 腰掛に今一度び腰を下ろしき。

されどアンタイヌウスは彼を咎め、彼に語りて言へりき。「リイオディイズよ、汝の唇の戸より如何なる言葉の漏れ出でしことぞ、如何に酷き、痛ましき言葉の出でしことぞ。さなり、それを聞き、且つその如き弓が我等のいと勇ましき者より魂と命とを奪ひとるべきことを思ふは、しかもそが-に、汝のそれを引き得ざる故なることを思ふは我に腹立たし。何となれば、我は汝に告げて言はむ。汝の母人は一つの弓を引き、箭を射るほどの力ある者に汝を生みつけざりしなり。されどその處に、間もなくそれを引くべき思い上れる求婚者等の他なる人人もあるならむ。」

斯く彼は語りて山羊飼なるメランヂアスに言ひつけき。「今起ちて、廣間の中に火をともせ、メランヂアスよ。また火の傍に一つの大なる腰掛を置き、その上に羊の毛皮をのべ、而して内にあるところの豚の脂の大なる塊を持ち來れ。さらば我等若人等はそれを暖めてかの弓に塗り、それを試し見てこの勝負に終を告げしむることを得む。」

斯く彼は語りき。メランヂアスは直に不斷の火を焚きつけ、一の腰掛を持來りてそれを傍に置き、その上に羊の毛皮をのべ、而して内にありしところの豚の脂の大なる塊を持ち來りき。それをもてかの若き人人はかの弓を暖め、試みをなしたれど、それを引きしぼること能はざりき。何となれば、彼等は左様な力強さを甚だしく缺きたりければなり。而してアンタイヌウスと神の如きユウリマカスとは尙ほその業を思ひ止まらざりき。彼等は總ての人人の中にていと優れたる求婚者等なりき。

今それらの他なる二人は、即ち神聖なるオディシユウスの牛飼と豚飼とは、もろともにかの家を出で行きぬ。而してオディシユウスは彼等に従ひ行きぬ。されど彼等が今門の外に、また廣庭にまで到りし時、彼はその聲を出してやさしく彼等にまで語りき――

『牛飼と、汝豚飼とよ、我は或る事を言ふべきか、または我自らの心に藏め置くべきか。さな

り、我が魂は我をしてそれを言はしむ。若しオディシユウスにして斯く忽ちに何處よりか歸り來り、また何等かの神ありて彼を連れ來るべくば、汝等はそのオディシユウスを助けるべく如何様なる人にてあるべきぞ。汝等はいかの求婚者等に味方すべきか、或はオディシユウスに味方すべきか。汝の心と魂との汝に命する如く我に告げよかし。』

その時牛飼は彼に答へて言へりき、『父なるヂユウスよ、若し苟くも汝にして此願を叶へさすべくば、嗚呼、かの人の歸り來り、また何等かの神ありて彼をこの處に導くを得たらむことを。さらば汝は、我が力強さの如何なるものなるかを、また如何なる事を我が手の爲し得たるかを知りたるべし。』

ユウメエユウスも亦、賢きオディシユウスが彼自らの家にまで歸り來ることを得むため、總ての神にまで祈り求めき。

今彼が如何なる魂を彼等の有てりしかをたしかめ知りし時、今いよいよ彼は彼等に答へて言へりき――

『見よ、我は、我こそは歸りたれ。多くの勞苦と思ひとをなしたる後、我は二十年目にして我自らの國に歸りたり。而して我は、我が歸りしことが總ての僕等の中なるただ汝等によりてのみ望

み願はれたることを知れり。何となれば、我がいまひとたび我が故郷に歸ることを得む爲めの祈りを、他なる何人よりも我は聞かざりければなり。さて今我は、如何に成り行くべきかにつきて總ての眞實なる事を汝等に告げ知らさむ。かの神にして若しかの思ひ上れる求婚者等を我が手の滅ぼすに委せなば、我は汝等各に一人の妻を得させ、汝等に汝等自らの財産を與へ、我に近く築き成されたる一の家を與ふべし。而して汝等二人はその後我の目にまで、テイレマカスの同胞もしくは仲間にてあるべし。されど見よ、我は又汝等が我を善く認め知りて信ずることを得む爲め、汝等に一のいと明らかなる徴證を示すべし。即ち、久しき昔に我がオトリカスの子と共にパルナッサスにまで行し時、かの猪がその白き牙もて我につけたるかの舊創を示すべし。』

斯く言ひて彼は大なる舊創の上より破れたる着物をかきのけき。而して彼等二人が日のあたりをそれを見て具に認めたりし時、彼等はその腕を賢きオディシユウスのまわりに投げて泣き出だし、頭の上にまた肩の上に烈しく彼にキスしき。オディシユウスもまた彼等の頭と手とにキスしき。而してオディシユウス自らにしてみ次の如く言ひながら押し止むることをなさざりしならむには、彼等の歎き悲しみつづけたりし間に日の光は沈み行きたるべし――

『汝等は泣く事と歎き悲しむ事とをやめよ。然らざれば人ありて廣間より出で來り、我等を見、家

のうちなる人々にもそれを告げ知らさむ。さなり、汝等は一人々々にしてうちに入り行け。先づ我を先立てて汝等これに従ひ、諸共に入り行くことなかれ。而してこれをして我等の間なる合圖たらしめよ。總ての他なる者等は、乃ち總ての思ひあがれる求婚者等は、我が弓と矢とを與へらるる事を許さざるべし。されば善きユウメイユウスよ、汝が廣間を抜けてかの弓を運び來る時、汝はそれを我が手のうちに置き、婦等が彼等の房の丈夫なる扉と門を差すべきことを彼等にまでいひつけよ。而して彼等の何人かが若し我等の壁のうちに人々の呻吟騒々響を聴きたらむ時、彼等をして走り出づる事なく、寧ろ彼等のあるところに留りて、無言のままにその業をなすつづけしめよ。されど善きフィロイティアスよ、汝には庭の外の門を閉ざし、速かにそれを繋ぎ固むべき事を我はいひつけむ。』

斯く言ひて彼は麗しき廣間のうちに入り行き、前に彼の立ちたりし腰掛の上に腰を下ろしき、而して神聖なるオディシユウスの二人の僕等も入り行きぬ。

今ユウリマカスは^トの光にかの弓の右側を暖め、また左側を暖めながらそれを取りあづかひたりき。尙ほ且つ彼はそれを引き絞る事能はず、彼の大きいなる胸のうちに呻吟き苦しみたりき。やがて重苦しげなる心をもて彼は聲高に呼ばはり言へりき——

『汝等今は見よ、まことに我は我自らの爲めに又汝等總ての爲めに苦しめり。如何ばかり我が苦しみたりとも、この婚姻の爲めに我はさばかり甚だしく悲しみ歎くにはあらず。ピネロオビの他にも多くの希臘の婦はあり。海にとりまかれたるイサカにもあり、また他なる市々にもあり。さなり、されど我はまことに我等が神聖なるオディシユウスよりかばかり力劣れることを悲しみ歎くなり、何となれば、我等はこの弓を曲ぐることに能はさればなり。そはそれに付きて聞くべき後の世の人々に對して耻づべき事なるべし。』

その時ユウピイヂイズの子なるアンタイヌウスは彼に答へき、ユウリマカスよ、この事は然らず。而して汝自らもまたこれを知れり。何となれば、この日弓射る者なる神の祭りは、神聖なる祭りは國の中になさるるなり。かかる時何人か弓を曲げむとするものぞ、さなり、靜かにその弓を置け。されど我等がかの斧をその儘に爲し置かむも何の妨ぐるところぞ。我が思ふに、何人もレエアルテイイズの子オディシユウスの家に来りてそれを運び去る事なかるべし。さればいざ、葡萄酒を有てる者をして次々に各の盃にまで注ぎ捧げしめよ。さらばその飲物を捧げたる後に我等はかの曲がれる弓を横へ置くことを得む。さて明朝山羊飼ひなるメランヂアスに言ひ附けて、總ての彼の飼へる者のうちなるいと善き山羊をこの處へ連れ來らしめよ。さらば我等は腿の肉

の切れを弓を射る者なるアポロの祭壇に供へ、かの弓を試し見て、この勝負に終りを告げしむることを得む。』

五五四

斯くアンタイヌウスは語りき。而してアンタイヌウスの語れることは彼等を十分に悦ばしき。やがて僕等はその手の上に水を注ぎ、侍童等は飲物をもて葡萄酒を味よくするところの甕に満たし、その葡萄酒を次々に各の盃にまで注ぎ捧げたりし後總ての人々に分ち與へき。されど彼等が注ぎ出だして心ゆく限りを飲みたりし時、智謀に富めるオデイシユウスは狡猾なる心より彼等の間に語りて言へりき――

「かの名高き後の求婚者等よ、我のうちなる心のいひつくる儘を我が言ふ事を得む爲め汝等は我に聽け。而してとりわけユウリマカスに、また神聖なるアンタイヌウスに我は祈り求むることを爲さむ。何となれば、彼はまことによるしきを得たる事を語りたればなり。乃ち彼は言へりき、差しあたり汝等が汝等の弓射ることをやめて、神神にまで打ち任すべきことを、また明朝かの神が何人にもあれ彼の思ふところの人にまで勝利を得さすべきことを。さればいざ、かの磨きたたられたる弓を我に與へよ。さらば汝等の目のあたりにて我は我が手と力強さを試むることを得む。曾て我がみづみづしき手足のうちにて有てりし如き力を些かにても尙ほ有てるや否やを、或は

我が彷徨ひと痛ましき冒険とに依りて今それを滅ばし盡くされたるや否やを試むる事を得む。』

斯く彼は語りき。彼等はいづれも甚だしく怒り憤りき。或は彼がかの磨きたたられたる弓を引き絞る事もやあらむかと恐れられたればなり。アンタイヌウスは彼を咎めて言へりき――

「哀れなる他處人よ、汝は分別を缺きたり、まことに些かの分別をも有たざるなり、汝は安らかにして我等の氣高き集りに加はり、饗宴の汝の分前を缺くことなく、汝の他なる如何なる客人も乞食も我等の言葉を聽かざる時、我等の語るところに耳傾くるを得ながら、如何なればそれをもて足れりとせざるや。汝を傷つくるものは葡萄酒なり。蜜の如き甘き葡萄酒は他なる人々、即ち甚だしく飲み、はてしなく飲むところの總ての人々に取りてもまた禍なり。名高きセントアなるユウリテイオンがラピセエイに行きし時、心氣高きピライズウスの館にてユウリテイオンの心を暗くしたりしも葡萄酒なりき。葡萄酒をもてその心を暗くせられし後、彼はピライズウスの家中に心狂ひて邪なる行ひをなしき。やがて憤怒は總ての勇者等の心を襲ひき。彼等は無慈悲なる劍をもて彼の耳と鼻とを削ぎ落したりし後、前廊の間を抜けて彼を引き出だしき。乃ち暗くせられたる心をもて彼はその罪の重荷を運びながら彷徨ひ渡りき。その時よりセントア等と人類との間に争ひは生まれりしなり。されど初めには葡萄酒に酔ひ痴れし者の上に破滅は來りしなり。斯く

五五五

の如く我は、もし汝がかの弓を引き絞らば汝にまで大いなる禍の及ぶべきことを告げ知らさむ。何となれば、汝は我等の國のうちなる如何なる人の手よりも恵みを加へらるる事なく、又我等は汝を黒き船に乗せて總ての人々を害むる者エチイタスの所にまで送る可く、而してその處より汝は生き存へて救ひ出ださるる事なかるべければなり。されば汝は靜かになしてのみあり、汝より年若き人々と争ふことなかれ。』

その時賢きピネロオビは彼に答へき、『アンタイヌウスよ、テイレマカスの家に來れる客人の何人にもあれ、彼よりしてその受くべき程のものを奪ひ去らむは、まことに宜しきを得たることにも正しきことにもあらず。彼方なる他處人のその力強きと腕の力とを頼みて、オデイシユウスのかの大いなる弓を引き絞り、我を彼の家にまで連れ行き、我を彼の妻になすべきことを汝等は思ふや。我が思ふに固より彼自らはその胸の中に斯くの如き如何なる望みをも有たざるべし。さればその事に就きては、汝等のうちなる何人もこの處に飲み且つ食ひて彼自らを煩はす事なかれ。それは眞に相應はしからぬことなるべければなり。』

その時ポリバスの子なるユウリマカスは彼女に答へて言へりき、『アイケエリアスの女なる賢きピネロオビよ、我等は固より彼が彼の家にまで汝を連れ行くべき事を思ふにあらず。斯くの如き

は我等に遠き考へなるべし。されど我等の恐るるは男等と婦等との語り合はむことなり。即ち希臘人の間なる卑しき者等の一人は次の如く言ふことあらむ、『實に遙かに卑しき人人は氣高き人の妻を妻に求めたり。また彼等はかの磨きたてられたる弓を引き絞る事能はず、然るに一人の他處人なる乞食は彼の流浪の道にして來り、容易くかの弓を引き絞りにて、鐵の斧の間を射たりき』と斯く彼等は語るべく、この事はやがて我等への非難となり來るべし。』

その時賢きピネロオビは彼に答へき、『ユウリマカスよ、氣高き一人の人の家を食ひ盡くし、蔑にする人人に取りて、この國の中に善き評判のあり得ることなかるべきに、如何なれば汝等はこの事をもて汝等の面目を傷つくるものとなすぞ。されど見よ、我等の客人は身體大きく逞ましく、且つ自ら善き父の子として生れたる事を言へり。さればいざ、我等が如何に成行くべきかを見るため、汝等はかの磨きたてられたる弓を彼に與へよ。我は次の如く約束をなし、その約束は必ずやなしとげらるべし。即ち彼にして若しかの弓を引き絞り、アポロの神より名譽を許し與へらるることあらば、我は善き着物なる外套と上衣とを彼に與へて着さすべし。また我は彼が犬と人とに對して自らを護るべく一つの鋭き槍を與へ、先の二つに分れたる劍と、彼の足の下に結び附くる爲めのさんだるすとを與へむ。更に又我は何處へにてもあれ彼の心と魂との彼をして行かしむる處へ

彼を送りやらむ。』

五五六

その時賢きティレマカスは彼女に答へて言へりき、『我が母よ、弓に就きて言へば、何人にもあれ我が思ふ所の人にそれを與へ、或はそれを拒むべく我より力強き如何なる希臘人もあることなし。岩多きイサカに、或は馬の牧場なるエリスに近き島々に君たるところの總ての人々も、我より力強き者にあらず。よし我がこの弓を與へて、さなりかの他處人の携へ去るに任したりしとも、それ等の君達の何人も我が心ならざる事を我に強ゆるを得ざるべし。されど汝は汝自らの房に行き汝自らの家の仕事を、織ることと紡ぐことを思ひ煩ひ、汝の侍女等をして彼等の業にいそしませしめよ。かの弓は總じて男の子等の、されどとりわけ我が事ならざるべからず。何となれば、この家を統治するは我なればなり。』

その時驚きて彼女は彼女の房にまで引き返しながら、彼女の子の言へる賢き言葉を思ひ味ひき。彼女はその侍女なる婦等と共に彼女の上なる房に登り行き、彼女の親愛なる犬オディシユウスを悼み歎きたりし間に、灰色の眼したるアシイニの女神は彼女の目蓋の上に甘き眠りを注ぎ下だしき。

今かの善き豚飼ひはかの曲がれる弓を取りて行きぬ。かの求婚者等は聲高く彼に向ひて呼ばはりかけぬ。その時かの思ひあがれる若者等の或者は斯く語らむとしき、『今汝はその曲がれる弓を何處へか運び行くぞ、心狂へる汝哀れなる豚飼ひよ。見よ、若しアポロと他なる不死の神々にして我等に恵みを垂れなば、汝自らの養へるかの速き獵犬は、人々より遠くただ一人なる汝の豚の傍にして、やがて汝を食ふべし。』

斯く彼等は語りき、廣間のうちなる多くの人々が彼に呼ばはりかけたる故に彼は恐れて、かの弓をその處に据え置きぬ。その時ティレマカスは他なる側より聲高く呼ばはり脅し言へりき——
『父の如き豚飼ひよ、その弓を持ちて進み行け。然らざれば間も無く汝は汝が多くの人々に聽き従ひたることを悔ゆるなるべし。汝より年若き我なれども、汝を野に追ひ行き、弓をもて汝を撃つことのなからむ爲め心せよ。何となれば、力強きことに於て我は勝りたればなり。苟くも我にしもし、この廣間のうちなる總ての求婚者等より力強き腕を有ちたりしならむには、直ちに我は多くの者等を我等の家より追ひ出だして禍なる道に出で立たしめたるべし。何となれば、彼等は我等に對して善からぬ事を企つればなり。』

斯く彼は語りき。總ての求婚者等は樂しげに彼を嘲笑ひ、ティレマカスを酷たらしく憤ることをやめき。やがてかの豚飼ひは廣間を通してかの弓を運び、賢きオディシユウスのところに行き

それを彼の手の内に置きぬ。而して彼はかの乳人ユウリクリイヤを房より呼び出だして彼女にまで語りき——

『賢きユウリクリイヤよ、ティレマカスは汝をして汝の房の丈夫なる戸に門を差さしむ。而して婦等の何人かが我等の壁のうちに人人の呻吟き騒ぐ聲を聴きたらむとも、彼等をして出で來ることなく彼等の在るところに止り、靜かにその業をいそしみ續けしめよ。』

斯く彼は語りき。而してその言葉は彼女の心を通り過ぐることなく、彼女は見事なる戸の戸に門を差しき。

やがてフィロイイティアスは無言の儘にして家より急ぎ出で、柵を廻らたる廣庭の外なる門を閉ざしき。今前廊の下にパイプラスの草にて作られたる船の碇索を置きたりしが、それをもて彼はかの門を繋ぎ固め、さて彼自らは中に入り行きぬ。やがて彼は彼の前に立ちたりしところの腰掛に行きて掛け、オディシユウスの方を打眺めき。オディシユウスは既にかの弓を打返し打返しあつかひ乍ら、その弓の主の在らざりし間にその角を蝕まれたりしやも知れずと、此方彼方を吟味しつつありき。さて斯く人々は各その隣人を顧みながら語りき——

『實に彼は弓を見る鋭き目を有てり。我が思ふに、彼自らその家にかかる弓を有てるなるべし。』

然らざれば彼は自ら同じ物を作らむ事を願へるなるべし。彼は、この忌はしき乞食はその如くして彼の手のうちにかの弓をあづかへり。』

さて思ひ上がれる若者等の他なる者はまた言はむとしき、『願はくはかの漢がこの弓を曲ぐることに成功する如く、同じ弓を作り出すことにも成功せよかし。』

斯く求婚者等は語りき。智謀に富めるオディシユウスは大いなる弓を持ち上げてその各の側より改め検べき。而して堅琴と奏樂とに馴れたる人が、各の端に巻き收めたる羊の臟腑を結びつけたる後、新しき琴柱をもて容易く糸を張る時の如く、その如くオディシユウスは直ちに何の骨折もなくかの大いなる弓を引き曲げ、それを右の手に取りて觸れば、燕の如き音をたてて樂しげに鳴り響きしところのその弦を試し見き。その時大いなる悲しみはその求婚者等を襲ひ、彼等の顔の色は革りき。而してデユウスは高らかに雷を鳴り轟かして彼の徴を示し現しき。殺き善きオディシユウスは謀事深きクロオノスの子が彼に一つの徴を送りたりしことを悦べりき。やがて彼は彼の食卓に近く裸のままにして横はりし所の一つの速き矢を取上げき。されど他なる矢は、かの希臘人等が間も無く味ひ知るべかりし所のそれ等の矢は、空洞なる矢筒の中に收められたりき。彼は取上げたるその矢を弓に番ひ、矢筈を取りて糸を引き絞りき。而して彼の掛けたりし所の腰掛

より、正面に視ひを定めて射たりし矢は、斧の一つをも外づることなく、初めのものより終りのものに至るまで總ての斧の輪を通り抜けて、青銅の矢鏃を附けたる武器は飛び行き突き出でぬ。その時彼はティレマカスにまで語りて言へりき——

『ティレマカスよ、此廣間に坐したる汝の客人は些かも汝を恥ぢしむることなし。我は我が的を外づさざりき。また我は久しく弓を引き曲ぐることに依りて疲れるることなし。我が力は尙ほ強くして、かの求婚者等が我を侮り言ふところの如くならず。されど今や尙ほ明るけれどもかの希臘人等の爲めに饗宴の備へをなさるべき時なり。その後にて我等は舞踏と堅琴とをもて他なる悦びをなさざるべからず。何となれば、これ等のものは饗宴をいと高く飾りたつるところのものなればなり。』

斯く言ひて彼はその額をもて合圖しき。神聖なるオディシユウスの子なるティレマカスは彼の鋭き劍を腰に帯び、槍を手に握り、輝くところの青銅に身を回めてその父の傍にして高き腰掛に近く立ちき。

第二十二章

オディシユウスはティレマカス、ユウメイユウス及びフィロイティアスの助けをかりて、總ての求婚者等を屠る。而して彼等と不義の交りをなしたりし婢等の十二人は縊り殺さる。メランヂアスもまた酷たらしく刑せらる。

その時智謀に富めるオディシユウスはその破れたる衣を脱ぎ捨て、彼の弓及び矢に満ちたる矢筒を携へてかの大いなる敷居の石の上に躍り上がり、彼の足の前に總ての速き矢を注ぎ出だしながらかの求婚者等の間に語りき——

『見よ、今やこの恐るべき試みはつひに成しとげられたり。今我はこれまで曾て撃たれたることなき今一つの的を撃ちて、我が善くそれに撃ち當て、アポロが我に譽れを許し能ふるや否やを試めし見るべし。』

斯く言ひて彼は一つの鋭き矢をアンタイヌウスに向けき。今彼は二つの耳を有てる金の盃をその唇にまで持ち行かむとなしてありき。而して見よ、その盃を手にして葡萄酒を飲まむとなしたりし彼は、夢にも彼自らの死を思ひ浮ぶることなかりしなり。何となれば、斯くも多くの人々の間なるただ一人の者が、たとひ如何ばかり強かりしとも、アンタイヌウスの上に死と黒き運命とを齎すべきことを、饗宴に連れる何人かよく思ひ得たるべき。されどオディシユウスは規ひを定めて、矢をもてアンタイヌウスの喉に射當てき。矢の尖は彼の細き首を突き抜きて出で、彼は横さまに倒れ、盃は彼の撃たれし時彼の手より落ちき。而して直ちに彼の鼻の穴より居られたる人の血は迸り出で、また速かに彼はその足をもて食卓を蹴かへし、食物を下に撒き散らし、麵麩と燔肉とは塵に塗れき。さてかの求婚者等はアンタイヌウスの倒るるを見し時房房の中に大なる騒ぎを起しき。彼等は恐れに動かされたる人人の如く彼等の高き腰掛を跳び離れて、かの見事なる壁に沿ひて房の中を彼方此方へ逃げ惑ひしかど、手に取るべき盾或は大いなる槍は何處にもなかりき。その時彼等は怒れる言葉をもてオディシユウスを責め罵りき——

『他處人よ、汝は汝自らを害むることの爲めに人人を射るなり。汝はこの後再び他なる戦ひをなし得ざるべく、今や全き宿命は汝の上に定められたり。げにさなり。何となれば、今汝はイサカ

にて總ての氣高き若者等のうちいと優れたるものなりしところのかの人を殺したればなり。この故に禿鷹はこの處に汝を食ひつくすべし。』

斯く各の者は語りき。何となれば、まことに彼等はオディシユウスが殊更に彼を殺ししにあらずと思ひたればなり。而して彼等は愚かにも、彼等總ての者の首長に、死滅の繩目の既に投げ掛けられたりしことを知らざりき。その時智謀に富めるオディシユウスは物凄く彼等を眺めやりながら語りき——

『汝犬共よ、汝等は我がもはやトウロイ人等の國より歸り來らざるべきことを汝等の心の中に言へりき。斯く汝等は我が家を荒らし、我が家の婢らを犯して共に寝ね、我が尙ほ生き存へたりし間に猥がはしく我が妻に言ひ寄りき。また汝等は廣き天上に在る所の神々等を畏れず、今より後の人々の憤りをも恐れざりき。されど今死滅の繩目は汝等總ての者の上に投げ掛けられたり。』

斯く彼は語りき。青白き恐れは總ての者の手足をとらへ、各の者は何處に彼が全き破滅を避け得べきかと四邊を見廻しき。而してユウリマカスのみ彼に答へて言へりき、『汝にしてもし眞に再び歸り來れるイサカのオディシユウスならむには、汝の家と野とに於ける多くの邪なる行ひにつきて汝の斯く言へるは當れり。されど、總ての事に對して責めらるべき彼は、アンタイヌウ

スは今既に死したり。何となれば、アンタイヌウスはこれ等の總ての悪しき行ひに基をなしき。而して彼を驅りたてしはピネロオビを娶らむとする烈しき願ひのみならずして、またクロオノスの子なるヂュウスが彼に許さざりし所のものを獲むとの心にもありき。乃ち、彼自らイサカの大いなる國に王たらむことを願ひ、また汝の子に待伏せして彼を屠り殺さむことを謀りき。されど今や彼は彼の報いを受けて屠り殺されたれば、汝は汝の人々を、即ち汝自らの物を惜しめよかし。我等はこれより市をゆき廻りて、汝の館のうちに飲み食ひせられたる總ての物を汝に償ふべし。乃ち各の者は彼自ら二十頭の牡牛に値ひする償ひを齎らし來り、汝の心の和げらるるまで金と青銅とをもて汝に拂ふべく、その時まで何人も汝の怒り憤れるを咎むることなからむ。』

その時智謀に富めるオディシユウスは物凄く彼を眺めて言へりき、『ユウリマカスよ、假令汝等が總ての汝等の財産を、汝等の今有てる總てを我に與へ、またその他の何にてもあれ、苟くも汝等がそれに付け加ふることを得たるべき物を與へしとも、尙ほ且つ我はかの求婚者等が總ての彼等の非道を償ひ果たしたる前に我が殺戮の手を差控ゆることをなさざるべし。而して今汝等の前に横はれる選擇は、潔き戦ひに於て戦ふべきか、或は死と運命とを避け得む限り逃げ去るべきか、即ちこれなり。されど我が思ふに、全き破滅を免るることを得ざるところの者等もあるべし。』

彼は語りき。彼等の膝は直ちに碎けゆるみ、彼等の心は彼等のうちに解け去りき。而してユウリマカスは彼等の間にありて尙ほ再び語りき――

『友等よ、この人が彼の打勝ちがたき手を差控へざるべきは明かなり。而して彼がかの磨きたてられたる弓と矢筒とを取上げたる今は、彼は我等總てを屠り殺したるまでかの滑かなる敷居の石の上よりして矢を射るべし。この故に我等をして戦ひの悦ばしきことを思はしめよ。汝等の刃を引抜き速かなる死の矢を防ぐ爲めに諸の食卓を掲げよ。而して我等總てをして一時に彼にまで打懸かり、若し力及ばばかの敷居の石のところより、また戸口のところより彼を逐ひ出だし、次に市の間を抜けて行かしめよ。而して速かに叫びの聲は擧げらるべし。その間に此人は間も無く彼のいや果ての矢を射盡したるべし。』

斯く言ひて彼は尖端の二つに分れたる彼の鋭き青銅の劍を引き抜き、恐ろしき叫びと共にオディシユウスに跳びかかりき。されどその刹那によきオディシユウスは矢を射かけて彼の乳首に近く胸に射當て、その速き矢を彼の肝臓にまで刺し貫きぬ。斯くしてユウリマカスは劍を彼の手より落し、食卓のまはりによろめきながらかがまり倒れ、食物と二つの把手を有ちたる盃とを床の上に投げ飛ばしき。偕て苦しみの餘りに彼はその額をもて地を撃ち、その兩足をもて蹴りながら高

き腰掛を覆し、死の霧は彼の目の上に注がれき。

その時アムフィノオマスは名高きオディシユウスを目懸けて跳り出で、彼を戸の外に逐ひ遣るを得むことのため彼の鋭き剣を振り翳しき。されどテイレマカスは彼の先を越し、彼の後より青銅を穿かせたる槍をもてアムフィノオマスの肩の間を突き、その胸を刺し貫きぬ。アムフィノオマスは恐ろしき響きをたてて打倒れ、その額をもて地をうち叩きぬ。その時テイレマカスはかの長き槍をアムフィノオマスに突き刺したるままにして飛び去りき。何となれば、希臘人等の何者かはその刃をもて彼に斬りかかり、彼の槍をひき出だせし間に彼を刺し、或は剣をもて上より打ち下ろすこともあらむかと、彼は甚だしく恐れられたればなり。斯くて彼は飛ぶが如く速やかに彼の父のところへ駆けより、彼の傍に立ちて翼ある言葉を語りき――

『父よ、見よ、今我は一つの盾と二つの槍と、汝のこめかみに適れる青銅づくりの一つの胄とを汝に齎らさむ。また我が引返したる時我は我自らを鎧ひ、かの豚飼と彼方なる牛飼とも物の具を齎らし來らむ。何となれば、十分なる武装をなして戦ふはより勝りたればなり。』

智謀に富めるオディシユウスは彼に答へて言へりき、『彼等總てに對するただ一人の者として、この我を彼等が戸口より逐ひ出ださざらむことのため、我が我自らを護るべき矢を有てる間に、

汝は走り行きてそれ等の物を齎らし來れ。』

斯く彼は語りき。テイレマカスは彼の親愛なる父に聽き従ひ、彼の名高き諸の武器の收められたるかの房にまで出で行きぬ。その處より彼は四個の盾と、八本の槍と、濃き馬の毛をもて飾られたる青銅の四個の胄を取出だしき。彼はそれ等のものを齎らし行くべく出で立ち、速かに彼の父にまで來りき。今彼は青銅の物の具をもて先づ彼自らの身を固めき。かの二人の僕等もまた同じく善き物の具に身を固め、賢く狡猾なるオディシユウスの傍に立ちき。偕て彼が彼自らを護るべき矢を有ちたりし限り、彼は次々に規ひを定めて彼の家のうちなる求婚者等を射倒し、彼等は互ひに折重り合ひて倒れき。されど矢の射盡されたる時彼は見事なる廣間の戸口の柱に、入口の輝ける面にその弓をよせかけぬ。彼自らに至りては四重に作りなされたる盾をその肩のまわりに投げかけ、馬の毛をもて頂を飾られたる一つの見事なる胄を彼の大きいなる頭に結ひつけぬ。その頂につけたる馬の毛は高く揺れ動きぬ。而して彼は青銅を穿かせたる二つの大なる槍を手に取りき。今見事に作られたる壁に、床より稍や高くして一つの出入口あり、見事なる館の敷居のいと高き段に近く、外の通りへ出づるところの道ありき。乃ちオディシユウスはかの善き豚飼にいひつけてその道を閉ざしたる戸の所に立たしめ、その道を見張らしめき。何となれば、その處にはただ一人

の者の近か附くことをのみ許されたればなり。その時エエジイレエアスは彼等の間にありて次の如く呼ばはりき——

五七〇

『友等よ、人ありてかの出入口の所に攀ち登り、市の人々にまで訴へむことを願はざるか。而して直ちに聲高き叫びをあげむとはなさざるか。さらば此人は間も無く彼のいやはての矢を射盡すべきにあらすや。』

その時山羊飼なるメランチアスは彼に答へて言へりき、『エエジイレエアスよ。その如きことはあり得ざるべし。何となれば、廣庭の門は恐ろしきまでに近く、またかの外の通りへ出づる出入口は狭苦しく、ただ一人の人にてあられ、彼にして勇ましからむには、總ての者を防ぎとむることを得たるべし。されどいざ、汝等が物の具に身を固むることを得む爲め、内なる房よりして汝等の甲冑を齎らし來らむ、何となれば、オディシユウスと彼の名高き子とは他ならぬかの房のうちに諸の武器を匿し置きたるべければなり。』

斯く言ひてかの山羊飼なるメランチアスは館の階をオディシユウスの内なる房にまで登り行き、その處より十二個の盾と同じ數の槍と馬の毛の厚き飾をつけたる青銅の同じ數の冑とを取りき。彼は出で來りて速かにそれらの物を運び、それらの物を求婚者等に與へき。さてオディシユ

ウスが彼等の物具に身を堅め、その手に長き槍をしごきつつあるを見し時、オディシユウスの膝は弛み、彼の心は彼の裏に融け流れき。而して冒險の容易ならぬものなることを彼は見き。速かに彼はティレマカスにまで翼ある言葉を語りき——

『ティレマカスよ、たしかにこの家の中なる婦等の一人は我等に對する悪しき戦に手助けしつゝあるものの如し。或はそはメランチアスなるやも知るべからず。』

その時賢きティレマカスは彼に答へき、『我が父よ、その事に於て過ちたるは我にして、如何なる他の者も咎めらるべきに非ず。何となれば、我がかの武器庫の戸を明け放したるまゝになし置きしを、彼等の一人が直に見付け出したるなればなり。善きユウメエウスよ、今行きてかの房の戸を閉ぢ、この禍をなす者のまことに婦等の一人なるか、或は我が思ふ如くドリアスの子なるメランチアスなるかを注意せよかし。』

斯くこそ彼等は互に相語りき。さて山羊飼なるメランチアスは又もや見事なる甲冑を持ち來るべくかの房にまで赴きぬ。されどかの善き豚飼はそれに心付きぬ。而して速かに彼は彼に近く立ちしところのオディシユウスにまで語りき——

『チユウスの種なるレエアルティイズの子よ、智謀に富めるオディシユウスよ、見よ、我等自ら

の疑をかけたるか悪漢は再びその處にあり。汝はまことを我に告げ知らせよ。我にして若し彼にまされることを證せば、我は彼を屠り殺すべきか。或は彼が汝の家に企てたる多くの悪しき行を償ひ得むことの爲め、彼を汝の處にまで連れ來るべきか。』

その時智謀に富めるオディシユウスは答へて言へりき——

『げに、我とティレマカスとは、かの思ひ上れる求婚者等が如何に怒り狂ひたらむとも、廣間の内に彼等を閉ぢ込め置くべければ、汝等二人は彼の足と腕とを彼の背に縛め、彼を房にまで投げ込み、汝等のあとに戸をとさしたる後、彼の體にまで縛はれたる繩を結びつけ、屋根の梁に近きまでかの高き柱に彼を吊し上げよ。さらば彼はその處に縊れながら尙ほ生き存へて、痛ましき苦しみをなすことを得む。』

斯く彼は語りき。彼等は心を留め耳を傾けき。さて彼等はかの房にまで出で行きしかど、その内にありしところの山羊飼は彼等の來れるを知らざりき。今彼は房の内密なる場所に甲冑を捜し索めつつありしが、彼等二人は戸口の柱の兩側に待ち伏せして立ちたりき。さて山羊飼なるメラシヂアスが片手に一の善き冑を携へ、他の片手に古き鍔付きたる幅廣き盾を、勇者レエアルティイメの若き時持ちたりし盾を携へて、闕の上を横ぎりつつありし時、その時かの二人は彼に跳び掛り

て彼を捕へ、髪の毛を取りて彼を引き入れ、痛ましき有様になして彼を床の上に投げつけ、彼の手足をその背に折り曲げて、厳しき細目にその手足を縛めき。レエアルティイメの子なる殺き善きオディシユウスが彼等に言ひつけし如く縛めき。而して彼等は彼の體に一つの縛はれたる繩を結びつけ、彼が屋根の梁に近く來りしまでかの高き柱に彼を吊し上げき。その時豚飼なるユウメエユウスは彼を罵り辱めて言へりき——

『今メラシヂアスよ、汝は汝にふさはしき一つ柔らかなる床に横りて、微宵を眠らずしてあるべし。又汝が館の内なる求婚者等の爲めに食事を調へるべくかの山羊を追ひ行くをつねとするところの時刻に於て、夙きあかつきがその金の玉座にありてオオシユエナスの流より出で來る時、そのあかつきは汝の目を逃るることなかるべし。』

斯く彼は恐ろしき縛めの中に残されたりき。而して彼等二人はその武装をなしたる後、かの輝ける戸を閉ぢて、賢き狡猾なる君主オディシユウスにまで行きぬ。その處に彼等四人が敷居の石に近く息づかひも荒く立ちたりし間に、それ等の他なる者は、多くの善き選手等は廣間のうちに在りき。その時チユウスの女なるアシイニはメントアの姿と聲とを装ひて彼等に近づきぬ。而してオディシユウスは彼女を見し時に悦びて言へりき——

『メントアよ、我等に味方せよ。而して汝に善き事をなしたる、且つ汝と齡を同じうするところの汝の親しき友を思ひ出よかし』

彼はそが軍勢を呼び集むる者アシイニなりしことを推し量りつつも斯く語りき。されどほかの側なる求婚者等は廣間のうちに呼ばはり叫び、先づダマストアの子エエジイレアスはアシイニを答めて言へりき――

『メントアよ、汝はオディシユウスの言葉に欺かれて求婚者等と戦ひ、彼を救ひ助くることをなさされ。何となれば、斯くの如くして我等は我等の願ふところをなしとぐべければなり。我等が父と子とこれ等の人人を屠り殺したらむ時、その後汝は彼等と共に滅ぶべし。何となれば、汝はこれ等の廣間のうちにかかる行ひをなさむとしてあればなり。さなり、汝自らの頭をもて汝は價を拂ふべし。されど劍をもて我等が汝の非道に打勝ちたらむ時、我等は總ての汝の持物を、汝が家に或は野に有てるところの總てをオディシユウスの富と一つになして我等自らの間に配ち、又汝の子等または汝の女等が館のうちに住むことを、或は汝の善き妻がイサカの市に留ることを許さざるべし。』

斯く彼は語りき、而してアシイニは心のうちに甚だしく憤りて、怒れる言葉にオディシユウ

スを責め咎めき、『オディシユウスよ、汝はもはやそのかみの如き強さと勇ましさを有たざるか。汝は九年の久しきに亘りて絶え間なく腕白き氣高きヘレンの爲めにトゥロイ人等と戦ひを爲しき。恐ろしき戦ひを爲して汝は多くの人人を屠り殺し、また汝の謀事によりてプライアムの道賊（道賊）き市を降だしき。然るに、汝が汝の家と汝自らの持物とに歸り來れるいま、如何なれば汝は汝自ら歎き悲しみ、かの求婚者等の前に立つことの勇氣に乏しきや。さなり、友よ、此方に來りて我に近く立て。我は汝に一つの物を示すべし。さらば汝はアルサイマスの子メントアが敵人等の間に在りて、汝の善き友情に報ゆるべく如何さまなる人間なるかを知る事を得む。』

彼女は語りき。而して未だ十分に明らかなる勝利を與ふることなく、尙ほ暫くの間はオディシユウス及び彼の名高き子の強さと勇ましさを試みき。彼女自らは薄暗き廣間の屋根の棟木の上（棟木）にまで、燕の飛ぶ如くして飛び行き、その處に燕の止まる如くとまりき。

いまタマストアの子なるエエジイレアスは求婚者等を勵ましたて、ユウリノオマスや、アムファイミイドンや、デイモトリイマスや、ポリクトアの子ピイサンドラスや、賢きポリパスを勵ましたりき。これ等の者は生き存へてその命の爲めに戦へりしところの求婚者等の中いと優れて勇ましき人々なりき。何となれば、他なる者等は既にかの弓と繁き矢の下とに倒れたりければなり。

その時エエジイレエアスは彼等の間に語りて、その言葉を總ての者等にまで知らしめき——

『友等よ、いまやつひにこの人は彼の恐ろしき手を安めるならむ。見よ、メントアはいたづらに大言壯語したる後彼を捨て去り、これ等の人々のみ戸の入口の處にとどまれり。さればいま、汝等の長き槍を諸共に投げ出だすことなく、寧ろいざ、デュウスがオディシユウスを撃ちて名を得ることを我等に許し與へむため、まづ汝等六人の者よ投げ出だせ。かの人にして倒れたらむには、他の者等は言ふに足らざるなり。』

斯く彼は語りき。而して彼等は何れも皆彼の言ひ附けし如く彼等の槍を烈しく投げ出だしき。されど見よ、アシイニはそれ等の槍の投げられしことを無益になしき。或るものは大いなる廣間の戸口の柱を撃ち、他なるものは丈夫なる扉を撃ち、また今ひとりの求婚者の有てりし青銅を穿かせたる秦皮（ホトリ）の槍は壁に突き刺さりき。斯くて彼等が求婚者等の總ての槍を避けたりし時、殺き善きオディシユウスはまづ彼等の間に語り始めき——

『友等よ、いま我はかの求婚者等の群に、彼等のこれまでの罪過の上に更に我等を屠り殺さむとたけり狂へる求婚者等の群に、我等もまた投げつくべきことを言はむ。』

斯く彼は語りき。而して彼等はいづれも皆覘ひを定めて彼等の鋭き槍を投げ、オディシユウス

はデイモトリイコスを撃ち、ティレマカスはユウリエディイズを撃ち、豚飼はエレエタスを殺し、牛飼はピイサンドラスを殺しき。斯くて彼等はいづれもみな彼等の齒をもて廣き床（ユカ）を噛み、求婚者等は廣間のいと奥まりたる隅にまで引き退きぬ。されど他なる者等は彼等の方に突き進み、死したる者の身體（ミカ）より投槍（ヘウチウ）を引き抜きぬ。

楮ていま一度かの求婚者等は烈しく彼等の鋭き槍を投げき。されど見よアシイニはそれ等の槍の投げられしことを無益になしき。或るものは大いなる廣間の戸口の柱を撃ち、他なるものは丈夫なる扉を撃ち、またいま一人の求婚者の有てりし青銅を穿かせたる秦皮（ホトリ）の槍は壁に突き刺さりき。されどアムフィミイドンはティレマカスの手首に軽く撃ち當て、青銅の槍は皮の面（オモテ）を傷つけぬ。而してティシツパスは高く盾の上を長き槍をもてユウメイユウスの肩端（カササキ）を掠め、槍は飛び越えて地に落ちき。やがて再びオディシユウスは、賢き狡猾なる彼と彼の人々とは彼等の速き槍を求婚者等の群にまで投げ出だしき。而してまたもやか（ヤカ）の市々（シヤヤ）を荒らす者オディシユウスはユウリデエマスを撃ち、ティレマカスはアムフィミイドンを撃ち、豚飼はポリパスを殺し、いやはてに牛飼はティシツパスの胸に撃ち當て、彼の上に誇らしげに呼ばはり言へりき——

『嗚呼ポリザアジイズの子よ、汝嘲ることを好む者よ、もはや愚かしく恣に大言壯語すること

をなさずして、總てのことを神々にまで委ね去れ。何となれば、實に彼等は汝よりも遙かに力強ければなり。この贈物はオディシユウスが乞食をなして家に入り來りし時、その時汝が彼に與へしところのかの牡牛の脚に對する償ひなり。』

かの歩み難む家畜を飼ふ者は斯く語りき。次にオディシユウスは彼の長き槍をもて近づき戦ひ、ダマストアの子を傷つけ、テイレマカスは彼の槍をもてユウイイノアの子リオクリタスの脇腹を突き、その青銅の穂尖を刺し貫きしかば、リオクリタスは斜めに倒れて、その額をもて地を撃ちき。その時アシニは彼女の恐るべき盾を屋根より高く差し上げ、求婚者等の心を脅しき。彼等はあだかもかの、春にありて長き日のはじまる時牛虻のむらがりとまるところの、また彼方此方へ散り行くところの牛の如く廣間の川を逃げ行きぬ。されどオディシユウス等はあだかもかの、山より出で來りて小さき鳥等の上に襲ひかかるところの、曲りたる爪と鋭き嘴とを有てる兀鷹の如く跳びかかりき。かの小さき鳥等が怖ぢ恐れて雲間を出で、低く野に飛び下れる間に、かの兀鷹は彼等の上に掴みかかりて彼等を屠り、その處には免るるべき如何なる道もなく、而して人々は觀て悦ぶなり。あだかもその如くオディシユウスの仲間等は求婚者等に跳びかかり、廣間の間を右左して彼等を襲ひ打ちき。而して彼等の頭の打たれし時に忌まはしき呻吟は起り、血はひろく床の上を流れき。

今リイオディイズはオディシユウスの膝に取り縋り、切に請ひ求めて翼ある言葉を語りき。『オディシユウスよ、我は汝の膝にとり縋りて請ひ求む。汝は我が上に恵みを垂れ、我を憫め。何となれば、これまで我は汝の館の内にありて、言にても行にても少女を辱めたることなし。むしろ我は求婚者等の中にてその如き事を爲したる他の者等に差し控えじめたればなり。されど彼等は我に聽き従ひて惡しき事を思ひ止まらざりき。されば彼等は彼等自らの前後を辨へざる行によりて耻づべき死に遭ひたり。然るに、彼等の間に預言者なる我は、如何なる惡しき行をも爲さざるなれど、彼等と同じく滅びざるべからず。何となれば、如何なる人間も、會つてその大の爲めに爲されたる善き行を思ふものにあらざればなり。』

その時智謀に富めるオディシユウスは物凄く彼を見やりて言へりき、『汝にして固に若し此等の求婚者等の預言者たらむには、汝は悦ばしき歸國の日の我に失はれたらむことを、また我が親愛なる妻が汝に従ひ行きて兒等を生むべきことを、此館の中にて屢々祈り求めしならむ。この故に汝は恐ろしき死を免るべきにあらざるなり。』

『斯く言ひて彼は、エネチイレエナスが殺されし時地に落したりしところの、一の劍を彼の強き手

に取り上げ、それをリイオディイズの頸に突き刺し、彼の尙ほ物言へりし間に彼の頭は壁に塗れ
き。

されどタアピイズの子なる樂人は、據どころなくして求婚者等の間に歌へりしフィイミアスは、
尙ほ如何にかなしく黒き運命を避け得むものと努め試みき。彼はその聲高き堅琴を手にして裏口
の門のところ近く立ちき。彼の内なる心は二道に分れき。即ち、彼はひそかに廣間を抜け出で、レ
エアルティイズやオディシユウスの股の肉の多くの片を燻きささげたりしところの、家の
廣庭なるヂュウス大神の見事なる祭壇に近く坐るべきか、或は直に跳り進みて、オディシユウス
の膝に取り縋り請ひ求むべきかの、二の道に彼の心は分れき。さて此事を思ひめぐらしし時、レ
アルティイズの子オディシユウスの膝をかき抱くこそ、打ちまさりたためと彼に思はれき。乃ち
彼はかの空洞なる堅琴を、葡萄酒を味よくするところの瓶と銀をもて象眼されたる高き腰掛との
間なる地の上に置き、彼自ら跳り進みてオディシユウスの膝にとりつき、彼に請ひ求めつつ翼あ
る言葉を語りき――

『オディシユウスよ、我は汝の膝に取り縋りて汝に請ひ求む。汝は我が上に恵を垂れ、我を憫め
よかし。汝にして若し、樂人なる我を、また神人と人人との前に歌ふところの我を屠り殺さむには、

そはあとにて汝自らにまで一の悲みとなるべし。實に我自らより他なる何者も我に教ゆることな
く、神は様様なる調べを我が心に吹入れぬ。而して我が思ふに我は、或る神の爲めに歌ふ如くし
て汝の爲めに歌ふなれば、されば我が頭を刎ねむと願ふことなかれ。而してティレマカスは、汝自
らの親愛なる兒はこれに就きて證すべし、我自らの心又は願ひよりして我がかの求婚者等の爲め
その饗宴に於て歌ふべく汝の家に行きしにあらざること。されどかの如く人多く且つ我よ
り強きままに、彼等は強ひて我に歌はしめたるなり。』

斯く彼は語りき。力強きティレマカスは彼に聽き、速かに彼の父の傍に在りて彼にまで語り
き、『汝の手を控へ、劍をもてこの科なき人を傷つけされ。更に我等をして、我が幼なかりし時我
が家の内にて常に我を護れりしところの僕ミイドンをも救はしめよ。幸にしてフィロイイティア
ス或はかの豚飼が既に彼を殺したるにあらざれば、或は彼がこの家のうちを荒れ狂へる汝に出で
合ひたるにあらざれば。』

斯く彼は語りき。心の賢きミイドンは彼に聽きぬ。何となれば、彼は新しく剝がれたる牡牛の
皮に身を包みて、一つの高き腰掛の下にうづくまり、黒き運命を避けたりければなり。乃ち彼は
速かに腰掛の下より身を起し、牡牛の皮を脱ぎ捨てて跳り出で、ティレマカスの膝に取り付き、彼

に乞ひ求めて翼ある言葉を語りき。」

『友よ、この處に我はあり。希くは汝の手を止めて汝の父にまで言へ。彼がこの館のうちに彼の持物を使い滅らし、その愚かさよりして汝を蔑になししところの求婚者等を怒りて、その大いなる力強さより鋭き劍をもて我を害はさらむ爲めに。』

智謀に富めるオディシユウスは彼に向ひて微笑を含みながら言へりき、『心安かれ。何となれば見よ、善き行ひが悪しき行ひよりも如何に立勝りたるかを、汝の心のうちに知り、また汝がそれを他の者にまで告げ知らすことを得む爲め、彼は汝を助け汝を救ひたればなり。されどこれらの廣間より出で行け。而して我が必ずや家のうちになさざるを得ざる可き總ての事をなし遂げたるまで、汝聲圓き樂人よ、汝は殺戮を離れて廣庭のうちに坐してあれ。』

斯くて二人は廣間より出で行きぬ。彼等は尙ほ死を待ち設けながら、周囲の様子を窺ひながら大いなるヂユウスの祭壇に近く坐したりき。オディシユウスは何人かが尙ほ生き存へてあり、黒き運命を避くべく包み隠したりしかを知るべく家の間を窺ひ求めき。されど彼は彼等の總てが血に塗れて倒れたる見出でき。そはかの漁人等が灰色の海より渚の凹みにまで綱の目にて引き來りしところの魚の如くなりき。その魚は鹽はゆき海の波を激しく濁き求めながら、砂の上に積み上げ

られてあり、日は照り出でて彼等の命を取り去るなり。斯く今求婚者等は互に相重りて横はりき。

その時智謀に富めるオディシユウスはテイレマカスにまで語りき——

『テイレマカスよ、行きて、我が爲めに乳人のユウリクリイアを呼び來れ。我は我が心にかかれるところの一の事を彼女にまで告げて言ふを得む。』

斯く彼は語りき。テイレマカスは彼の親愛なる父に聽き従ひ、戸を打ち叩き乳人のユウリクリイアにまで語りき、『我が家の中に總ての婢等を率ゐるところの老女よ、今起て。いざ、來れ。我が父は汝を呼びてあり。又汝に言ふべき事を有てるなり。』

斯く彼は語りき。而して彼女はそれを空しく聞き流すことなかりき。彼女は見事なる廣間の戸を開きて出で來り、テイレマカスは彼女に先ちて案内しき。かくて彼女は血みどろになれる死人の體の間にオディシユウスを見出しき。そは欄の中の牡牛を取り食ひて逃げ去らむとするところの獅子の如く見えき。而して總ての彼の胸と彼の双頬とは血を浴びて、見るに物凄き彼なりき。オディシユウスはその手も足も悉く、さばかり甚だしく血に塗れたりしなり。今かの乳人は死したる者共の體と大なる血こりを見しとき、さばかり大なる冒險を目撃したることの悦びの故に、聲高に呼び立てむとしき。されどオディシユウスは彼女を押し制め、その聲を出して翼ある

言葉を彼女にまで語りき——

『汝自らの胸の中において悦べ、老いたる乳人よ、而して靜かになし、聲高く呼ぶことなかれ。何となれば、殺されたる人人の上に誇らはしげにふるまふは邪よこしまなる事なればなり。今此等の人間に、神神の定めたるものと彼等自らの酷らしき行とは打ち克ちたり。何となれば、善きをも悪しきをも、彼等の間に來れる地上の何物をも彼等は敬はざりければなり。この故に彼等は彼等自らの前後前後を辨へざる行によりて耻づべき死に出で遭ひたり。されどいざ、我が家の中なる婦等の事を我に物語り聞かせよ。彼等の何れか我をないがしろになししぞ、またその何れか罪なき者なるぞ。』

その時善き乳人なるユウリクリイアは彼に答へき、『今ぞげに、我が兒よ、我は汝に總ての眞實を告げ知らすべし。汝の家には、如何にして機を織り、絲を紡ぎ、羊の毛を梳るべきかの如き、さまざまなる業わざを我等の教へたる五十人の婢はしたるあり。此等の者の中十二人は耻づるところを知らざるものとなり、我をも、彼等の女主オディシヌウスなるピネロオビをも憚らざるなり。而してティレマカスが彼の力強さに來れるはただ近き頃の事にすぎず、彼の母は彼が此家の中の女等に指圖することを許さざりき。されど今、我をして輝ける上の房にまでのぼり行かしめ、何等かの神より眠を送られてあ

るところの汝の妻にまで總てを告げしめよ。』

智謀に富めるオディシヌウスは彼女に答へて言へりき、『尙ほ彼女を呼び覺ますこと勿れ。されど、これまで邪よこしまに振舞へりしところの婦等をこの處へ呼び來れ。』

斯く彼は語りき。かの老いたる婦は婦等に告げ知らせて、彼等を速に來さすべく廣間をぬけて行きぬ。その時オディシヌウスはティレマカスと、牛飼と、豚飼とを彼自らの處に呼び寄せて、彼等にまで翼ある言葉を語りき——

『今汝等は死人を運び出すことをはじめ、かの婦等をして汝等を手傳はしめ、水と孔多あなき海綿とをもて見事なる高き腰掛と食卓とを拭き淨めよ。而して汝等が家の内を悉く片附けたる時、かの少女等を大なる廣間の外に、天井まろき室と廣庭の善き垣根との間に導き出し、その處に汝等の長き劍をもて彼等を屠れ。彼等より悉く幽靈の出で行き、彼等が求婚者等との間に屢々内密に味ひたりし愛の悦びを忘れ去らむまで彼等を屠れ。』

斯く彼は語りき。かの婦等は恐ろしき歎きをなし、大なる涙を注ぎながら群をなして集り來りき。かくて先づ彼等は屠られたる者共の體を運び出し、垣根をめぐらしたる廣庭の行廊の下に置き、一を他の上によせかけぬ。オディシヌウス自らは婦等を急がせ彼等に指圖しき。迫られて彼